

国際ロータリー第 2790 地区ロータリー米山記念奨学委員会

[2012-2013 年度米山奨学生卓話文集]

[絆 米山奨学会が求めているのはこの言葉だと思います。私たちが支援した奨学生が巣立つに当たり、これからも信頼しあい結ばれている事を忘れないために文集としました。]





目次

内容	月日	場所	担当	ページ
1)はじめに			得居ガバナー	P3
2-1)米山委員卓話		習志野中央RC	平野委員長	P4-P5
2-2)米山委員卓話		新千葉RC	平野委員長	P6
2-3)米山委員卓話		八日市場RC	平野委員長	P7
2-4)米山委員卓話		上総RC	織田委員	P8-P10
2-5)米山委員卓話			秋葉委員	P11
2-6)米山委員卓話		訪問RC	時田委員	P12-P14
3-1)学友卓話	10月21日	地区大会	頼明珠	P15-P19
3-2)学友卓話	10月21日	地区大会米山つどい	頼明珠	P20-P22
3-3)学友卓話	10月17日	松戸RC	頼明珠	P23-P24
4-1)奨学生卓話	9月14日	千倉RC	ゴンザレスマルティネスホセ	P25
	9月18日	大多喜RC	ゴンザレスマルティネスホセ	(4-1)
	9月25日	八日市場RC	劉維琴	(4-16)
4-2)奨学生卓話	9月27日	上総RC	劉鋒	P26-P27
	9月27日	鋸南RC	ゴンザレスマルティネスホセ	(4-1)
4-3)奨学生卓話	10月2日	千葉西RC	李 東昱	P28
4-4)奨学生卓話	10月3日	木更津東RC	吳美婷	P29-P30
	10月3日	銚子RC	劉維琴	(4-16)
	10月5日	勝浦RC	ゴンザレスマルティネスホセ	(4-1)
4-5)奨学生卓話	10月9日	市原中央RC	梁麗娟	P31-P32
	10月9日	鴨川RC	ゴンザレスマルティネスホセ	(4-1)
4-6)奨学生卓話	10月10日	館山RC	潘婧	P33-P34
4-7)奨学生卓話	10月15日	市川シビックRC	チャンチイマイフォン	P35-P36
4-8)奨学生卓話	10月15日	袖ヶ浦RC	褚笑雲	P37-P40
4-9)奨学生卓話	10月16日	八千代中央RC	白陽	P41
4-10)奨学生卓話	10月17日	富津シティーRC	王欣	P42-P43
4-11)奨学生卓話	10月18日	成田空港南RC	範雪奇	P44-P45
4-12)奨学生卓話	10月25日	茂原RC	王淑宜	P46-P47
4-13)奨学生卓話	10月26日	成田RC	唐瑩	P48-P50
4-14)奨学生卓話	10月29日	佐原香取RC	グエンテイホア	P51-P52
4-15)奨学生卓話	11月6日	千葉緑RC	サジーワニーツルマル	P53-P55
4-16)奨学生卓話	11月6日	銚子東RC(自クラブ)	劉維琴	P56-P58



4-17)奨学生卓話	1月17日	市川RC	張秀玲	P59-P62
4-18)奨学生卓話	2月4日	千葉東RC	イピュサン	P63-P65
4-19)奨学生卓話	2月21日	東金ビューRC	尹閑羅	P66-P68
4-20)奨学生卓話	2月26日	我孫子RC	楊鎮深	P69-P70
4-21)奨学生卓話	2月28日	鎌ヶ谷RC	胡中華	P71-P72
4-22)奨学生卓話	3月6日	小見川RC	チャンニヤットアン	P73-P74
4-23)奨学生卓話	3月14日	茂原RC	李恩京	P75-P77
	3月21日	松戸中央RC	イピュサン	(4-18)
	3月29日	松戸東RC	サジーワニーツルマル	(4-15)
4-24)奨学生卓話		千葉若潮RC(自クラブ)	康有美	P78-P79
4-25)奨学生卓話		銚子RC(自クラブ)	金ユリ	P80-P81



1)はじめに 国際ロータリー第 2790 地区 2012-13 年度ガバナー 得居 仁

2012-13 年度国際ロータリー第2790地区ロータリー米山記念奨学委員会は、委員全員がこれまで地区ロータリー米山記念奨学委員会に所属したことがないロータリアンで構成されています。

ロータリーの奉仕活動にプロは不要である、との信念から、素人といわれる地区ロータリアンの新鮮な感覚による奉仕活動によって、地区ロータリー米山記念奨学委員会に新風を吹き込んで、更なる米山記念奨学金制度の発展に寄与して欲しい、との想いに、今年度の委員会は充分過ぎるほどに応える活動をして下さいました。

地区大会でのホームカミングの実施、学友会の再整備・拡充、地区内の多くのロータリアンの強い要望に応えるための奨学生採用基準の策定と、枚挙に暇がありませんが、加えて、委員自身が、また奨学生の皆さんに同道して頂いての奨学生の卓話を、地区内の本当に多くのクラブで行って下さいました。

このような地区委員の皆様と、勉学の合間を縫ってクラブ訪問して卓話をして下さった奨学生の皆様のご苦勞を記念し、感謝するために、本卓話集を発行することにいたしました。

本冊子が、2012-13 年度国際ロータリー第2790地区ロータリー米山記念奨学委員会委員全員が衷心より願っていた、米山記念奨学金への地区内ロータリアン全員のより深い理解を呼び起こすきっかけとなりますことを念願しています。



2-1) 習志野中央RC米山委員卓話

米山委員長 平野一隆

米山奨学会委員会の主要な役目は、「寄付増進」「奨学生・学友」「選考」の3つです。

1 番目の寄付増進について

寄付増進のためには、まず、米山記念奨学事業への理解促進が第一、そのためには、それぞれのクラブで委員長の指導力発揮していただくことが必要と考え、クラブ委員長セミナーにおいてさまざまな情報を提示いたしました。

- ・全国及び地区内における米山奨学事業の説明
- ・前年度実績・奨学生名簿と活動状況・学友の群像とホームカミング
- ・指定校とその被推薦校
- ・広報のためのツールの活用
 - ①豆辞典 ②「ロータリーの友」よねやまだより③ハイライトよねやま
 - ④米山記念奨学会ホームページ紹介

ロータリー米山記念奨学会への寄付金は年々減り続け、2012 学年度には全国で 800 人採用できた奨学生数が、2013 学年度は 700 人と減っています。第 2790 地区で見ますと、27 人から 23 人となります。日本のロータリーにもっともふさわしい国際奉仕事業と言っても過言ではない「米山記念奨学事業」を衰退させないためにも、今年度の地区個人平均寄付目標金額(普通寄付を含む)を、昨年と同じ 15,000 円 以上とお願いしています。

2 番目の奨学生・学友について

奨学生ケアとカウンセラー制度の充実のため、オリエンテーション、研修会を行ってきました。

- 5 月 奨学年度開始にあたり奨学生・カウンセラーオリエンテーション
- 7 月 カウンセラー研修会
- 9 月 米山梅吉記念館研修探訪旅行
- 10 月 大会 2 日目 11:00 より 学友会主催「米山の集い」
本年度奨学生 27 名中 24 名が出席しました

「どんな奨学生に育ってくれたか」を念頭に置き、委員会と世話クラブ、カウンセラーは協力し、地区内ロータリーに認められるような奨学生を育てていきたいと考えています。

学友会とは、元米山奨学生と現役奨学生によって組織される会です。奨学期間終了後もロータリーと絆を結び、学友同士の友情を深める役割を果たしています。

10 月 14 日 学友会会則改正等を含む臨時総会開催いたしました。

- ・現役米山奨学生若干名を代表理事とする
- ・顧問に当該年度地区委員長が就任する
- ・地区より学友会助成金を給付する



等、地区委員会と地区学友会の更なる意志疎通を図り、学友会の自立を目指すために会則を改正しました。奨学生達には、様々な機会を通じて学友会活動への積極的な参加を強く呼びかけています。

また、今年度、地区で初めて「ホームカミング制度」を活用しました。ホームカミング制度とは、活躍する元米山奨学生をロータリー地区に里帰りさせ、旧交を温め、その成長と活躍振りをアピールしてもらうための制度です。大会 2 日目の明日 13:10 より、中国語圏を代表する村上春樹作品の翻訳家として著名な元米山奨学生 頼 明 珠氏の講演を行ったのはご承知の通りです。

3 番目の選考について

ガバナー指導のもと「指定校選定委員会」を組織し、過去実績・大学PR等を考慮して指定校・被推薦枠を協議し、結果 7 校増加 21 校と門戸を広げました。また、指定校に提示する「選考の目安」を決定しました。昨年からの主な変更点としては、

- ・指定校から複数の推薦者がいる場合は一カ国の国籍割合を30%以内とする
 - ・海外応募者対象ロータリー米山記念奨学金制度(来日初年度から留学生を支援できる新しい制度で、日本語力を合格条件にしない)を新たに採用する
- の 2 点です。

今後、11 月上旬に「選考委員会(面接官を兼ねる)」を組織し、地区の方針に統一の見解を持ち不公平のない選考をするために、面接官を対象としたオリエンテーションを導入する予定です。

「どんな奨学生を採用したか」地区内ロータリアンの期待に応えられるような奨学生を採用するという重い責任を認識し、選考は慎重を期して行います。

その後、地区内に「世話クラブ・カウンセラー制度」の理解を深めてもらうため、近年の世話クラブ実績を検討した上で、より幅広く世話クラブの案内及び依頼をする方針です。

得居ガバナーは、今年度地区ロータリー米山記念奨学会委員会に対し、「米山という、日本のロータリアンが世界に誇れる他に類を見ない優れた奨学金制度の素晴らしさを、地区内クラブ会員全員に一人残らず知ってもらえるような、啓蒙のための活動をお願いします。」と仰いました。

私達地区委員はそのことを念頭に置き、奨学生・学友を伴っての卓話を積極的に行なっております。地区委員からの、米山奨学事業についての説明解説を求められるクラブもあります。現在までに 20 クラブ、残り 9 クラブ、合計 29 クラブから卓話依頼ありました。委員会では、奨学生全員に1度は卓話をさせたいと考えており、これ以降も卓話予定のないクラブに働きかけ、積極的に卓話に出かける予定です。



2-2) 新千葉RC米山委員卓話

米山委員長 平野一隆

こんにちは。大原RCの平野です。

本日は、地区米山記念奨学会委員会の卓話のために貴重な時間をいただきましたことに感謝申し上げます。

何も知らずにお伺いし、失礼があつてはならないと、新千葉RCのロータリー米山記念奨学事業への携わり方を調べてまいりました。

そこには、驚くほどの実績がありました。メジャードナー3名、特別功労法人2社、功労法人5社、そして多くの皆さんが米山功労者であり、また準功労者でいらっしゃいます。

また、地区内の寄付金過去累計実績は84クラブ中、成田RCについて2番目、それも、この2クラブは5千万円以上と他の追随を許さないほどの金額です。単純に考えても実に年間1百万円以上になるのです。

それもそのはず、過去に5名もの方が地区米山記念奨学委員として活躍をされ、世話クラブとして23名もの奨学生をお世話いただけてきたのですから、さぞや会員の皆様も「米山記念奨学事業」への造詣？が深いであろうことが推測されたのです。

そのようなクラブの皆様に、今更何をお伝えすればいいのか戸惑いながらも、今回改訂された「豆辞典」のPPがありますので、これを使って時田委員から米山記念奨学事業の説明をさせていただきます。より一層のご理解がいただけたら嬉しく思います。

最後に、

近年、そして最近は特に中国情勢に対して思うところのある方もいらっしゃるはずですが、私自身が改めて、それを含めた米山記念奨学事業のあり方を考えてもいます。そのことについては、PP終了後時間の許す限りご意見を頂戴し、また、我々委員会の方向性をお伝えできれば幸いです。よろしくお願いたします。



2-3) 八日市場RC米山委員卓話

米山委員長 平野一隆

得居ガバナーの方針である「地区内クラブ、全会員に米山奨学事業の素晴らしさを理解していただけるような活動」を目指す我々地区米山委員会は、9月から11月にかけて、各クラブへ卓話の時間をいただけるよう働きかけてきました。そのような中、こうして趣旨をご理解いただき、卓話の機会を与えていただきましたこと感謝申し上げます。

本日は、年度が始まり、10月の「米山月間」を迎えるに当たり、啓蒙のための資料のご紹介と、今までの米山委員会の活動や今後の計画をお伝えしたく資料を用意いたしました。

—資料 1—

米山事業の素晴らしさを理解してもらうには、様々なツールが用意されています。

—資料 2—

「今年度、どんな奨学生が、何人、何をしているか」についての、参考資料です。

—資料 3—

「どんな奨学生を選ぼうとしているのか」についての、参考資料です。

—資料 4—

「その成果、どんな奨学生が育ったか」についての、ご案内と参考資料です。

米山記念奨学会事業を継続・発展させていくためには、現実的に資金が必要です。そしてその資金とは、我々ロータリアンの寄付金です。

ガバナーは当初、「米山奨学事業の素晴らしさが解ってもらえたならば、寄付金の額は後から付いてくる数字だと考えましょう」と仰っていました。しかし、私は、こうして実際に寄付をお願いする立場でもありますので、「目安となる目標金額を設定したい」と強く申しました。そして、今年度も例年通り「会員一人あたりの個人平均寄付金額」の目標を15,000円と、させていただきます。その理由は、全国平均額が14,600円、この千葉県においては少なくともその金額を上回りたいこと、そしてこの米山事業を衰退させないために、少なくとも従来と同じ金額を維持、更には上回りたいと考えていることです。

幸いなことに普通寄付は各クラブ4,000円以上をお約束いただいているようです。後は、特別寄付として、個人から、もしくはクラブ全体で一人あたりの平均が11,000円以上をお願いしたいのです。1年で11,000円…クラブの会長さん幹事さんはじめ会員の皆さんに、米山事業についての理解を深めていただけましたら…決して不可能な数字ではないと思っております。

ご助力のほど、よろしくお願いいたします。



2-4) 上総RC米山委員卓話

米山委員 織田信幸

上総RCの皆様、こんにちは。私は今年度、地区ロータリー米山記念奨学会委員を拝命しております、松戸RCの織田信幸でございます。どうか宜しくお願い申し上げます。

このような貴重な場でお話をさせていただきますこと、誠にありがとうございます。本日は米山奨学生で、千葉大学大学院博士課程3年の劉鋒さんと例会に出席させていただきました。日頃より米山奨学金事業に多大なるご理解、ご協力を頂き、米山奨学生の皆さんに奨学支援が出来ます事、地区委員会を代表致しまして心より御礼申し上げます。

本日は私が長々とお話することよりも奨学生である劉邦さんから皆さんに感謝の気持ちと伝えることが一番と考えますが少々のお時間を拝借し私の方から米山奨学金についてお話しさせていただきます。

データを見ますと上総クラブの皆様にご寄付頂いた寄付金は、過去累計で¥8,741,350円となっており、昨年は会員一人当たりの平均寄付額は¥19,000円超と当地区の平均(¥13,700円)をはるかに上回っております。

皆様の米山奨学事業に対する熱意の表れと深く感謝しますとともに是非、今年度も平均寄付額を上回る額のご協力を宜しくお願いいたします。

さて、本日は米山豆辞典をもとに米山記念奨学事業、寄付金の使われ方と寄付金の減少、そこから出てくる問題についてお話をさせていただきます。

多分、ここにお集まりの皆様の中にはわたくしよりも米山奨学金事業について詳しい方がたくさんいらっしゃると思いますが、役目柄ということでお許し頂き、深くご理解を賜りたいと存じます。

まず、本日はお伝えしたいことはロータリー米山記念奨学会の財政事情であります。

今年3月に開催された財団公益法人米山記念奨学会理事会においてにおいて来年度の奨学生が 800 人から 100 名少なくなり 700 人になりましたことをご報告します。

米山記念奨学事業は、全国のロータリアンから毎年いただく寄付で支えられております。

2011-12 年度の寄付金は 12 億 9,500 万円で奨学金・事業費にかかった 14 億 400 万円に対し、1 億 1,000 万円の不足でした。不足分は特別積立財産を切り崩して補いましたが、もうこれ以上は取り崩すことが出来ないということでもあります。

ここで皆様に基本財産と特別積立財産について説明させていただきます。

財団法人の監督機関である文部科学省の指導を受け、財団法人を構成する基本財産として 50 億円を積み立て財団法人として認可された訳であります。また、それ以外に特別積立財産というものが積立あります。これは不測の事態に備え、奨学金を保証する為、別枠で積み立てておくものあります。

この特別財産は 1998 年には最高 42 億円ありましたが奨学生の採用人数や寄付金の減少により徐々に取り崩し昨年にはとうとう 25 億 1,800 万円にまでなってしまいました。

奨学会では寄付金収入に見合った支援規模とするため、2005 年度より奨学生を 1000 名から 800 名に減らして奨学事業を行ってききましたが、2009 年より寄付金収入が事業費を下回るようになりました。

寄付金減少による不足分を補うために、2010 年度と 2011 年度は特別積立財産を取り崩して 800 名支援を維持してきましたが、2011 年度の取り崩し実行により過去の理事会で決定された取り崩し限度額(25 億円)に達し



たことから、これ以上の資産取り崩しによる補完は出来なくなりました。

先程も述べましたが 2011-12 年度は1億1千万円の不足で奨学会としてはこれ以上この特別財産を取り崩せないということでもあります。

当然、奨学事業に補填していた取り崩し金がなくなれば結果として来年度から奨学生採用人数が減らざるを得ないわけでもあります。

現在、当地区には 27 名の米山奨学生がおりますが全国規模で採用人数が 100 人も減るということは当たり前前のことですが当地区においても採用人数が減少してしまうことは必然であります。

当地区の一人当たり平均寄付額は、昨年度 2011 年度は 13,714 円で全国平均の 14,624 円を 910 円下回っております。

地区で奨学生を何人採用できるかは、ほぼ、寄付額の全国比で決まります。

まして平均額を下回っている現状を考えると来年度は大変厳しい数字が出てくるわけでもあります。

今年度の採用人数は 27 名でその内訳は今年度で修了する奨学生(9月終了2名含む)が 21 名、来年(2014 年 3 月)までのマルチ(2年)採用が 6 名であります。2013 年度採用はすでに 27 名から 23 名になることが決まっておりますので新たに採用できる奨学生は 17 名になってしまいます。このままで行くと再来年以降はもっと下がってしまう可能性もあります。

今年度、地区としてのお願い目標は昨年同様、一人当たり平均寄付金額 15,000 円でありますが少しでも目標額を上回ることでも一人でも多くの奨学生を採用できるよう、取り組んでいく所存ですので何卒ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

最後に寄付金について特別寄付は勿論の事、普通寄付も税額控除の対象となります事を申し添えさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。



卓話集に寄せて

『あなたに会えてよかった』

もし、あなたが日本を留学先に選ばなかったら
もし、あなたが千葉の大学に入らなったら
もし、あなたが米山奨学金の存在を知らなかったら

そして、受からなかったら

もし、私がロータリアンに出会わなければ
もし、私がロータリーに誘われなければ
もし、私がロータリークラブに入会していなければ
そして、米山の委員として地区に出ていなければ
たぶん、あなたに出会えなかったでしょう

偶然と偶然の積み重ねで、私たちは今、ここにいる
限りなく奇跡に近い確率で今、ここにいる
縁とは不思議なモノそして大切なモノ
この出会い、縁を大切に生かさなくて何としよう

あなたに会えてよかった



2-5) RC米山委員卓話

米山委員 秋葉幸男

奨学生のみなさん、この一年間の奨学期間を終了し また新たなステージへと旅立つことに心よりお祝い申し上げます。

みなさんにとってのこの一年はどんな年でしたか？

おそらく貴重でかけがえのない充実した一年であったことと思います

さて私は今年度初めて米山記念奨学会委員として奨学生のみなさんと一緒に活動させていただきましたが、常にサポート役としてみなさんのバックアップをしておりましたのでみなさんとのかかわりも少なかったように思います

一年ほど前までは私自身米山記念奨学会の事については、存在こそ知ってはいましたが活動内容についてはあまりよく理解しておりませんでした。おそらく奨学生のみなさんも選考される一年前までは米山記念奨学会なるものについては知識もなかったに違いありません。

私は この一年間の活動やみなさんとのかかわりの中で奨学会についての多くを学ぶことができました、優秀な皆さんであればもっともっとたくさんの事を学んでいただけたかと思えます。これから大切なことは奨学生としての様々な活動や多くの人々とのかかわりを

通じて日本が世界に誇れる米山記念奨学会の事をそしてまたその精神を皆さんご自身で直接伝えていただけたらどんなに素晴らしいことかと思えます、どうぞお願いします。

奨学生のみなさんと過ごしたこの一年間で多くの事が思い起こされますが、中でも印象に残っている事が3つあります。

一つ目は初めて皆さんと初めてお会いした、オリエンテーションでの一人一人、緊張した初々しい姿をよく覚えております。そんな皆さんが今では見違えるほど大きく成長されたすがたがとても嬉しく思います。

二つ目は昨年の秋に行った探訪旅行での思い出です。ビデオカメラで撮影をしたデーターが機器の不調で画像が残っていなかった事、記念の旅行の思い出が残らなかったことがとても残念でした。

三つ目は唯一私が奨学生のグエンさんを伴って出向いた香取ロータリークラブの卓話でした。グエンさんの卓話を聴いて感動のあまり涙を流す人もいたほどの感動的な内容で彼女の日本に対する熱い想いや、家族への深い愛情が感じられる彼女らしさが表れたお話でした。

終わりに、奨学生のOBになられても米山記念奨学会とのかかわりを持ちながら輝かしい未来へ向けさらなる飛躍ができますことを心よりお祈り申し上げます。

一年間ありがとうございました。



2-6) 訪問RC米山委員卓話

米山委員 時田清次

こんにちは。

市原中央ロータリークラブの時田です。よろしくお願ひします。

諸先輩を前にして、米山を語ることは、僭越と思ひますが、

2790 地区米山奨学委員として、皆様にお伝えしなければ、いけないことと、お願ひがあります。

それは、

最近、中国、韓国との間で、領土問題について、緊張感が高まっています。

この問題は、日本人であると同時に、ロータリアンとして、平和を考える、いい機会だと考えています。

日本のロータリーが誇る、米山記念奨学事業は、二度と戦争の悲劇を繰り返さないために、

国際親善と、世界平和を目的に、1952年、日本で最初のロータリークラブを創立した、

米山梅吉翁の功績を偲ぶことができる事業として、当時のロータリアンの強い思いで作られたものです。

米山記念奨学事業の使命とは

「将来、日本と、世界とを結ぶ、「架け橋」となって、国際社会で活躍し、

ロータリー運動のよき理解者となる、人材を、育成することです、

これは、ロータリーの目指す、「平和と国際理解の推進」、そのものです。」

日本に限らず、領土問題などによって、民間交流という絆は、時に途切れそうになり、不信を抱くこともあります。

けれども、理解なくして友情は生まれず、友情なくして真の平和は、ありません。

人と人との、交流の積み重ねこそが、絆を、少しずつ強くします。

今年は反日デモで異常な状態ですが、去年こんなエピソードがあります、尖閣諸島問題で、日中両国の緊張が高まる中、

中部名古屋みらいRCの一行が、

北京の米山学友会を訪ねました。

しかも、この日は9月18日、満州事変が起きた、国辱の日として、

中国では、最も日本への反発が、高まる日でした。

「なぜ、このような時期に、日本人が、中国に来たのか？」

中国人はなぜ、日本人を歓迎できたのか？」

そこには共通の何が、あったのか？」

それは「ロータリー精神」、でした。

当時の、米山学友会会長キグンさんは、

「ロータリー精神」とは国境を越えて、政治問題を越えて、歴史問題を越えて、

将来、必ず宗教と紛争問題をも越えられる、



人類が共有すべき、基本的価値観追及する精神です。」と、話しています。
このように、どんな困難も乗り越えていかなければ、絆は強くなりません。
そのためにも、米山奨学事業の使命を再確認し、事業を支援していかなければ、
いけないと思っています。

米山奨学事業の理念として

「将来の、日本の生きる道は、平和しかない。
その平和日本を、世界に理解させるためには、
アジアの国々から、一人でも多くの、留学生を日本に迎え入れて、
平和日本を、肌で感じてもらうしかありません。
それこそ、日本のロータリーに、最もふさわしい、国際奉仕事業なのです」
この、理念のもと、日本のロータリーが60年間つないできた、
米山記念奨学事業のタスキを、私たちが引き継いでいかなければいけません。

米山記念奨学事業を、継続していくためには、事業収入が必要です。
この事業収入の奨学金は、すべてロータリアンの寄付金から、成り立っています。
2011 年度決算では、寄付金収入が 1295 百万円ありました。
それに対して、奨学金と補助金が 1404 百万円だったため、
不足分は、特別積立財産から、取り崩して補いました。
しかし、この特別積立財産も、取り崩しの最低ラインである25億円に
なってしまったため、
2013年度は、奨学生数を800人から700人に減らして
事業費を抑えることになっています。
2790地区では今年度、27名の奨学生が採用されましたが、来年度は23名の
奨学生の採用となっています。

昨年度の全国平均は 14624 円でした。最も高かったのは、第 2590 地区（神奈川県横浜市、川崎市）
の 28924 円でした。
2790 地区の一人当たりの年間寄付額は 13714 円で全国 17 位でした。
前々年度の 2790 地区の一人当たりの年間寄付額は約 15000 円で全国 14 位でした。
今年度の目標は、前々年度に戻るよう、
普通寄付金 4000 円と、特別寄付金 11000 円で、1人当たりの、年間寄付金合計を、
15000 円と、させていただいています。
地区での奨学生を、何人採用できるかは、ほぼ、寄付金額の全国比で、決まります。
1 人でも、多くの奨学生を、採用できるように、今年度も、目標に向けて、ご協力をお願いします。



ロータリー米山奨学会は、内閣府より「公益財団法人」の認定を受けているため
当会への寄付金には、所得税、法人税の税制優遇処置が、受けられます。
来年の確定申告では、従来の「所得控除」に加え「税額控除」の、どちらか有利な方を、
選択できます。

1年間で、2000円以上の特別寄付をされた方には、翌年1月末までに、申告用の、
領収書と、税額控除に係わる、証明書が発行されます。

どれくらいのメリットが、あるかの一例として

課税所得額750万円の方が、10万円寄付すると、39200円の所得税が、還付
されます。

ロータリー米山記念奨学事業とは、日本の全ロータリアンが参加して推進している
事業です。

1年間に全国で800人、これまでに121か国から17029人を支援しています。

日本には外国人留学生を対象とする民間留学団体が129団体ありますが米山はそのなかで
最大の事業規模です。

今後、海外からのより多くの留学生を呼び寄せようとしている日本の留学生政策にも大きく
貢献しています。

留学生の選考の目安は、

- ① 日本語で、意思疎通のできる学生、及び努力が認められる、学生である。面接は、すべて日本語で行う。
- ② ロータリー活動に、関心を持ち、積極的に、参加するとともに、将来は、母国と日本の親善を、深めようとする、使命感がある。
- ③ 複数の推薦者が、いる場合は、1か国の国籍割合を、30%以内とする。

また、新しい取り組みとし

「海外応募者対象、ロータリー米山記念奨学制度」があります。

新しい制度で、日本語力を合格条件にしない、点が特徴です。

「漢字圏内に、偏ることなく、多彩な国地域からの、留学生やバラエティーにとんだ
研究分野から、採用が可能になります。」

当地区では、昨年度まで、この制度を採用しませんでした。今年度から採用をする、こととしました。
日本国内の、昨年度実績としては、中東、アフリカ、ヨーロッパの国々からの採用がありました。

このような、米山奨学事業の使命、実情を理解いただき、御寄付のご協力をお願いします。



3-1) 2012-2013 年度 2790 地区大会ホームカミング 学友 頼明珠

ロータリークラブの皆様、今日は！

私は 1975 年台湾から千葉大園芸学部に留学した頼明珠です。1977 年から 1 年間、米山奨学生としてロータリークラブの方々に大変お世話になりました。そのときから 35 年があっという間に過ぎました。

この度、ロータリークラブ米山奨学生の「ホームカミング制度」にご招待いただき、まことに光栄です。

17 日、私の世話クラブ松戸ロータリークラブの例会へもご挨拶に伺いました。35 年ぶりの再会でした。けれども、そこでよく拝見すると、皆様はすっかり若返られましたね、と感心します。私は年を取ってしまって、浦島太郎になったような気持ちです。

なるほど、35 年ぶりですから、クラブのメンバーの世代も変わりました。当時の松戸クラブの会長林一様及び私のカウンセラーの小川甚次様をはじめ、多くの方々が現役を引退されました。今若い世代の皆様がロータリークラブのメンバーになって、松戸だけではなく、千葉県全体と、日本全国で、米山奨学事業を引き続きご支援くださっていることは、本当に意義深いことで、心から尊敬致します。

今日ここで皆様の前に立って、昔のことを思い出しながら、お話をするなんて、夢を見ているような思いです。この場をお借りして、皆様に厚くお礼を申し上げたいです。本当にありがとうございました。

わたしのカウンセラーは小川甚次さまです。小川様一家は、私を家族のように暖かく迎えて下さり、日本の生活のいろいろなことを親切に教えてくださいました。また、福岡書店の福岡芳弘様にも、日本の文化や歴史の本をたくさん読ませていただきました。立原病院の立原先生は、私の毎月の卓話の原稿をチェックしてくださいました。松戸クラブの方々は、例会や外への見学旅行の時に、親切に話しかけて下さいました。留学中にロータリークラブの思い出がいっぱい出来ました。

日本への留学は、私にとって最初の海外旅行で、そして生涯で一番大事な転機になりました。私の人生を変えたともいえます。なかでも、米山奨学金をいただいたことは、私にとって、いちばんラッキーなことでした。

どうやって恩返しをしたらいいか、ずっと考えていました。

ロータリーの精神に習って、善意の輪を作って、傍に助けが必要な人がいれば助けてあげることも、一つの恩返しの方法だと思います。

また、日本で学んだことを生かして、仕事を通して社会に貢献するのも一つの恩返しだと思います。

私は、台湾米山会の OB たちと一緒に、米山梅吉公の記念館を 2 回見学したことがあります。見学して、米山梅吉公は日本のロータリークラブの創立経緯と奉仕の精神、及び米山記念奨学事業の歴史について、より深く理解することができました。

ロータリー米山記念奨学事業は、今日では、まさに民間最大の奨学団体です。

世界で活躍する 1 万 7 千人を超える元米山奨学生の内、台湾出身の米山奨学生は 3 千名を超えました。奨学



生たちは帰国後、日本と関連のある企業に勤めたり、各専門分野で仕事をしたりしていますが、一番多いのは大学の先生です。皆日本で学んだことを生かして活躍しています。そして、皆つねに「水を飲めば、その源を思う」という合い言葉を覚えています。

1983 年、台湾の米山奨学生の OB たちが「中華民國ロータリークラブ米山記念奨学会」を結成しました。歴代の理事長の徐重仁さん、許邦福さん、陳思乾さん、阮允恭さん、許国文さんをはじめメンバーたちは、台湾と日本の交流と、社会・教育・文化への奉仕活動を積極的に推進して来ました。

2006 年、米山会員大会のとき、許国文現理事長の提案で、当時の理事長阮允恭さんの支持とメンバー全員の賛同により、台湾ロータリー米山奨学金制度を創立しました。それは、日本人留学生に対して、毎年 1 名、奨学金を贈るという事です。2010 年の大会では、更にもう 1 名を増やすことを決めて、2011 年から毎年 2 名の奨学生を迎えています。

毎年 12 月の年末総会には、日本の米山会から板橋理事長と坂下事務局長、それに各地のロータリークラブの方々が、遠路はるばる日本からお越し下さって、米山奨学会のことを相談したりして、一緒に楽しい時間を過ごしています。まことに感謝いたします。

台湾と日本は、台風と地震の多い自然環境がよく似ています。震災のとき、お互いに心配し合います。去年三月の東日本大震災の時、台湾では、ただちに全土を挙げて支援活動が始まりました。米山会のメンバーも、すぐに活動に参加しました。1ヶ月で 257 万 6 千円の募金を集めて、日本の米山奨学会を通して、被災地に送りました。皆、心の中で、日本人頑張っ！と祈りました。

台湾と日本の経済と文化の交流も、普段から盛んに行なわれています。

最近の世論調査によると、台湾人が一番好きな国は日本で、一番旅行したい国も日本です。

台湾人の日本に対するイメージは、「経済力、技術力に優れる国」、「自然が美しい国」、「決まりを守る国」、「豊かな伝統と文化を持つ国」で、多くの方が好感を持っています。

特に若い世代で、対日感情がきわめて良好です。

これは、日本のテレビドラマや漫画や小説の影響が大きいと思います。

そして多くの小説家の中で、圧倒的な人気があるのが村上春樹です。

私は村上さんの作品を翻訳していますが、とても幸せだと思います。

そもそも私がどうして日本語を習ったかと言うと…

大学 2 年のとき、ある先生から「日本は翻訳と出版が進んでいるので、世界中の新しい情報がすぐ翻訳出版されるから、日本語が出来ればとても便利だよ」と聞いて、日本語を習いたいと思いました。しかし、大学の授業ではすでにドイツ語を取っていましたから、大学の近くにある塾で日本語を習い始めました。ドイツ語の方は使う機



会がぜんぜんないので、その後全部忘れしました。

一方、日本語の方はずっと習い続けて、日本へ留学して、帰国してからは翻訳の仕事をするようになりました。

そもそも私が村上春樹の作品を翻訳し始めたのは、1982 年から日本の雑誌の書評で村上春樹という名前と作品の紹介を何回も読んだことがきっかけです。それで本屋へ行って、本を買ってきて、次々に読んで、すっかり好きになったからです。

また、川本三郎さんの評論『都市の感受性』で、村上さんの作品の時代背景や文体などについてを読んで、村上さんの小説を訳したくなりました。それで、私は村上さんの3つの短編を訳して、作者紹介を書いて「新書月刊」という雑誌に投稿しました。また、『風の歌を聴け』と『1973 年のピンボール』を訳して時報出版社に投稿しました。

それから 26 年間、村上さんの作品は台湾で 45 作が訳されました。そのうち私は 35 作を訳しました。

台湾では、いま村上さんの作品は大変評価されています。

ある読者は「村上春樹の顔は将来夏目漱石の次に、日本の紙幣に印刷されるだろう」と予言しました。私もそれが実現するように祈っています。

2 年前、台湾大学の図書館が「日本文学の歴史――万葉集から村上春樹まで」というテーマで、特別蔵書の展覧を行いました。村上さんの作品の影響力の大きさをよく反映しています。

台湾大学の近所には「ノルウェーの森」と「海辺のカフカ」という名前のコーヒーショップがあり、若い学生の溜まり場になっています。

村上さんについて幅広く研究が進められています。

今年 6 月、淡江大学の日本語学科は「村上春樹国際学術研究会」を開きました。

村上さんの作品が海外で読まれるようになったのは 80 年代アジアから始まって、90 年代になると、アメリカとヨーロッパ各国で次々と翻訳されるようになりました。現在村上作品は世界中の 46 の言語で翻訳されています。

村上さんは作品の中でも、よく千葉のことについて書いています。

例えば、小説家になったばかりのころ、群像文学新人賞をとって、店をたたんで、小説家になる決心をした時、千葉の習志野に引っ越して、3 作目の小説『羊をめぐる冒険』を書いて、『野間文芸新人賞』をとりました。村上さんは「その作品が小説家としての実質的な出発点だった」と言いました。



その時から、村上さんは、小説家になるためには体を鍛えなくてはならないと考えて、日々走るようになりました。これは『走ることについて語るときに僕の語ること』に書かれています。その後も、村上さんは「時々千葉県開催のマラソン大会に参加する、近くにあるホテルの大浴場の割引入場券がもらえる。」と『村上ラジオ2』に書かれています。

また、『日出る国の工場』には松戸の結婚式場、『1Q84』には千倉の老人ホームなどが出てきます。私は翻訳しながら千葉のことを思い出して、とても懐かしい気持ちになりました。

先月 28 日の朝日新聞に、村上さんの記事が大きく掲載されました。「魂の道筋 塞いではならない」という記事です。最近の国境問題で、日中韓の文化交流への影響を心配するという記事です。この記事は台湾のテレビや、新聞でもすぐ報道されました。

2009 年イスラエル最高の文学賞が村上さんに贈られました。

授賞式の講演で、村上さんは、イスラエルによるパレスチナ自治区ガザへの攻撃を大統領の前で批判しました。体制を壁に、個人を卵に例えて、「どんなに壁が正しく、どんなに卵が間違っているても、私は卵の側に立つ」と強調しました。

この講演は、インターネットを通してすぐに世界中に広まり、英語の原文が台湾の読者によってすぐ自主的に中国語に翻訳されました。多くの人は村上さんの正義感と勇気を、あらためて称えました。

また、村上さんは、お父さんが毎朝戦死者、敵と味方と関係なく、死者全員のためにお経を上げていたということを行いました。中国や台湾の読者だけでなく、アジアのすべての国の人々はその話を聞いて感動したと思います。

結果は、中国の莫言さんが受賞しました。

中国人として初めてのノーベル文学賞者で、目出度いことです

しかし、中国と香港と台湾の読者は、がっかりした人が多いです。なぜなら、村上さんのファンが圧倒的に多いからです。

しかも、公平に言って、村上さんは賞を取る資格が十分あると思います。

もし、私がノーベル賞の審査員であれば、この賞を彼に与えます。

その理由は、

第一、村上さんの作品には、人生の哲学と生活の智慧がたくさん含まれています。

第二、今までこの賞は、戦争で直接被害を蒙った方に与えられたことが少なくないようですが、わたしたちは、たとえ戦争状態になくても、自然の災難と戦い、不合理なシステムと戦い、自分の弱さと戦っています。孤独で、凡



庸な自分がどうやって自分と向き合うか、環境に対応するか、どうしたら精神を豊かにできるか。村上さんは知恵を絞って、分かりやすい言葉と面白い物語を使って、**自分と戦うこと**を読者に教え、生活のヒントを多く与えてきました。これは村上さんの大きな努力による達成だと思います。

第三、村上さんは、作品の中で世界中の素晴らしい文学作品、映画、音楽を読者に紹介しています。彼の作品を読めば、世界中の素晴らしい作家や音楽家やアーティストの作品を鑑賞できます。

村上さんの作品は世界で多くの言葉に翻訳されています。また、村上さんは英語の作品、特にアメリカの名作を何十冊も日本語に訳してきました。翻訳され、翻訳することによって、東洋と西洋の文化の交流を促したことも、大きな貢献だと思います。

第四、村上さんは毎日体を鍛えています。毎朝 4 時に起きて、小説を書き、午後は翻訳して、運動をしています。毎年マラソン大会に参加しているほか、トライアスロン大会にも出ています。多くの若い読者は彼の努力に感動して力を貰ったかのように、マラソンを始めたか、生活を変えたり、自信を得たり、傷を癒されたりしています。村上さんは世界中の若い読者にとって人生の先生のような存在になっています。

この度、村上さんが賞を見送られたのは、残念でした。

私は、村上さんが早くノーベル賞を貰えるように、祈ります。

村上さんの作品を翻訳できる事は、とても光栄で、幸せだと思います。これも、日本に留学したお蔭で、そして、ロータリークラブ米山奨学会のお蔭です。この度「ホームカミング」にお招きいただき、ロータリークラブの皆様と再会できて、なにより嬉しいです。いま、この場をお借りして、ここに来られないほかの米山奨学生の感謝の気持ちもお伝えしたいです。

皆様、本当にありがとうございます。

皆様のご健康とロータリークラブのご繁栄と世界の平和をお祈りします。

これからもよろしく願いいたします。



3-2) 2012-2013 年度 2790 地区大会米山の集い

学友 頼明珠

みなさんこんにちは！

35 年前、私も皆さんと同じように若かったです。

私は 1975 年の 10 月ちょうど今頃日本に来て、1977 年からロータリークラブの米山奨学金を一年間いただきました。

その頃、日本は経済が安定期で、各分野とも好景気でした。

留学して一番よかったと思うことは――

日本人の心と日本の言葉を勉強した事と思います。

ある休みの日、私が松戸の町に出て、小さなラーメン屋に入ると、壁に「心を込めて作ります」という言葉が張ってありました。ラーメンやまで、心を込めてラーメンを作るのですか？と感心しました。後、あちこちの店でよくこの「心を込めて」という一言に出会いました。

これは私が選んだ日本人の精神を代表する言葉と思います。

日本人と日本社会に習ったこと、印象が深かったことを簡単に三つを挙げます。

一つは 何でも心を込めてすること。人に思いやりがあります。

一つは 礼儀ただしこと。つねに他人に迷惑をかけないように気を使います。

一つは 完璧を求める精神を持つこと。研究と芸に熱心に打ち込みます。

日本社会で暮らして、友達が出来て、日本と日本の文化への理解が深まりました。そして日本がもっとも好きになりました。

私が日本にいた頃、1976 年村上龍が「限りなく透明に近いブルー」で

一気に群像新入文学賞、芥川賞、と新風賞をとりました。

そのとき、村上春樹はまだ無名で、ジャズ喫茶店を経営していました。

私は 1978 年修士課程を修了して、台湾へ帰りました。

翌年の 1979 年村上春樹は「風の歌を聴け」で群像新入文学賞を取りました。

人生は仕事から一番自分の生き甲斐を感じられると思います。

自分の能力を発揮して、他人のために、仕事を通して、社会に貢献する時は、自分が生きている価値を感じます。

私は、いろいろまわり道をして、最後に、やっと翻訳の仕事に就きました。

大学で農業経済を専攻しました。日本留学した時千葉大の大学院でも農業経済を勉強し続けました。しか



し、台湾へ帰って、大学の先生になるより、自分は社会で働きたくて、広告会社に入って、コピーライターになりました。

コピーライターの仕事をしながら、だんだん自分が翻訳をしたいと気付いて、最初は趣味で、退勤ご夜家で翻訳し始めました。だんだん、翻訳の仕事を本業にしたいと思いました。

最初は雑誌の翻訳、だんだん小説の翻訳もするようになりました。

大林宣彦監督は『人生には好きなことをする時間しかない』という本を書かれました。私も同意します。確かに、人生は短い、好きなことをする時間しかない。

自分が一番好きな事を、仕事にすれば、一番効率がいい、一番幸せです。

村上春樹は最初から、

「他人と違う何かを語りたければ、他人と違った言葉で語れ」という
フィツジェラルトの言葉に影響を受けて、自分の文体を確立しました。
私はその独特の文体に引かれて、彼の作品を翻訳し始めました。

翻訳は自分ひとりで出来る自由で孤独な仕事です。

台湾で村上さんの作品は一番人気がある長編は『ノルウェイの森』です。次は『海辺のカフカ』でしたが、『1Q84』が出てから、二位になったようです。

短篇の方一番人気があるのは『カンガルー日和』です。

村上春樹のエッセイは、村上さんの個人の生活や感じ方をよく反映していますので、作家の人柄がよく現れています。

『走ることにして語るときに僕の語ること』は好きな人が大変多いです。新しいファンもこれで出来たほどです。

『遠い太鼓』と『遠境・近境』は一部の人がとても好きです。

『ポートレート・イン・ジャズ』は音楽好きな人に人気があります。

村上さんが描く生活について音楽は勿論、ファッションもセンスがいい、特に料理について書いたものはとても面白くて、美味しそうで、人気があります。

台湾の多くの読者は日本文学がかなり好きで読んでいます。

日本の推理小説もつねに多くの愛読者を持っています。

最近一番人気のあるのは、東野圭吾で、少し前は宮部みゆきでした。

純文学のほうは村上春樹以外には村上龍、と吉本バナナが一番人気があります。

そのほかに人気がある日本人作家は、川端康成、三島由紀夫、太宰治、芥川竜之介、大江健三郎、夏目



漱石、谷崎潤一郎などです。

同じ留学生として、同じ米山奨学生として、私が皆さんに言いたいのは、まず、自分を大切にしてくださいという事です。村上さんのように、まず自分の体を鍛えて、自分を管理することから始めましょう。

そして、自分のよさを知って、留学して学んだことを生かして、日本語を生かして、仕事を通して、社会へ貢献して欲しいと思います。

そのために、時間を大切に、しっかり時間管理して、有効に使ってください。

そして、水を飲めば、源を思うことを忘れないように。毎年年賀状をカウンセラーに送ることを忘れないように。(これはほかの米山の OB から、ぜひ伝えて欲しいと強くいわれました。)

今日皆さんとお会い出来て、話が出来て、本当に嬉しかったです。

日本の留学を順調に終えて、国に帰って、いい仕事を見つけて、毎日楽しく過ごせるように祈ります。

ありがとうございました。



3-3) 松戸RCホームカミング卓話

学友 頼明珠

私は台湾から千葉大園芸学部に留学した頼明珠です。1977年から1年間米山奨学生として、松戸ロータリークラブの方々に大変お世話になりました。

この度、地区大会で米山奨学生のホームカミング制度にお招きいただき、まことに光栄です。大会に出る前、まず松戸クラブの例会を訪ねて、この場をお借りして、皆様に厚くお礼を申し上げたいです。ほんとうにありがとうございました。

35年ぶりにこの例会に出られて、皆様とお会いできて、本当に夢を見ているように嬉しいです。けれども、よく見ると、皆様はすっかり若返られましたね。と感心します。私は年を取ってしまったので、浦島太郎になったような気持ちです。

なるほど、35年ぶりですから、クラブのメンバーの世代も変わりました。今のメンバーの林希様のお父様は、当時の会長の林一様、および私のカウンセラーの小川甚次様をはじめ、多くの方々が現役を引退なさったり、また亡くなられた方もいらっしゃると思います。しかし今、若い世代の皆様が米山奨学事業を引き続きご支援くださっていることは、本当に意義深いことで、私は尊敬の気持ちでいっぱいです。

日本留学の生活を思い出す時、私はいつも松戸のことを思い出します。日本は千葉、千葉は松戸で、松戸は私にとって第二の故郷です。

そして、松戸で過ごした留學生活の中で、一番懐かしいのは、千葉大浩気寮の寮生たちと松戸ロータリークラブの皆様です。

千葉大園芸学部のキャンパスは、自然に囲まれて、静かで自由に勉強できます。私の専攻は農業経済でした。留學生活は、何もかも新鮮で、面白いと思いました。まず朝から晩まで日本語ばかりでした。特に寮に入ったことはとてもよかったと思います。寮生は北海道から、九州まで各地からの学生たちが、共同生活をして、一つの大家族みたいでした。先輩と後輩の関係はとても親密でした。寮の友達には日本の漫画と日本文学の名作を私に紹介したり、日本の名曲などを教えてくれました。

ある休みの日、私が松戸の町に出て、小さなラーメン屋に入ると、壁に「心を込めて作ります」という言葉が張ってありました。ラーメンやまで、心を込めてラーメンを作るのですか？と感心しました。後、あちこちの店でよくこの「心を込めて」という一言に出会いました。

これは私が選んだ日本人の精神を代表する言葉だと思います。

留學生活で、日本の文化と日本人の精神を深く感じました。それは学問よりも、私を圧倒しました。

日本から台湾へ帰って、広告会社で勤めたとき、同僚はよく日本の雑誌を持ってきて「これは何の意味ですか？」と私に聞きました。それは翻訳の初めでした。最初は雑誌、だんだん小説の翻訳もしたくなりました。



日本の雑誌のブックレビューから、村上春樹の名前を見ましたので、本を買ってきて、読みはじめたら、すぐ気に入りました。

1985 年村上春樹の三つの短篇を翻訳して、雑誌に投稿してから、彼の処女作『風の歌を聴け』、と二作目『1973 年のピンボール』を翻訳して、出版社へ送りました。翌 86 年『1973 年のピンボール』の中国語版は時報出版社から出しました。それは村上春樹さんの作品の最初の海外訳版でもあります。

それから 26 年台湾は村上春樹の作品を 45 作中国語版を出版しました。そのうち私は 35 作を訳しました。

村上春樹はどんな作家ですかを話し合っている時、皆不思議に思います。

今までのどの作家とも違う唯一の作家であるしか言えない。

「彼の小説を読むとすごくビールを飲みたくなります。」

「彼の作品を読んで、マラソンを走り始めた。」

「音楽を聴きたくなった。」

「小説を書きたくなった。」

「恋人とすぐ会いたくなった。」……つまり、何か行動をしたくなります。

ある人は、何か書き始めた、ある人は絵を描き始めた、ある人は作曲した、ある人は彼の文体を模倣した。

インターネットで英語で書いた感想もたくさんあります。

多くの読者にとっては一番好きな作家です。

台湾のある読者は村上春樹の顔は将来夏目漱石の後に、日本の紙幣に印刷されるでしょう、と予言しました。

先週、ノーベル文学賞が発表されました。中国の莫言さんがとりました。

中国の一般の国民は勿論喜んでいますが、多くの読者はがっかりしました。なぜなら、台湾、香港、と中国では、村上さんのファンが圧倒的に多いですから。

2006 年村上さんはフランツ・カフカ賞を受賞したとき、次のように言いました。「実際、何の賞にも興味ないんです。僕の読者が、僕の賞です。カフカを尊敬しているから賞をもらいにきたので、ノーベル賞をねらってなんてことはないです。」

しかし、村上さんはノーベル文学賞の候補になるほどの作家で、私は翻訳できるのは本当に光栄だと思います。これも皆様のおかげです。

改めて、ありがとうございました。



4-1) 千倉RC米山奨学生卓話

奨学生 ゴンザレスマルティネスホセ

私は、今年の米山記念奨学生の一人で、現在、国際武道大学で居合道クラブの主将を勤めさせて頂いています。

母国のメキシコで格闘技などに興味があり、その中でも刀に強く憧れて、剣道と居合道の修練を始めました。本当の強さを探していた私には、武道をやりながら人を知り、友達が出来るとはとても素晴らしいことに思えました。武道をもっと深く理解するためには日本に行くべきだと判断し、2008 年に日本に来ることになりました。最初は、別科生として一年間留学しました。日本語を勉強しながら剣道と居合道やっていました。その一年間はとても面白く、続けて学びたいと思い、次の年に国際武道大学体育学部武道学科に入学しました。

しかし、残念ながら一年生の時はとても辛いものでした。剣道部は、確かに強かったのですが、皆が自慢し過ぎて偉そうに行動していて、周りの弱い人イジメをすることなどがたくさんありました。結局、そこは私の居場所ではないと気づきました。剣道だけでなく、居合道もやっていました。居合道クラブの皆は、優しい人ばかりで、強い人もいて、私はそういうところに憧れました。先輩達と仲良くなり、先生にもお世話になっていました。ある日先生は、私に「人の優しさは本物の強さだよ」と言われました。私の中ではとても正しく感じて、私にとって自分の居場所が見つかりました。

しかし、三年生の時、様々な経済的な問題で大学の学費を払うことが出来なくなり、残念ながら学校を辞める事を考えなければならなくなりました。担当教員にその話をした時に、「一緒に頑張りながらいい方法を見つけよう」と言ってくれました。そして、ある日先生は、私にロータリー米山記念奨学金の話をしてくれました。お世話になりながら、奨学金の手続きや抽選行い、幸いにも合格し、ロータリー米山奨学金で進学することが出来ました。私のために頑張ってくれた父の力になることも出来て、苦しまないで生活出来るのは素晴らしい事です。

最初は、ロータリーの事をほとんど知らずに行動し始めました。しかし、世話クラブの大原ロータリークラブの方々は、私にとっても優しく接してくれ、色々と教えてくれ、私の事に興味を持って私を理解しようとしてくれます。そのような中で、ロータリアンの気持ちが凄く伝えられ、とても感謝しています。

私はいろいろな人に愛されているので、幸せな人でいられます。だから私は、大きな人間に成れると思います。私にとって、そのような気持ちにさせてくれたことは、ロータリーのとても大事なところだと思います。この世の中は、人々の気持ちで少しずつより良いものになっていくのだと思います。それに対して感謝の気持ちを持ち、私もいろいろな人に幸せにしたいと考えています。



4-2) 上総RC米山奨学生卓話

奨学生 劉鋒

皆さん、こんにちは、千葉大学、博士後期課程 3 年生の劉鋒と申します。中国の吉林省から参りました。長春というところで生まれました。長春という名前の由来は長い春がつづくからだそうですが、実は地元の冬が長いです。いまごろ、みんなはもう厚めな服を着ています。よろしく願い致します。

私は米山奨学生として採用されてから、もう一年半になりました。この一年で、蓮見カウンセラーを始め、クラブの方々に本当にお世話になりました。そして、月一回の例会に参加させて頂くことによって、皆さんの奉仕精神をすごく実感しました。最初、クラブの皆さんがなぜ毎週に集まるのがよく理解できませんでした。それぞれ、違う仕事をして、必ず決まっている時間に集まって話をするのが大変でしょうと感じましたが、皆さんの話をよく聞き、だんだん分かってきました。それは、皆さんが同じ目標を持ち、社会奉仕活動を実現することだと分かりました。

この奨学金を受けて、私の留學生活の経済的な面にももちろん、国際交流や異文化理解の面にもご支援していただきました。また、毎月のロータリーの友という雑誌を読み、ロータリアンは世界の親睦、理解、平和のために非常に素晴らしい奉仕活動していることが分かりました。二年間の奨学生生活は短いですが、私の人生の中で最も大きな財産になると思います。

奨学金と皆さんのご支援のおかげさまで、私は研究に集中することができ、いま、研究成果を少しずつで出しています。続きまして、私の研究について話したいと思います。私は土中のカビとそれに由来する酵素を使ってバイオマスの分解という研究を行ないました。簡単に言いますとカビを使って、稲わらやさとうきびなどの農業廃棄物を分解することです。なぜカビを選んだかと言いますと、まず、どんな環境でも入りやすいです、これは、皆さんがご存知だと思います。お風呂場ではカビキラーを使ってやっても、時間経ちますと、カビがまだ入ってきます。つぎ、カビを使うことで化学処理法よりコストが低いです。環境にもやさしいです。最後、農業廃棄物を分解した後、分解物の有価利用ができます。稲わらが分解されて、糖ができます、糖質が微生物由来の酵素に分解され、最終的にアルコールになります。皆さん、稲わらやサトウキビバカスから生産された焼酎はいかがでしょうか？飲みたいくないですね、ですが、工業利用には価値があります。皆様のご支援と奨学金のお陰さまで、アルバイトの時間を減らし、研究に集中した結果、糖質加水分解酵素の効率生成条件の検討、糖質加水分解酵素によるセルロース系ソフトバイオマスの高効率糖化条件の最適化などに成果を出しまして、フィリピンの国際学会で、発表し、受賞しました。

現在、研究をナノの世界に持ち込んで、これまで研究したもののメカニズム、遺伝子のゲノム解析などを行なっています。

私は日本に来て、ずいぶん長いですが、生活も簡単で、学校、アルバイト、家の三角の中でぐるぐる回っています。いろいろなことを経験し、成長もしましたが、生活の中で何か足りないと感じています。それは社会への奉仕です。私は米山奨学生になり、ロータリアンの皆さんと出会い、クラブの例会に参加し、ロータリアンの皆さんが自分の事業で活躍しながら、奉仕活動を行うことを見て、自分もすごく社会に貢献したいです。私はまだ学生ですが、学生なりの奉仕活動できるはず、私は最初に始めたのは千葉大学を通して、松戸市内の小学校に行き、中国の文化や歴史を小学生に教えることです。これはとても大事なことだと思っています。私を例にしますと、小学生の頃、教科書に書いたことしか分からなくて、外国の文化や歴史も教科書通りだと思



っていました。大人になり、日本に来て、自分の目を見た日本と教科書中の日本は全然違いました。なので、子供の頃から、外国人と交流して、本当の外国のことを知り、将来の世界観も変わると思います。その後、私は松戸市内のボランティア活動を通していろいろな人と出会い、自分の世界がかなり広がりました。いま、日中関係が悪化していますが、政府の間もお互いに引けない状況です。いま、まさに我々が活動する時期だと思います。民間での活動を行って、日中関係を少しずつでよくするように頑張りたいと思います。私はあと半年で卒業ですが、その後も日本で活躍したいと思います。この一年半、大変お世話になりました、これからもよろしくお願い致します。ご清聴ありがとうございました。



4-3) 千葉西RC米山奨学生卓話

奨学生 李 東昱

こんにちは

私は 2011 年 4 月~2013 年 3 月まで米山奨学生として、現在千葉大学 大学院 工学研究科 建築・都市科学 専攻 博士課程 李 東昱と申します。

私は 1980 年 12 月 11 日に韓国ソウルで生まれました。韓国で国立ソウル科学技術大学建築学部卒業及び住宅大学院で工学修士学位を受けました。日本へ来たばかりの頃もアルバイトをしながら博士課程に通っていました。慣れない環境での新たな生活と勉強や研究、アルバイトは思っていた以上に大変でした。そんな時このロータリー米山奨学会と出会い、奨学金を受ける事で勉強や研究に集中する事が出来ています。また、私のカウンセラー松丸様がそばで応援して下さい、相談にのって下さるのでとても心強く感謝しています。

私は学業以外で学んだことはロータリーの親睦会などに参加する事で、多くの人と接し、人との関わり方や奉仕精神など多くの事を学ぶことが出来ました。奨学生になった事で、日本での学生生活を通してお金に変えることの出来ない様々な貴重な体験も出来ました。

また ロータリアン、世話クラブやカウンセラーとの将来として今、日本で成功し社会に貢献されている人たちとの出会いもあり、私にとってとても良い経験となり多くのことを学ぶことが出来ています。奨学生になったことで、将来とても役に立つ経験や様々な人との出会いなど楽しい時間を得ることができ奨学会にはとても感謝しています。今後も積極的に色々なことに参加して行き、多くの経験や出会いなどを通して奨学生として、将来大いに社会に貢献して行けるような存在になりたいと思っています。国際・親善親善交流とは奉仕精神や信念が合うことによって初めて成り立ち、人とのコミュニケーションがとても重要であると感じています。米山奨学生としての将来 国際・親善・交流をするためには、海外各国から日本に留学しているロータリー米山奨学生たちと共に、様々な文化交流や考え方を共有することを通して、彼らとの新たなネットワークを形成することができ、共に分かち合い成長して行く事が出来る友達を持てるというとても貴重な機会であると思っています。

私の今後の計画はまず博士学位を取得し、様々な視点から都市型複合施設について研究を行っています。博士課程修了後も日本に残り、建設会社(建築及び住宅分野)あるいは当研究室の博士研究員として、更に幅広い仕事と研究をしていきたいと考えています。そして、建築及び住宅分野の専門研究者になる事を目標に様々な勉強や経験を積み社会に貢献していければ良いと思っています。

これからもよろしくお願いいたします。

ありがとうございます



4-4) 木更津東RC米山奨学生卓話

奨学生 吳美婷

20世紀30年代ごろ、祖父は上海に歯科クリニックが持っていました。しかし、祖父は心臓病で倒れてしまった時、祖父の子供たち、お母さんも含めて、誰もその道を行き続けていなかったです。実は、祖父のように歯医者になることはお母さんの夢でした。けれど、当時、中国に文化革命を行ったせいで、その夢を叶わなかったです。なので、お母さんは自分の代わりに、自分の子供が歯医者になってほしいと思っています。私、小さい頃から、「将来、医学部へ入るから、勉強なさい」という話がよく教われました。私も医学部を目指して、精一杯勉強してきました。でも、いろいろな事情があつて、最後看護学部に入學してしました。そして、大学卒業後、看護師として、大学附属病院に勤めていました。そこで多くの患者さんと接触するうちに、糖尿病に陥っている患者さんが山ほどいることが分かりました。いつもなぜこんな病気になってしまったとか、どんな治療方法をやれば、一番いいかと考えられました。でも、自分の力で何もできなくて、ただ医者への指示の通り、薬をあげただけで、私はこんな駄目な自分が嫌いで、自分が医者ではないこともとても悔しかったです。現在、中国の糖尿病の発病率は1984年の1%未満から、急速に増加して、今約10%に達しました。もしこれから、何か対策が取らないと、10~15年後に、糖尿病および合併症に陥っている患者せんが溢れてしまいます。私はこの人々を救いたいと、自分のできる限りで彼らの幸せに寄与したいと、そして、彼らの幸福なほほえみを見てほしいと思い、また、もっと糖尿病に関する知識を勉強したいという訳で、留學することを決めました。

日本は中国と唐朝時代から、お互いに文化の交流を行ってきました。また、戦後の日本は世界に類を見ないほどの経済成長を遂げておりました。そして、川端康成をはじめとして各種のノーベル賞受賞者も輩出して、もっとも成功した国であると思っておりました。私はこんな日本を見てみたい、また、日本の社会や文化や教育などを理解したいと思うので、日本へ行くことにしました。

今の私、大学院生として代謝生理学の領域で糖尿病の発病メカニズムについての研究を行っております。でも、学部までは看護学を専攻にしていた私にとって、現在医学部で研究していることは難しく、困難が山ほどあります。まず、講義と実験の内容すらよく分かりませんでした。先生と先輩との日本語でコミュニケーションはつながらなかったこともあります。自分が言いたいことを正しく表れられなかったことにより、日本語を活かすのはいかに重要なことを初めて実感してきました。次、異なる専攻にしていた私は本当にいい研究できるかと疑問を持っていました。そこで、同じ研究室で、元栄養学部出身で、今きちんと糖尿病の研究をしている先輩と話し合いました。「基礎科学的な学問はひとつの扉につながっているので、精一杯に勉強すれば、必ず知識を身につけられる。」と先輩がそう言っていました。確かに、看護学であろうか、栄養学であろうか、すべては医学知識を基づいて、発展してきた学問だったとそう考えたら、やる気がどんどん出てきました。頑張れば、必ず報いがあるという甘い考え方は遠い昔に捨ててきましたけど、それでも、一つ一つ前を向いて、歩いていくことができれば……。

ですから、今先生と先輩とのコミュニケーションを妨げないように、まだ日本語の勉強をし始めました。実験をうまく行けるように、実験に関する原理や手順なども勉強してきました。修士課程を順調に卒業できるように、日本語と基礎医学知識を身につけなければなりません。これらを実際に活かすのは将来の目標の一つ目です。



今いるラボが小さくても、優秀な先生および先輩がいるこそ、いろいろなものを学べます。毎日忙しく大変でも、自分を充実させます。修士卒業までの限られた時間を利用して、できる限りで、多くの日本の先端医学と研究技術を学びたいです。これは二つ目の目標です。

今年、米山ロータリー奨学生になって心から本当によかったと思います。なぜかという、米山ロータリー奨学生になってからの半年の間、ロータリーのおかげで、いろいろなことを体験できたり、友達もできたりすることになります。最初のオリエンテーションの頃、同じ大学の人と初めて出会うことができました。今まで、ずっと一人ぽっちだったので、彼女達と出会う、いろいろな話せるし、時々電話したり、一緒に遊びに行ったりするし、また、できた友達の中に、同じ医学部出身の女の子が一人いて、彼女は今博士3年生です。なので、時々実験など分からなくなる時に、よりうまく理解できるように、彼女に中国語で聞くこともできますので、本当に助かったと思っています。

木更津ロータリークラブに入ったら、カウンセラーとしての梶さんは私の両親に安心させるために、わざわざ私の中国の実家に伺うことになりました。ロータリーはどんな奨学会とか、私は今どんな状況になっているとか、いちいち両親に全部教えてくれました。ロータリーに入ってよかったと両親がそう言っていました。また、時間があつたら、私を家族のように連れて行って、千葉のあちこちへ案内してもらって、また、もっと日本のことも教えてくれました。本当にありがとうございます。

七月、また、千葉南ロータリークラブが行った里山の草刈りというイベントに参加しました。都市に生まれた私にとって、こんなきれいな景色を始めて見たし、草刈りも始めた農産仕事です。疲れ、大変だけど、大変勉強になりまして、ものすごく楽しかったです。今でも、自分の森を自分で守るという言葉は時々私の耳のそばに響いています。

ずっと学校から家まで似通っている私にとって、いい思いを作りました。米山ロータリー奨学生になって心から本当によかったと思います。

All work and no play makes Jake a dull boy. という英語の諺があります。米山ロータリーのおかげで、私は Jake みたいの人間になれなくなります。ありがとうございます。これからも、よりいい思いを作れるように、まだ皆様によろしく願いいたします。



4-5) 市原中央RC米山奨学生卓話

奨学生 梁麗娟

市原中央ロータリークラブの皆様、こんにちは。始めまして、私はリャン・リージャンと申します。今年の4月から2年間、大網ロータリークラブでお世話になっております。本日、卓話の機会を頂き誠にありがとうございます。私と合うのが初めての方が多いたと思いますので、あらためて私のことについて紹介させていただきたいと思っております。

私は去年中国から日本に来ました。出身地は寧夏という美しいところですが、北京からおよそ1300キロメートル離れています。寧夏の南部は黄土高原の一部で、母の川といった黄河がここから流れていて、ここの人々を育てています。中国で「天下黄河富宁夏」という言葉がありますが、その意味は寧夏の繁栄は母の川からの贈り物です。また、私は大学と修士のとき、全部で北京にいましたので、北京は私の第二の故郷と思います。今は千葉大学融合科学研究科、情報科学専攻、博士2年生です。研究テーマはDNA複合体を用いた有機トランジスタメモリの構築です。

日本は世界的にも高い教育力を持ち、技術力、経済力にも優れているため、多くの優秀な人材がこの国で育ってきました。私の母校での指導教員と学校長はともに日本での長い留学経験があります。彼らは名のある研究者です、また学生の指導に真摯かつ厳格な態度で望む教育者です。私は、彼らの素晴らしさをしみじみと感じ、彼らを育てた日本への留学を決意しました。加えて、日中両国は「一衣帯水」とも言える近隣国です、互いに似た東方文化や漢字文化を持っています。言語の習得に有利で、日本人との交流が取りやすいと考えたのも大きな理由です。日本は治安も良く、礼儀正しい人が多いので、私にとって極めて良い勉学環境を与えてくれると考えました。

時はあっという間に流れ、奨学金を頂くようになってからもう6ヶ月がたちました。奨学金を頂く前と後で、勉強と生活に大きな変化が起こりました。元々、日本の物価は中国と比較するとかなり高く、また来日したばかりの頃は、奨学金の援助がなく、しかも両親は共に一般の会社勤めという条件でした。同時に、自分にとっては博士課程のテーマも全くの新しい分野であり、すべてが1からのスタートでした。そのため、勉強と生活の二重のプレッシャーに一度はあきらめようと思ったこともあります。そういった時には、小さい頃からの夢を思い起こし、頑張ろうと決意したのです。奨学金を頂くようになってから、生活に困ることは無くなり、課題研究にも専念できるようになりました。この期間、カウンセラーの方と出会いがありました。これは日本に来て一番うれしかったことです。生活においても、まるでお母さんのように学業と生活について気にかけてくださり、日本にもう一つの「家」ができた思いがしました。このほか、カウンセラーの方におかれましては、お忙しい中にも関わらず私のために貴重なお時間を割いていただき、海ほたるや伊豆半島などの場所に連れて行ってくださいました。日本の先進的な技術を勉強させていただいたばかりでなく、日本の美しい景色を肌で感じ、文化についても勉強でき、大変視野が広がりました。このような体験は非常に得がたいものであります。

今月の頭、ちょうど中国の中秋節(日本のお月見)と重なり、家族とは一緒にすごすことはできませんでしたが、奨学生、カウンセラー、委員様たちと米山記念館探訪旅行に参加できました、とても楽しかったです。そして、記念館の中で、米山奨学金の当初から現在までの歩みを知ることができました。また、記念館の中で、様々な展示品を見て深く感じるがありました。その後、米山梅吉氏のお墓参りをして、お線香を上げました。自分が奨学生であることを大変光栄に思うと同時に誇り感じました。そのあと、行われた研究会の中で、奨学生の先輩



たちは、帰国後、様々な分野でお活躍されていることを知りました。彼らをお手本として、私はさらに勉学励み帰国後、大学の教授になりたいと考えております。

今後はこれまで同様、またとない機会を大切に、自分の専門分野にますます力を入れ、自分と、またこれまでに自分を手助けしてくださった方々が満足できるような結果を残せたら、と考えています。

最後に、毎月ロータリー米山記念奨学金を頂き、心より感謝申し上げます。大学で学んだ知識を使って国際社会に貢献出来るように精一杯頑張ります。

特に、今日は委員時田さんは迎えに来てくれまして、どうもありがとうございます。

ご清聴ありがとうございます。



4-6) 館山RC米山奨学生卓話

奨学生 潘婧

館山ロータリークラブの皆様、こんにちは。

私は米山奨学生の潘婧と申します。今年4月から君津ロータリークラブで2年間お世話になることになりました。ロータリー米山奨学生に選ばれ、ロータリー米山記念奨学会、そしてロータリアンの皆様から心から感謝を申しあげます。本日、館山クラブでの卓話の機会を与えていただき、まず簡単に自己紹介をさせていただきたいと思います。

私の名前は潘婧です。「潘」はさんずいへんで、一番の番です。「婧」はおんなへんで青いの青です。この二文字は、ほとんど日本の辞書に載っていない漢字です。中国語で「婧」はあてやかなさまという意味があります。女の子ですので、「頭がよく、美しい女性になる」という意味をこめて、お父さんから名付けられました。私の名前はもう一つ面白い意味があります。君津クラブでの初め例会に、カウンセラー・廣田さんが私の名前は「商売繁盛」という意味で紹介して頂きました。面白くて、初対面の方に自分の名前を覚えやすい方法だと思えます。

私の故郷は石家荘という町で、北京の南西にあり、高速道路を利用して車で約3時間のところにあります。中国河北省の省都で、日本長野市の友好都市でもあります。

私は中学の頃から日本の漫画やアニメーションに触れ、日本語に大きな関心を持つようになっていました。それらを理解しようと、日本に関する本を読みましたが、殆ど歴史や経済に関する事で、日本の社会や文化に関するものがありませんでした。そこで自分自身が日本に留学して、日本という国や文化について体験してみようと思いました。

私が日本留学を考え始めたのは中国の医学大学1年生後期のことでした。医者だった父の影響で進学した、河北医科大学での私の担当教授は、信州大学医学大学院で4年間日本の留学経験がありました。日本の教育システムや医療技術が素晴らしいことを先生に幾度となく聞かされ、大いに触発され、日本の最先端医療技術を私も勉強したいという思いが強くなり、ついに私は医科大学を中退し、2002年4月に故郷の石家荘を離れて、日本に留学することを決意しました。

現在、私は千葉大学医学研究院先端生命科学専攻博士課程の3年生です。免疫治療に関する研究を行っています。皆様、よく知られているワクチンによる免疫治療は、生体内において記憶免疫細胞が主として担っていることが明らかになっていますが、記憶免疫細胞がどのように生体内で存在しているのか、不明です。現在私は記憶免疫細胞の分子機構を解析する目的とし研究を進めています。沢山の方々の助けを受けて研究は順調に進み、今は、国内及び国際会議に於いて成果を発表したり、学術誌に論文を発表したりして大変充実しています。博士学位は決して人生の最終目標ではなく、より良い免疫治療の道を探り出すことこそ、自分の専門知識を生かすことであると確信するようになりました。将来、製薬会社の研究職につきたいと考えています。これまでの基礎研究をさらに発展し、ワクチン改良、癌治療などの免疫治療法開発の臨床応用を目指していきたいです。

「光陰矢の如し」と申しますが、時間の経つのは実に早いものです。日本に留学して、今年で10年目を迎えることとなりました。この10年間の留学生生活を振り返ってみると、留学を通して本当に多くのものを得ることができました。そして、私にとってこの留学生活一番の収穫は、今年から米山奨学生になってからです。米山奨



学会が開催する様々な行事、奨学生の見学旅行や奨学生同士の交流会などに参加し、それらの活動を通し異なる多くの職業のロータリアンと交流することができました。

3年程前に、私は初めてロータリーの奉仕精神に触れ、ロータリアンの方々の温かい気持ちを沢山感じました。私の主人は2009年度の米山奨学生で、ロータリークラブで1年間お世話になりました。同年7月、子供が授かったことがわかり、2010年3月娘を無事出産し、新たな家族の誕生に心から喜びを感じました。あの時に、初めての出産で様々な喜びと不安を抱える中、主人が所属していたクラブのロータリアンのみな様のおかげで、充実した日々をおくることができました。本当にありがとうございました。

嬉しいし光栄なことは今年私も米山奨学生になりました。米山奨学会が開催する様々な行事で、ロータリアンの方々と一緒に活動して、学ぶ事が沢山あることがわかりました。社会に奉仕し貢献したいと、お仕事で多忙な日々を送りながらも様々な社会奉仕活動に参加しているロータリアンの姿を見て、私はこれからどのように努力すれば有意義な人生を送るのか、改めて考えさせられました。米山奨学生にならなければ、この事は一生わからなかったと思います。皆さんの温かい気持ちが込められた奨学金で、私を含め多くの留学生が励まされ、日々の勉学に精を尽くしています。私は米山奨学生になって、本当に良かったと思います。

日本は鶴の恩返しという昔話がありますが、私と家族もロータリアンの皆様から受けたご恩を返さなければなりません。支えてくれるロータリアンの皆様の恩返しとして、これから私はロータリーの理念を広げ、卒業した後は私もロータリアンの一員になりたいと思っております。そして皆様に頂いた沢山の温かい気持ちを多くの人々にも伝えられたら幸いです。

最後になりますが、私は勉強しながらできる限り国際交流活動に参加したいと思っております。将来は、仕事とは別に国際交流に役立つことをしたいと考えており、日本と中国の架け橋になって、両国の交流のためにできる限り力を尽くしたいと思っております。ロータリアンの方々絆、日本との絆を大切にしていきたいと思っております。

今後も皆様のご指導ご応援、よろしくお願い申し上げます。

ご静聴ありがとうございました。



4-7) 市川シビックRC米山奨学生卓話

奨学生 チャンチイマンフォン

皆様、今晚は！

私は明海大学大学院経済学修士課程2年生で、ベトナム人のチャン チイ マイ フオンと申します。今年の4月からロータリー米山記念奨学会の奨学生になりまして、市川南グループでお世話になっております。私のカウンセラーは石田 善一様です。

私が日本へ留学に行く動機は2つの理由があります。一つはベトナムでの日本へ留学の運動は20世紀の頭にフランスの戦争時期に発生しました。その時、運動は「東遊運動(とうゆううんどう)」と呼ばれるようになりました。運動の意味は自国の復興に人材育成のため、ベトナムの青年らに日本へ留学を呼び掛けるということです。現在、日本といえば、世界第2経済発展国だけではなく、日本人の性格は仕事に厳しくて、まじめですが、生活に優しくて、礼儀を大切にしていると言われます。世界での他国はいつでも日本人を感嘆します。それで、留学生はいろいろな国から日本へどんどん留学に来ます。ベトナム人に対して日本へ留学に行く選びはいつも第一です。

もう一つは私は日本へ来る前に大学で日本語と日本文化を勉強したことがあります。その時、私に対して日本のいいイメージは日本の国花として春に咲く桜、日本第一高山として富士山、着物、茶道、書道などです。あれを自分の目で見えたくて、勉強したいなという感じで、日本の多様な文化となぜこんなに日本経済が発展できるかよく理解したくて、日本での大学院に進学したいと思いました。その考えから、日本に来ることを決心しました。

2006年3月に私は私費外国留学生として日本へ留学に参りました。日本語学校で1年間日本語を勉強してから、専門学校に進学しました。2年間に経て専門学校を卒業した後で、明海大学を編入して、2011年3月に明海大学を卒業して、4月に明海大学大学院を進学しました。同期にベトナム人と結婚して、2011年12月に赤ちゃんを産んだばかりです。今、私の家族3人と一緒に日本に滞在しています。

私費外国留学生として大学院で勉強しながらアルバイトするのは本当に大変です。それで私に対してロータリー米山記念奨学会と出会うのは私の運命です。今年4月からロータリー米山記念奨学生になりまして、米山記念奨学会には奨学金による経済的な支援だけではなく、ロータリーの世話クラブとカウンセラー制度による心のこもった支援にあります。

私のカウンセラーは市川南ロータリークラブの石田 善一様です。カウンセラーとは奨学生一人に対して個別のケアに当たりアドバイザーの事です。石田さんはとても優しい人で、アドバイザーというよりお父さんみたいです。石田さんは私の生活だけではなく勉強、就職状況について感心し、心配してくれます。また、石田さんの奥さんは私に日本の文化と赤ちゃんの育ち方を教えてくれて、私は本当に安心します。毎月一回市川南ロータリークラブの例会に通じて、お父さんたちみたいロータリアンとの交流をして、お父さんたちはいつも笑顔を出して、私はうれしくて、感謝と言う気持ちをもって来ます。

米山奨学生になってから、私はロータリーの人々を出会うチャンスがあります。私はなぜ皆さんが誰でも忙しいですが、ロータリアンとしてはロータリーの仕事を一生懸命にするのか、なぜ自分の時間、自分のお金を使って、他の人を助けようとするのかいつも考えます。ロータリー米山記念奨学事業の理想と目的は世界平和と世界懸け橋のためですが、一番上は皆さんの心が温かくて、困る人を助けることも幸せということがわかりま



す。自分がそのことを理解して、本当に感動して、米山記念奨学会とロータリアンに心から感謝の気持ちがいっぱいです。

将来、勉強が終わってから、ベトナムへ帰って、社会人になって、私もロータリー精神として何かやりたいと思います。今、私の頭に子供について考えています。子供とは国の力こそです。しかし、ベトナムで貧乏な所の子供は 21 世紀に住んでいるのに、苦しいです。貧乏すぎて小さいころから生活のため仕事しなければならなくて、学校へ行きたいけど行けない子供がいるし、毎日学校へ10kmぐらい歩かなければならない子供がいるし... 私は素晴らしいことをやれないですが、これぐらい考えはちょっとだけでも子供を助けたいです。このことこそが自分の国の発展に貢献して、ロータリー米山記念奨学会とロータリアンの皆様に“ありがとう”という感じを伝いたいことだと思えます。私に対して、今でも将来でもいつも日本へ留学ってよかったな感じです。皆様は将来のことについて私に応援してください。

もう一つは私は近い将来ベトナム学友会が設立されていることを期待しております。米山記念奨学生として私は米山学友を通じて、ロータリー米山記念奨学会の発展に貢献したいです。

以上です。よろしく申し上げます。



4-8) 袖ヶ浦RC米山奨学生卓話

奨学生 楮笑雲

皆様 こんにちは

はじめまして、千葉工業大学大学院の楮笑雲と申します。どうぞよろしく申し上げます。

今日は皆様とお会いできて嬉しいです。

● 自己紹介

まず、簡単に自己紹介をしたいと思います。

私は中国上海工程技術大学で、4年間高分子材料について学び、2009年7月に学士(工学)学位を取得しました。卒業後、化学分野の知識がまだ足りないと感じたことと、日本の科学技術が非常に発展していることから、日本への留学を決め、3年前の2009年9月に留学生として日本に参りました。日本に来てからは、明海大学別科で日本語を学びました。2011年4月からは、千葉工業大学大学院で高分子材料について研究しています。

私は中学生の頃から、化学に対して強い関心を持っていました。それは実験で化学反応を経験したり、新しい材料を作ったりする過程が、挑戦の連続であり、とても興味深かったからです。大学では、高分子化学を中心に様々な基礎知識を身につけました。日本での留学期間はまだ3年にしかありませんが、日本の高分子化学における新しい技術は様々な分野で幅広く応用され、人々の生活に利便性をもたらしているように感じられます。高分子材料は、日本はもとより、中国においても最も重要な材料の一つとして位置づけられています。

私は日本の進んだ高分子合成及び分析技術を習得するため、大学院において、新規な材料を用いた高分子の作製について研究を行っています。

私の出身国である中国における高分子化学についての研究は、他国に比べると、そこまで進んでいるとは言えず、将来、それを(高分子化学のこと)どのような形で展開していくかも予測できません。もし中国の研究活動がこれ以上の発展を望むのであるなら、私は他国との協力が必要不可欠であると考えます。すでに、日中間の経済活動は相互に依存するものとなっており、お互いの協力なしにはこれ以上の発展は難しい状況です。

私は日本に暮らす中国人として、祖国である中国と第二のふるさとである日本、両国の発展に貢献したいと考えます。

● 留學生活で感じたこと

日本に来てから、瞬く間に3年が経ってしまいました。今振り返ってみると、楽しいことや嬉しいこと、悲しいことや辛いことなど、様々な思い出があります。ここでは記憶の中で特に印象が強かったものを紹介したいと思います。

日本に来て間もない時は、日本語はあまり話せませんでした。買い物やウインドウショッピングでは問題ありませんでしたが、知らない人ばかりの群衆の中で歩くのは正直、少し不安に感じました。早く日本語が上手になりたいという強い気持ちがそこで生まれました。明海大学別科で日本語を勉強し、初めて日本、日本人、日本文化に接して、この一年半で、一日も休むことなく努力した結果、日本語能力試験N1を取得しました。それに加えて、日本語発表交流会、ホームステイ、ホームビジット、生け花、茶道、七夕、防災体験、クリスマスパー



ティなどのイベントがあり、充実した生活の中で日本語を学ぶことができました。

それから日本語学校を卒業し、千葉工業大学大学院に入学しました。一年半の日本語学習の効果もあり、日常生活では会話やコミュニケーションでは、ほぼ困ることなく、少しずつ日本での生活に慣れ、楽しめるようになりました。大学院の授業では、日本語では分からない時に、英語で質問して教えていただけたのが助かりました。また、日本の学生さんと一緒に授業に行ったり、研究したり実験したり、時には大好きなラーメンと一緒に食べに行ったり、お好み焼きパーティをしたりする内に、だんだん仲が良くなり、友達ができたことによって、いつの間にか最初の不安と寂しさが消えていました。

日本の博士前期課程は2年間で授業以外では、研究と論文作成が中心である点で中国の大学院と似ていますが、いくつかの違う点もあります。まず、中国の場合はそれぞれの研究室には2、3人の学生しかおらず、私たちは教授の助手のように研究を進めます。それに対して日本の大学院は比較的人数が多く、それぞれの研究テーマも違い、指導教官である教授との情報共有の時間が限られているため、大きな問題がなければ自分で責任を持って自由に研究を進められるというイメージがあります。その面では日本の大学院生の方がより自立性を持っていると言えるかもしれません。二つ目は、中国の大学は企業とのつながりがまだまだ弱く、企業と共同研究あるいは共同開発のようなプロジェクトはあまり多くありません。それに対して日本の大学院では、そのような機会が多く、学生にとってはとても勉強のチャンスになり、その後の就職にも非常に役立つと思います。

● ロータリアンとの交流及び将来像

私は現在、船橋東ロータリークラブでお世話になっています。月に一回、クラブで食事をさせて頂くたびに、様々なロータリーの方々との交流することが出来て、非常に嬉しく思います。また、勉強のことだけではなく、日本で生活するにあたって気をつけることなど、様々な相談をさせて頂いています。

また、カウンセラーの先生のご紹介で船橋国際国流会のイベントに参加してまいりました。大変良い経験になりました。その上、船橋国際国流会からの取材もありました。

8月には、船橋市薬円台公民館が開催した「夏休み 小学生の国際交流 留学生とあそぶワクワクたいけん」に参加させていただきました。外国人留学生として、小学生と一緒に外国の遊び等をとおして、異年齢・異文化と交流することができ、非常に嬉しかったです。二日間の交流会の中で、一日目の主な交流は、スタッフ・留学生紹介、レクゲーム、留学生の出身国の紹介、茶道体験、各国の生活習慣等の違いについてのグループワーク等の内容でした。二日目の主な交流はレクゲーム、世界の遊び、ポスター発表とキャンドルファイヤー等の内容でした。

小学生と一緒に様々な体験をして、異文化交流することができました。このイベントを通し、子供達の自主性や協調性を伸ばして「生きる力」を育むこともできたと思い、非常に良い経験ができました。できれば、来年も参加したいと思います。

また、千葉南ロータリークラブが主催した「第10回 国際里山の集い」という里山での交流会に行ってきました。ロータリアンと千葉市民の協力で、里山での草刈作業やつきりなどの若木の保育作業を行いました。森のオープンスペースの良さと共同作業をしている時のフランクな交流により、自然環境への理解も深めることが



できました。この体験を通して、非常に有意義な一日を過ごすことが出来ました。あらためて千葉に来てよかったと感じました。

私はロータリー米山奨学生として、様々な経験ができることを大変嬉しく思います。奨学生としては1年だけの期間ですが、それ以降も、ロータリアンの皆様との絆を保ち続けたいと思います。

私にとってロータリアンは親父のような存在で、一生忘れることはできません。これからは、日本での仕事であっても、中国での仕事であっても、ロータリークラブとの交流を続けたいと思います。またロータリアンの名を汚さぬよう、残された大学生活も励んでいきたいです。今のように毎月会えなくなったとしても、手紙などで連絡しようと思います。

● 留学して変化したこと

留学経験が私にどのような変化をもたらしたか、また留学の意義についてもいくつかお話ししたいと思います。

1. 日本に対するイメージにおいて、抽象的なイメージから具体化したイメージへと変化してきました。

留学前のイメージでは日本に対して、「きれい」、「優しい」、「危ない」など、抽象的なイメージが多くありましたが、留学後のイメージは、それらがより具体的で、自分の経験に基づいたものが多くなりました。長期滞在を通して、例えば、他人に道を聞く機会や、お店の店員さんの接客を見ることなどが多くなり、それによって、日本に対するイメージがより良いものになってきました。

2. 対人関係におけるイメージが変わること

留学以前の私は、対人関係について、あまり深い考えをもっていた訳ではありませんでした。しかし、留学中に、日本では一度その人と親しくなると、その後も古い友人のように接してくれたり、知らない人に話しかけると、あまりフレンドリーではなかったりすることに気づき、留学によって言語だけでなく、対人関係に関してもイメージが変わっていきました。

3. 言語に対する意識の変化

3年前に日本に来た時は、日本語に興味はあったものの、うまく話すことができませんでした。しかし、この3年間の滞在で、日本語が更に好きになり、日常生活では、自然に日本語を話すことができるようになりました。特に、普段の生活において、友達や後輩などと話す日常会話や、学校の先生や会社の上司など、目上の人と話す敬語などを聞き分けて、かつ使い分けることができるようになりました。

このように、3年間で、日本の文化や日本人の優しさなどを実際に肌で感じて、体験し、理解することができました。

● 今後の抱負

近い将来について、大きく分けて、三段階の計画があります。

一段階目は、現在から修士を卒業するまでであり、自分の研究を予定通り進め、学会発表や修士論文の作成を通し、修士として社会に出る際に必要な技術を得たいと考えています。

二段階目は、そこから30歳になるまでであり、仕事をする中で、日本で働く外国人として仕事を一人前にでき



るように努力したいです。

三段階目は 35 歳になるまでであり、人に教えられるくらいにまで仕事の腕を磨きたいと思います。また仕事だけではなく、家庭や生活においても満足感を得られるようにしたいです。

ですので、今のうちに様々なことを準備しておきたいです。

● 好きな日本語

私が一番好きな言葉は、「一期一会」という言葉です。ご存知の方もいらっしゃると思います。辞書を引くと、「一期一会」は「一生に一度だけ出会うこと」または「一生にただ一度の機会」と書いてあります。

「一期一会」という言葉を知ったのは、日本に来て間もない時の日本語学校での茶道体験からでした。茶道部の先輩たちに、お茶の作り方から、飲み方まで色々なことを教えていただきました。そのうちに、先輩が、茶道はお茶を飲むことだけではなく、

『あなたとこうして出会っているこの時間は、二度と巡っては来ないたった一度きりのものです。だから、この一瞬を大切に思い、今出来る最高のおもてなしをしましょう』とおっしゃいました。この言葉を聞いた時、私はとても感動しました。一生において充実した時間には二度と戻る事ができません。また、明日には何があるか、それは今はまだわかりません。「未来のことがすべて分かる」という人はいないと思います。明日は運命の人と出逢えるかもしれないし、地震や津波で家がつぶれるかもしれません。今は今だけ。そう思うと、人生の一日一日、一分一秒が、私にとって非常に大切な時間です。友だちも、これから出会う人も、また、今日私のスピーチを聴いてくださった皆さんは、私にとって、大切な人です。

この先、まだまだ長い道のりだとは思いますが、留学してから 3 年目の区切りとして、そして日本での生活の新しいページの始まりとして、日本での勉強をこれからも、精一杯頑張っていきたいと思います。よろしく願いします。

ご清聴ありがとうございました。



4-9) 八千代中央RC米山奨学生卓話

奨学生 白陽

1. 自己紹介

出身地: 中国 成都市

故郷近年の変化:

故郷と日本との係わり合い

日本へ留学した理由:

2. 第二故郷: 香川と千葉

日本へ留学し始めたところ

日本で勉強したこと:

これから頑張りたいこと:

3. 将来の自分の専門分野での計画について

現在は地盤工学に関する研究をしています。将来はリモートセンシングについてを

学びたいと思います。

また日本と中国の架け橋になる強い意識を持っています。日本の防災技術を中国及び世界に広がる夢もあります。

将来も地震などの災害のリスクを減らす国際技術者になるために、特に発展途上国に対して、もっと深く研鑽しなければならないと思います。

本当にこんな自然災害で発生する苦しいことを見たくないのです、自分の力でこの分野、市民達、社会の安全に貢献したいと考えています。

4. ロータリアンとの交流で楽しみにしていること

例会の参加

留学生集まり:

異文化の接触:

5. 将来の国際交流についての考え

自分の夢、未来像: 自分勉強した防災分野の知識と技術で自然災害の危害を最小限まで抑え、人々に安全な生活の与える技術者になる夢を持っています。

これから勉強したいこと: 英語なども身につけたいと思います。

将来なりたい者: 防災分野の研究者になりたいのです。



4-10) 富津シティーRC米山奨学生卓話

奨学生 王欣

富津シティーロータリークラブの皆様、こんにちは。中国から参りました王欣と申します。今年の 4 月から 1 年間、米山奨学生として、千葉南ロータリークラブでお世話になっております。本日、卓話の機会を頂きまして、誠にありがとうございました。今日は私のことについて紹介させていただきたいと思っております。

私の出身地は瀋陽です。瀋陽は中国の東北地方に位置する遼寧省の省都です。東北地方最大の都市として、政治・経済・交通の中心的位置を占めています。また、瀋陽は中国有数の工業都市でもあり、「鉄西地区」と呼ばれる広大な工業地帯には大中型国有企業が集中しています。瀋陽は清朝が北京に遷都するまでは国都とされ、太祖ヌルハチがつくった故宮やその墓である東陵などたくさんの歴史観光名所があり、中国国家歴史文化名城に指定されている観光都市でもあります。

私は 2007 年に日本に来て、現在、千葉大学医学薬学府薬学研究科の博士課程 3 年生で、炎症や腫瘍部位における細胞外の酸性環境が免疫システムに与える影響について研究をしています。これまでの細胞機能に関する研究において、病巣部位の酸性環境が周辺細胞の機能に与える影響についてはほとんど調べられていません。実際、炎症や腫瘍の治療においては、現在までに数多くの化学療法剤の開発が行われてきましたが、期待通りの効果をあげられなかった理由の一つとして、局所的な酸性環境が細胞に与える影響に関する知見の少なさが挙げられます。そこで、私の研究は、炎症部位や腫瘍部位などで酸性環境が生じた際の免疫機能の理解と、より効果的な薬の開発につながると考えられます。将来、この研究成果は効果が高く、副作用の少ない新薬の開発に貢献したいと思っております。

日本での留学生活は、今年に入りもう 6 年目になりました。日本に来てから、「なぜ遠い中国からわざわざ日本に留学しに来たのですか？」とよく聞かれました。私にとって大学時代は、様々な経験により人生という長いスパンの中で自分自身はどのように生きていくべきかを自覚させてくれた貴重な期間でありました。以前は考えたことのない留学を決意したのも、大学時代を過ごしながらか出会った人々から受けた感動と刺激が心に種として残り、少しずつ成長し現れた結果であったと言えます。

専攻のため、私は大学 3 年のとき 1 年間日本語を勉強することになりました。その後、大学涉外課でボランティアとして外国人との連絡や交渉・接待の仕事に参加しました。日本人の先生や友人と幅広くコミュニケーションをとることができ、日本の文化に触れる機会が増えるとともに、噂やイメージで固めた「日本像」に囚われずに、自分の眼で確かめ、自分の身体で「日本」を感じたくなりました。日本における伝統と最先端技術の共存、文化の奥深さと自然の豊かさなどが私の関心を日本に向かわせました。日本に留学する前には私は学校と家だけの極限られた世界で生きていたため、自国以外の世界についての理解があまり深くありませんでした。日本には「井の中の蛙大海を知らず」という諺があります。私は日本への留学を目指していたのはこの人生を「井の中の蛙」として過ごしたくなかったからでもあります。

日本への留学を決意したきっかけは、大学 4 年のとき、私の所属する学科が主催した日中学術交流シンポジウムでした。日本からきた研究者による素晴らしい発表は私に大変感動を与えてくれました。さらに、そのシンポジウムでは、日本で活発に研究活動を行っている先輩から経験談を聞くこともでき、私には有益な機会でした。「先進国の進んでいる技術と素晴らしい研究者達との出会いによって社会に貢献できたのは、私の人生にとって宝物であった。」と語った先輩の話は印象深く心に残りました。この言葉は、私が留学を決意したひと



つの動機になりました。そして、大学 5 年に迎えたとき、現在の指導教授小林弘先生が当時私が在籍していた瀋陽薬科大学を訪問され、私は先生と話をすることができました。この出来事が私の人生にとって大きな転機となりました。私は、日本の医学薬学領域における先端研究にずっと興味を持っていたので、小林先生の誘いを受け、日本への留学を決めました。

月日の経つ早さを実感しているうちに、もう日本に来てすでに 5 年間経ちました。この 5 年間は私の人生にとって、かけがえのない貴重な 5 年間でした。5 年前に、ただ勉強したい、学位を取りたいという好奇心と功利心を持って日本留学に来た私は、初めて一人暮らしの寂しさやアルバイトのつらさ、そして、学業の大変さによって磨かれ、当初わがままな女の子から責任感と自信をもっている大人と成長してきました。私がかここまで辿りつけたのは、私一人の努力だけではありません。先生方の関心と日本の皆さんの応援があったからこそ、今の自分があると思っています。学校の先生方は留学生である私のことを配慮し、学業に関してはもちろん、それ以外のことも、熱心に相談に乗ってくれたり、指導してくださいました。今年、博士論文を最終的に仕上げるために、アルバイトをする暇もなく、経済的な困難に直面している私に、ロータリー米山記念奨学会が支援の手を差し伸べてくださいました。ご支援のお蔭で、生活上の経済的負担が軽減され、私はさらに研究に集中することができました。そして、毎月の例会に限らず、夏の家族会、懇親会、里山の集いなどロータリアンの家族の皆様とさまざまな交流ができたことで、日本文化の理解がさらに深くなると思います。私は米山奨学生になってから一番幸いだと考えることは何より、ロータリアンの皆様とのお付き合いです。各分野で素晴らしい成果をあげておられるロータリアンの方々は、私にとっては人生、そして社会の大先輩であり、皆様から学校で学べないことをたくさん教わり、これからの私の方向性や社会人としてのあるべき姿勢を改めて考えるチャンスを与えてくださいました。ロータリーの活動を通じて人のネットワークが広がり、私はさらにたくさんの優秀な人に出会うことができました。成功と幸せという共通のゴールに向かっている人々から、私はいつも希望と情熱と努力し続けるエネルギーを与えてもらいました。

日本での留学生活を通じて得たものはとても大きいです。それは出会った人たちに学んだ前向きな姿勢、他人の立場を考える思いやり、異なる文化や習慣を尊重する寛容性、心の平和を保つ力です。

親元を離れ異国に来てから、いろいろ親切な方にお世話になりました。日本は、私の第二の故郷でもあります。文化の違いはあるものの、日本人の静かで、安心感のある優しい心に包まれて、今の私が出たとおもいます。この5年間どれぐらいの日本人に助けられたか数字では表現し難いが、心の中ではいつも感謝の気持ちがいっぱいでした。学業を終えた後は、日本で結ばれた縁を大切にしながら、何らかの形で日本に恩返しができるかと願います。来年4月より、私は日本のCRO企業で医薬品安全性評価の業務を携わることになります。私は製薬・創薬の将来性と業務にとっても魅力を感じており、是非、精力的に医薬品安全性に関わる仕事に取り込み、国際社会に貢献したいと思っています。世界の人々の健康と長寿を願い、自分が身に付けた知識とチャレンジ精神をもって頑張っていきたいと思っています。世界中の人々とともにより豊かでより幸せになることは、私がこれからのめざす夢です。最後になりますが、本日はこのような貴重な席にお招きいただき、誠にありがとうございました。これまでのご支援に改めて感謝申し上げますとともに、今後ともご指導いただきますよう、宜しく願いいたします。また、本日ロータリー米山記念奨学会委員会の時田様がわざわざ市原から足を運んで頂いたことに深く感謝致します。



4-11) 成田空港南RC米山奨学生卓話

奨学生 範雪奇

成田空港南ロータリークラブの皆様、こんにちは。私は範雪奇と申します。今年の4月から1年間、野田ロータリークラブの皆様にご世話になっております。毎月の昼例会、夏の夜間例会、懇親会で皆様と色々な会話をして、とても勉強にもなり、楽しい思い出がいっぱいできました。今日は皆様の貴重な時間がいただいて、私の事について紹介させていただきたいと思っております。

私の出身地は中国の遼寧省盤錦(ばんきん)という町です。私の故郷は北京や上海のような都市を比べたらとても小さい町です。地図から見ると盤錦は大連と瀋陽の間にある町です。「日本の方に出身地はどこなの?」と聞かれる時、私皆様分かりやすいために、は時に大連の人、時に瀋陽の人と答えています。また、東京から自家を帰る時、まず成田から大連に3時間半飛行機を乗って、大連から3時間半バスを乗って自家に帰れます。割と帰りやすいですか、お金と学業の関係で帰りたくてもなかなか帰れないです。私は時に大連人になり、時に瀋陽人になるのですか。実は私が故郷大好きです。「遼河」という中国七番名大きな河が流れています。おかけて水が美味しくて、そしてお米が全国トップクラスです。また、ちょっと今の季節になるとお米の畑から河蟹という蟹はたくさん出てきます。それは毎回思い出しと食べたくて仕方がないです。

下の写真は[紅海灘]という場所です。ここは真っ赤の海のような赤い草がいっぱいがあります。鳥の種類は260種もあるらしいです。

私は幼い頃世界を回ることを夢でした。2006年高校を卒業して、何時も親の下に生活するではなく、自分を磨き、視野を広めたいという気持ちで日本へきました。しかし、日本にきて、異国の生活に対する不安感や言葉の壁など自分想像以上の辛さは実際に感じました。そして、物価高い日本で生活為にお金が必要で、きた一月後アルバイトをはじめました。最初の頃、言葉が分からなくて、洗い場、築地で配達、ビル掃除、など色々なアルバイトをしました。学校の勉強をしたくても、アルバイトをやらざる得ない経験がありました。もちろん、私だけではありません、多くの留学生達が同じ経験があると思っております。

でも、私は6年間留學生活の中で色々な素敵な方々と「出会い」して、沢山の事を教えて、助けてもらいました。これから私の6年間の中で自分に取って大事な方々について話したいと思っております。最初、言葉ができない私にアルバイトを紹介してくれた留學生先輩達。日本語学校で丁寧に私に日本語を教えてくれた小原先生、アルバイト先で話だけではなく、漢字や絵などを使って一生懸命私と話した安達店長などと。大学ではじめて私の建築設計を認めてくれた安原先生、おかけて自信がつけました。野田ロータリークラブで会員に一人一人親切に私を紹介した駒崎さん。彼達の教えや助けた事は私にとって一生で忘れないと思っています。

学校の生活について話させて頂きたいと思っております。私は現在東京理科大学建築学科4年です。私は建築が大好きで、そして、日本の安藤忠雄建築家の建築を憧れて、何時が彼のような建築家になる事は私の夢です。今年6月頃、安藤さんは理科大で講演会が行いました。私は一番前に座ってて最後質問タイムの時に質問しました。当時 600 人もいるホールの中で、凄く緊張して、自分が何を言ったか分からないのですか、安藤さんは自分を言った言葉に対して返事する事だけ嬉しかった。

そして、学校で建築設計課題で出来たものを見せたいと思っております。少々分かりにくいかもしれませんが、写真をみながら説明したいと思っております。

次は 10 月 30 と 10 月 1 日二日間の研修旅行に取った写真です。私と同じロータリー奨學生が二日間の研修旅



行でロータリー米山記念奨学事業について深く理解ができるようになりました。地区委員長、委員方々と身近に会えて、平野さん、織田さん、秋葉さんは私たちのために努力している姿を拝見し、感動しております。そして、私たち奨学生は日中関係また国際的な貢献をするべきだと思います。私達奨学生は木の枝のように日本と自分の国を繋がっていく事は凄く素敵な事だと考えました。そして、将来奨学生のために、米山のロータリーアンの皆様だけに頼りだけでなく、私達もより留学生をロータリー米山の恵を感じさせるように頑張らなければならないことと思いました。

次は私は学校で作ったものを皆さんに見せたいと思います。少々分かりにくいかもしれませんが、写真をみながら説明したいと思います。

第一番目は大学一年時に、自分を住む部屋を空間化という課題で、一旦化け屋敷に見えますか、テーマは「浮かぶ空間」です。私は普段重みを持つ机、ペットを自分の部屋の中に浮かべるように見えることにしました。考え方としてはひらりの図のように、周りが黒とすると白が浮かんで見えます

二番目は若い夫婦と二人子供のために住宅を作る課題で、私は個人のプラバシーを守るために部屋を建物の4つ角に設置し、真ん中は皆が様々な話や活動出来る気持ちいい中庭を作りました。三番目は東武野田線の運河駅を改善する課題で、ここでは電車に乗る人だけではなく、電車を見る趣味を持つ人達、周辺の人達を普段でも来られるような広場を作りました。4番目は今年4年生の作品で、横浜みなとみらいで結婚場を作る課題です。私は結婚式は結婚する、彼らの友達や家族だけのイベントより多く人々例えば、偶然でそこに歩いた地域の人、旅にきた観光客なども参加できる施設をしました。この作品は学年優秀作品にも選ばれて建築学科の本も載せることになって、とても嬉しかったです。

現在は「現代小規模集合住宅」をテーマで、「山森邸」など 11 例、ピックアップした建物の専用部でありながら共有部にも近い性質をもつ空間、「複合領域」と定義し、新たな可能性を示す卒業論文だ。

私は6年間の留学生生活の中で今年が一番学業に専念し、勉強から得た喜びが多い年でした。それはロータリーアンの皆様の支え(寄付金)があり、本当に心の底から感謝しています。

最後、これは研修旅行の時に撮った写真です。国籍と関係なく、皆さんは素敵な笑顔でした。同じ奨学生のホセさんは何時も「皆は地球に住む人です」地区委員長平野さんは「国ではなく、人は大事だ」、ロータリーの素晴らしさを感動し、将来世の中に貢献出来る能力を身につけていきたいと思います。

まとまらない話かもしれませんが、おわりにしたいと思います。皆様の貴重な時間を頂き、ご清聴、ありがとうございました。



4-12) 茂原RC米山奨学生卓話

奨学生 王淑宜

こんにちは。王淑宜と申します。今日のスピーチをこれからさせていただきます。このスピーチは自由にはなせるようですから、いろいろはなしをしたいとおもいます。でも、時間が 15 分ほどしかないので、まず、はじめに自己紹介からさせていただきます。

私は 1966 年台湾台北の三峡鎮に生まれました、年齢は秘密ではなく、ことしで 46 才です。私の世話クラブである新千葉ロータリークラブと同じ年です。これは私と新千葉ロータリークラブの縁だと思います。父親は十数年前に突然に亡くなりました。父はいつもわたしが頼りにしていた重要な家族です。世話クラブのカウンセラーは森さんです。日本に留学する時の父親のようです。

私の家族は 6 人です。私と主人と義理の両親と娘が二人います。義理のお父さんは 75 歳ですが元気です。毎日自転車運動したり野菜を植えたりしています。15 年前に退職しました。義理のお母さんは 73 歳で、台湾料理がとても得意です。主人はデザイナーで、印刷物のデザインをしたり、絵を描いたりしています。長女は大学 4 年生で、専門は生物科学ですが、クッキーを作ることが好きです。次女は高校 2 年生で、可愛い絵が上手です。わたしの興味は染物だけではなく音楽も好きです。なぜ、この年齢になって留学したのかと言うと、それは子供のころからの夢だったからです。

私は 1987 年から台湾三峡地域において小学校教師を務めるかたわら、「三角湧文化協進会」という NPO を立ち上げ(1999 年)、藍染工芸振興を通じた地域づくりの活動を行ってきました。また 2000 年より、台湾国立師範大学の修士課程に在籍し、「三峡鎮における藍染工芸」を主題に研究を行い、当地の藍染工芸の歴史的変遷を詳らかにしました。修士課程修了後は大学講師を務めながら、ひきつづき藍染振興活動に力を注いでまいりました。三峡の藍染工芸は、戦後大きく衰退したものの、近年志ある地域の人びとの手によって再興しつつあります。今後もいっそうの発展が続くよう、活動に関わっていきたくと考えています。

日本を留学先に選んだのは、伝統工芸品振興に関して日本以上に参考になる国はないと感じたからです。日本では「伝産法(伝統工芸品産業の振興に関する法律)」をはじめとする、すぐれた政策がさまざまに実施されており、こうした政策のもと、伝統的な工芸技術がよく継承され、さらには革新的な技術も創造されています。そして、それゆえに伝統工芸品はけっして過去の遺物にはならず、あくまでも今日的な生活用具として人びとの生活に溶け込んでいるように見受けられます。こうした伝統工芸品のあり方を総合的に学習したいと考え、日本を留学先に選びました。

続いて専攻について紹介させていただきます。いま、千葉大学デザイン科学研究科博士後期課程三年生で、専攻はデザインコース、デザイン文化計画研究室です。私たちの研究室は、人心の華なりの理念のもと、ものづくり、生活づくり、地域づくりのために地域と結んで学び・考え・実践する研究室です。そして、国内外の地域社会と緊密に連携し、潜在的な地域資源の再発見・再認識をし、地域・歴史・自然と共生する維持可能な社会の構築を目指した教育研究ならびにデザイン提案を行います。具体的には、学生、研究者がともに、「野に出て生活を学ぶ」デザインサーベイ、地方自治体や公共機関、海外の大学・研究機関との共同研究を活発に行っています。わたしの研究は地元における失われた藍染めの文化です。地元で地域資源の再発見・再認識。昔からの三峡の藍染歴史を調査し、今の問題を分析し、これからの藍染めのデザインの教育研究を実践します。

去年、東北の盛岡(盛岡手づくり工芸館)と名古屋有松絞り工芸を調査しました。また、アジアデザイン文化学



会へ投稿もしました。毎年、福島県三島町工人祭りに参加しました。今回は三回目です。年末には、研究室の人達と一緒に放送大学へ行って、日本の注連飾りをつくりました。日本の文化を体験出来て本当に楽しかったです。また、二月一日、新千葉クラブ永井先生の追悼会に参加しました。永井さんは 94 才の年齢でもずっと例会に参加したいと言っていたそうです。それは新千葉クラブが大好きというだけではなく、深い絆(きずな)があったからだと思います。

それから、日本の生活について話させていただきます。日本に来たとき、最初は学校の寮に住んでいました。国際交流会館という寮に住んでいて、ほんとうに便利でした。部屋の中に机、椅子、ベッド、冷蔵庫、洗濯機などの家具がおいてありましたから、生活について困ることはとくにありませんでした。でも、学校の寮は一年しか住めません。二年目の時、寮の近くに部屋を探しました。最初、部屋の中に家具は何もありませんでした。それからの一ヶ月の間に先輩と日本人の友達から、いろいろなものをもらって、全部中古品ですが揃えることができました。とてもいいものでした。それらをもったお蔭でだんだん生活が便利になりました。その時、初めて日本語の『もったいない』という言葉の意味が分かりました。わたしもこれらのものを大事に使って、将来卒業して国へ帰るときには、つぎの留学生につづけて使ってもらいたいと思っています。『もったいない』とは、資源を有効利用するための素晴らしい言葉だと思います。

最後に、米山奨学生について少し話します。去年と今年、米山奨学生の皆さまと一緒に米山梅吉記念館探訪旅行に参加しました。わたしにとって、これは単なる観光ではなく、感謝と学習の旅行でした。米山梅吉記念館へいく意味はとても深いと思います。この時富士山を見たり、陶器を作ったり、一竹美術館で絞り作品を見学したりしました。ロータリーによって、本当にいい機会が与えられました。わたしはロータリー米山奨学生でよかったといつも感謝しています。このロータリーのお蔭でとても素晴らしい人々に出会うこともできました。

時間が早く過ぎて、もう三年生になります。卒業論文と投稿論文を準備しなければならないので、いま一生懸命勉強しています。



4-13) 成田RC米山奨学生卓話

奨学生 唐瑩

まず、自己紹介させていただきます。

皆さん、こんにちは！私は唐瑩と申します。唐は中国の唐の時代の唐です。瑩はくさかんもりたまで、宝石という意味です。でも、時々、ほたると呼ばれています。今年の4月から一年間、柏南ロータリークラブでお世話になっております。本日、卓話の機会をいただき、誠にありがとうございます。私と初めて会う方が多いと思いますので、改めて私のことについて紹介させていただきます。

私の故郷は中国の常熟市です。常熟は水の都と呼ばれる蘇州に属されて、悠久な歴史があります。(地図を見せる)学部は日本語学科でした。その時、なぜ日本語を選んだかというと、小学校4年生の頃、ちょうど常熟市が薩摩川内市と友好都市になって、日本の青少年文化交流団がうちの小学校に来て、書道、茶道、剣道などの日本文化をいろいろ体験させていただきました。その時、一番印象深かったのはきれいな着物です。また、ちょうど同じ時期に、「スラムダンク」、「名探偵コナン」などのアニメが中国で大ブームになりました。授業終わった時、いつも何人かの友達と一緒に、中国語の当て字で、アニメの歌を歌っていました。本格的に日本語を勉強した後、それはもういい思い出になりました。

2010年7月に大学を卒業して、9月に日本に留学しに来ました。日本語学校に通わなくて、直接麗澤大学大学院の研究生になりました。2011年4月に、修士に入学しました。私の専攻は日本語教育です。なぜこの専攻を選んだかというと、もともと言語を学ぶことが好きです。海外でどんなに頑張っても、日本語を勉強しても、日本社会という大きな環境に浸からないと、自然な日本語の習得が難しいです。また、実際の日本文化や日本人と接触しないと、日本はどんな国なのか、日本人と交流する時、どんなところに気を付けなければならないのかが分からないという障害と言えるところがあって、お互いに良い印象を持っていくのも難しいのではないかと思います。そのため、日本で日本語、日本文化を十分に勉強しようと決めました。今年の4月から、ロータリーの奨学生になることができたのは、私の人生にとって、本当にとっても貴重なチャンスです。日本文化に接する機会がいろいろできました。円滑なコミュニケーションを取るために、外国の文化を理解するのはもちろん必要ですが、その前に、自分の母国の文化も十分に理解しなければならないと考えています。もし、自分の文化を理解しなければ、外国の文化もうまく理解するのは難しいと言えるでしょう。次、米山奨学生になっている半年の間に、ロータリーと出会って、良かったと思うことを述べさせていただきます。

奨学生生活

奨学生として、カウンセラーの妻島さんのおかげで、南柏のお祭りやロータリークラブの納涼例会、柏市の茶道会などいろいろな社会活動に参加できて、日本文化を十分に体験しました。その中で、茶道の体験はすごく深い印象を残しました。

2012年7月15日、柏公民館で行われたお茶会に参加させていただきました。外国人にとって、日本の茶道がよく耳に入る言葉です。特に、日本語専攻の学生にはよく茶道を禅の精神と関連しながら卒論を書く人が少なくありません。もし、自分の身で茶事を体験できるなら、すごくいい経験が積めることなると思っています。お菓子の甘さとお茶の苦みが口の中で混ぜて、周りのお茶の雰囲気を感じながら、禅の精神の「直心」と「知足」をもっと理解できました。素直な心で現実の世界に向けて、たとえ貧しくても足ることを銘記して、すでに持つ



ているものに感謝の心がありますので、心が豊かになることができます。「茶禅一味」もそういう意味ではないかと思っています。日本語教師を目指している私は学生に日本語の知識を教えると同時に、日本茶道の「直心」と「知足」も伝えようと思っています。

さらに、ロータリーの奨学生になってから、留学の孤独や寂しさも消えてしまいました。南柏のお祭りや、ロータリークラブの納涼例会はカウンセラーの妻島さんのご家族と一緒に楽しく過ごしました。特に、今年の 10 月 10 日は私の 24 歳の誕生日でした。妻島さんのご家族がわざわざ忙しいところから時間を空けて、誕生日パーティーを行ってくれました。大学を卒業して、自分の家族を離れて、海を渡り、山を越えて、自分の母国とぜんぜん違う環境にいて、一人で頑張ってきましたが、こんな暖かい家族の雰囲気はもう久しぶりです。24 歳の人生の道にまだ幼いところがいろいろありますが、ほんとうに勇気と自信をいただきました。また、これから自分も鶴の恩返しという感謝の心を持って、この道で頑張っていきたいと思っています。

そのほかに、8 月に富士山も登ってきました。これは日本文化の体験だけではなくて、自分の人生にとっても、非常に貴重な経験でした。3776 メートルの頂上で、4 時 40 分ごろ、ご来光を見られた一瞬に、すべての疲れや高山病で起こった不快感などが消えました。自分が生きていることに感動すると同時に、日本に来てよかったなあともう一回実感しました。

中国文化と日本文化の違い

奨学生生活で、日本の文化をいろいろ体験しました。日本と中国はそれぞれ独自で、豊かな文化を持っているため、お互いの文化を理解し、尊重することで、平和な未来に貢献できるのではないかと思っています。次に、食の文化を例として、両国の国民性の一面を対照してみます。

中華料理のキーワードは「油っこい」です。料理によって、炒める、油で揚げる、揚げて煮る、焼く、餡をかける、蒸す、煮る、煮込むという作り方はいろいろありますが、火を通さなければならないという点では共通です。その一方、日本料理は目で食べるもので、美しく季節感が強いです。「生」「あっさり」「新鮮」というのは日本料理の特徴でしょう。冷たいお寿司やお弁当、おにぎり、お正月のお節料理と冷たい料理を一年中楽しんでいますが、「熱！熱！」というのが中国料理の基本です。

中国人の日常生活からも、そういう食に関する言葉がいろいろ出てきています。日本人の挨拶には、「今日は良い天気ですね」といった天気に関する話が多いでしょう。しかし、中国人の挨拶には特に「ご飯食べましたか？」という言い方が多いです。日本で「ご飯食べましたか？」とあいさつしたら、どう考えるでしょうか？多分「一緒に食事しませんか？」と食事に誘うイメージとなるでしょう。中国人がしばしば使う「ご飯食べましたか？」は普通食事時間の前後に知り合いと出会ったときに使われる「こんにちは」あるいは「こんばんは」にあたる軽い挨拶の言葉です。

これは「民以食为天(民は食を以天と為す)」という言葉があるように、中国では昔から「食」を生きる上で大切なことと考えるようになりました。貧しい時代には、この「ご飯食べましたか？」という挨拶は相手を気遣うもっとも端的な表現でした。「もう食べました」という返事は一日の大事である「食」が解決したことを示しますし、もし「まだです」という返事が返ってきたら、相手の窮屈を察して援助の手を差し伸べるそうした優しさの表現でした。しかし、今中国でも「食」の心配がなくなりましたが、「食」を大事と考えてきた中国人は「ご飯食べましたか？」をず



っと挨拶として使ってきました。今では、「こんにちは」「こんばんは」の意味だけではなくて、「ちょっとお話ししましょうか。」「お話しする時間ありますか？」を意味する言葉として使われています。ですから、「まだです」は「これから食事だから」と婉曲に断る場合、「もう食べました。」なら、「ちょっとお話ししましょう。」という意味を表し、そのまま道端でおしゃべりが始まります。

自分がやっていること

今、私は修士 2 年生です。研究テーマは「初対面会話における中日母語話者の自己開示の研究—大学生同士を対象に—」です。これは初めて会う人と良い人間関係を作るために、知らない段階からどうやって友達になるということの研究です。自分の研究結果が実際のコミュニケーションの場面に役立つことを希望しています。

中国と日本は一衣帯水の隣国です。米山奨学生の一員として、平和の未来のために自分の力を尽くしたいと思っています。



4-14) 佐原香取RC米山奨学生卓話

奨学生 グエンティホア

皆様、こんばんは、本日は例会で卓話の機会を頂きまして、ありがとうございます。私はグエン ティ ホア と申します。出身はベトナムのハノイです。どうぞ宜しくお願い致します。

皆様ごぞんじように、ベトナムは細長くて、資源が豊かな国だし、長い歴史がある国です。70年代にベトナムの南北は一つになりました。戦争が終わってから社会問題がたくさん抱えたそうです。今までもまだ注目された問題は枯れ葉剤です。こんな混乱の状況で経済的にはなかなか発展できなかつたと聞きました。1986年にドイモイの政策で市場経済のシステムへ移行したそうです。おかげで経済が発展しつつです。

私は商売をしている家庭で育ちました。子供のころから父の姿をみて、父と同じようになりたいと思いました。将来、経営者になりたいという夢を持っています。経済が発展した国で勉強できればもっと良いと思っています。日本の経済を深く理解したいと思っているからです。多くのことを学ぶことができ、新しい環境を作れると考えたからです。日本は第二次世界戦争後、何も資源がない国から、立ち直り、経済を急速に発展されました。それをみて、私は日本人には乗り越えられない壁がないと思いました。そのような国で経営を勉強することができれば、私の夢を叶えることができると思ったからです。その上に、日本と世界の経済知識も身につけられると思ったからです。

子供からアニメーションで日本を知りました。桜文化の人間を理解したいと思っているからです。また従兄弟は今日本に住んでいるから日本のことは一部理解できました。従兄弟は日本の治安が大変良いと言いました。日本人は優しく、誠実で行動にも熱心だと言いました。さらに日本人は責任感が強く、勤勉で時間を守り無駄しないと言いました。私はこのような厳しい環境で思い切り自分を試し、自分の成長につながると思ったからです。日本のことを聞いてからもっと日本に留学をしたいと思って、自分の目で日本をみたいです。実現したいと思っています。

2005年 10 月に留学として来日しました。約1年半に日本語学校で日本語を勉強しました。一年半で一生懸命日本語を勉強した私は日本語があまり充分ではなかつたんです。大学に進学したい気持ちが強かつたんですが。こんな日本語なんて大学に進学しても勉強にならないと思いましたので。専門学校に進学しました。この専門学校は進学のために日本語をたくさん教えてもらいましたので大学進学ができました。現在、千葉商科大学 4 年生になり、商経学部、経営学科、ビジネスマネジメント専門的を勉強しています。今「ベトナムの小売業界について」という卒業論文のテーマです。具体的はベトナムの小売業の分析しながら日本の小売業界と比較して、これからベトナムの小売業界はやるべくことも研究しております。この研究の選択のきっかけは2009年にサブライムの問題が起こってから両親の店も影響を受けました。その時、久しぶりに帰ってきました。更にベトナムの市場の管理の問題があり、商品の品質があまり良くないものがたくさん流されていますので消費者の不安感や、両親の悩んでいる顔を見る度に、小売業界の知識がたくさん身につけたいとおもいました。

今年の運が良く、米山奨学生に選ばれました。現在、習志野クラブにお世話になっております。米山奨学生になって、本当に良かったと思います。お金を頂いて、日本の文化や日本の事などを教えて頂きました。皆様は心が優しく、暖かくて、留学生の私達のための姿をみて、とても感動しました。知らない人からお金をもらったり、支えて頂くことなんて奨学生になるまえに思えませんでした。皆様のお陰で私はアルバイトを減らし、



生活も安定し、安心して勉強ができました。今日はこの機会の皆様へ感謝の気持ちを申し伝えたいと思っております。心から感謝しております。更にここで何もより良い人間関係を作るためお金ではなく、絆だと感じました。カウンセラー小林さんは例会日にいつも駅まで迎えに来てくださいます。就職活動についてアドバイスを頂いて、相談もたくさんさせて頂いています。8月の一日に私のため、ベトナムに進出している企業に見学で連れて頂きました。本当に感動しました。日本に来てから初めて一人じゃないと感じました。こんな大きい家族なんて夢のなかにも見たことがない私はとても嬉しいです。皆様へ会えて、私のことを支えていただいて、母のことを思い出しました。国に居た時、母のそばにいる間はどこかへ行きたいと思っていました。毎日、母はうるさかったです。いつも「ホアさん勉強して、遊ばないで、いろいろなことをしなさい」といわれました。当時の私は何で私のことなのに母がうるさいなあ？母のそばにいたくないと思いました。日本に来たばかりの時の私はとても嬉しかったです。今から私は自由だと考えながら一人で笑いました。何をやってもうるさい母がいなくて好きなことをやっても母に叱られないと思いました。日本で一人の生活がどんどん嫌いになってきました。言葉が通じなくて、困ることがたくさんありました。自分で解決しなければなりません。こんなことがあるたびに家族が大切なものだと分かってきました。何度も、泣きながら母に電話して、帰国したい、家族に会いたかったです。一番会いたかった人は母でした。母にとって私は20、30歳になってもまだ子供です。ロータリーの合格の通知があった時、母に電話しました。「お母さん、これから私は一人じゃないですよ。日本に大家族があり、私のことは面倒をみて下さり、励まして下さりますので安心して下さいね」。今度も泣きながら母に知らせました。カウンセラー小林さんは私のおじいちゃんと同じような存在です。実は5才の時、枯れ葉剤の影響でおじいちゃんがなくなりました。とても寂しかったです。おじいちゃんがいれば、遊びに連れていただいて、お正月の時にお年玉をもらえらると思っていました。今大人になってもおじいちゃんにいろいろ教えてもらいたいです。小さいころから近所のおじいちゃんは自分のおじいちゃんになってほしかったです。ですが、習志野ロータリーのクラブのメンバはとても優しく親切です。いつも大変お世話になっております。ロータリーの子供になれた私は日本の留學生活で私にとって一番誇りだと思います。ロータリアンと積極的に交流しながらロータリーの奉仕の心を学んでいることも私には大変貴重なことです。今後もご指導いただきますよう、宜しく願い致します。ご清聴、ありがとうございました。



4-15) 千葉緑RC米山奨学生卓話

奨学生 サジーワニーツルマル

地区委員及び千葉緑ロータリークラブの会長様、
ロータリークラブの会員の皆様、
こんにちは、はじめまして

私は、千葉大学人文社会科学部研究科、サジーと申します。

本日は、千葉緑ロータリークラブを訪問させていただき、皆様とお会いできたこと大変嬉しく思います。どうぞ宜しく願い申し上げます。

子供のころから苦しかった道がロータリー奨学金で明るくなりました

ロータリアンの皆様のおかげで、ロータリー米山奨学金をいただき、大学院で勉強させていただいていることを心より感謝申し上げます。皆様方の大事な寄付金のおかげで大学の研究をもっともっと進めることができいております。ロータリー奨学金は私にとっては大変な宝物です。

ロータリー奨学金をいただき、松戸西クラブや他のロータリークラブの方々とお会いできたこと大変嬉しく思います。昨年の5月から奨学金をいただきました。私は今まで奨学金をいただいたことがなく大変困っておりました。ずっと雨が降らなかった砂漠に急に降りだした雨のように、米山奨学金を頂きました。言葉では、言い表せないほど皆様方に感謝しております。

私は来年の4月まで皆様方のお世話をいただきながら、松戸西クラブの例会に参加させていただきます。また、ロータリークラブの皆様方と交流を深めていきたいと思っております。

米山奨学生としてできるだけ、ロータリーの活動に協力することをお約束致します。

ロータリークラブや地域で開催される活動に関心を寄せ、また、スリランカの文化も伝えていきたいと思っております。

ロータリー奨学金が終わっても皆様方との交流を大切にしたいと思っております。ロータリーの奨学金がなければ私は今博士課程にも進学できなかったかもしれないです。ロータリアンの皆様とロータリークラブは私にとっては本当に神様のような存在です。スリランカの親も貧しいため日本での生活費や授業料などを払うことができない時に、ロータリー奨学金で大学の授業料を払うことができ、とても助かっております。本当にありがとうございます。感謝の気持ちでいっぱいです。

博士論文の調査の段階から、論文を提出するまで、ロータリー奨学金は私にとって役に立っています。スリランカに帰ったら、博士課程の勉強ができる大学がないため、どんなに困ったことがあっても一生懸命に研究を続けていきたと思っております。できるだけ日本で勉強して帰りたいと思っております。

私は、日本とスリランカのよい関係が続けるために、また、スリランカの日本語教育のために役立ちたいと思っております。ロータリー奨学金のおかげで私は充実した学生生活をおくることができ、地区委員の皆様、ロータリアンの皆様には大変感謝しております。

私は子どものとき、家庭が貧しかったことから、日本人の里親に奨学金をいただきました。その奨学金が日本語を勉強することに興味を持つきっかけにもなりました。その奨学金は、私の勉強のために必要であり、



学用品も全部いただけて、私の勉強を支えてくれました。長い時間雨が降らなかった砂漠に急に降りだした雨のような奨学金の大切さは、言葉で言い表すことができません。そのご恩に報いるために一生懸命勉強してきました。そして、いつのまにか日本に興味を持ちました。日本人には経済的な豊かさだけでなく、心の豊かさがあるのだと感じたからです。スリランカの大学を卒業後、日本人の里親のおかげで留学するチャンスができました。高校と大学では日本語を専門として学び、大学へ行きながらスリランカの男子校の日本語の教師として教えていました。

私の留学の大きなきっかけとなったものは、やはり 2002 年に国際交流基金の奨学金を頂いてスリランカの日本語教師代表として参加した、研究プログラムだと言えます。短期のプログラムであったために、深い知識までは得られなかったものの、日本語教育と日本文化についての知識を深めるためには、日本への留学が必要であるということはこのプログラムから強く感じました。スリランカの大学には、日本語を専門的に研究するための設備と参考文献が不十分であり、また修士・博士課程においてそれらを指導できる教官がいなという問題もあります。私はいつかスリランカにおいて日本語教育と日本文化の教師となり、両国のための架け橋となる存在になりたいと思います。

日本に留学したため、日本語教育についてより深く勉強したいと思い、千葉大学の文学部の日本文化学科で、日本語教育と日本文化について2年間研究しました。それから、千葉大学人文社会科学研究科(地域文化形成専攻)で修士課程を修了しました。このように日本で勉強できたことは私の人生でもらった一番大事なことだと思っています。また、貧しくても日本語を勉強したいという気持ちが強かったので、せっかく日本に来て修士課程修了まで頑張ったので、もっと研究を深くしたいと思い博士課程にも進学しました。博士課程では、日本語だけではなく、もっと深く言語学について研究を続けたいと考えています。

日本へ留学したら、物価の違いで経済的に困りました。しかし私は自信を持って勉強を続けました。その支えになったのも日本でできたたくさんの友人の方々のおかげです。

ロータリー奨学金のおかげで一生懸命に勉強することに深く感謝しております。

また、博士課程に進学し、言語学専門の指導教員の先生の心の優しさが私の人生でいつまでも忘れられませんが、先生方が私たちを指導する過程に素晴らしさを感じました。素晴らしい先生方に恵まれていることは、私が今後教員になったときに活かされていくことだと思います。私はスリランカでは子供の時から先生をととても尊敬していました。日本に来て日本人の先生方は神様と同じだとよく感じました。

千葉大学に入学して、一生懸命勉強したにもかかわらず、修士課程を卒業するまで奨学金をいただくことができませんでした。何度も大学の留学生センターにもお願いをしましたが、なかなか奨学金をいただくことは難しかったです。国の親も経済的に大変貧しいため、私の学費や生活費を払うお金を送ることはできません。悩みがたくさんあったけれども、いつか仏様と神様が見てくれるはずと考えており、一生懸命に勉強しました。スリランカの子どもの教育に支援する日本の里親や、日本で出会ったお友達のおかげで、無事に修士課程を卒業することができました。

今までいくら困ったことがあっても一生懸命に勉強してきたのだから、博士課程にも進学し、研究を続けようと考えました。研究を始める前に、色々な奨学金について調べてみたところ、米山ロータリー奨学金について出



会うことができ大変嬉しく思いました。ロータリー奨学金に採用されたら、奨学金をいただくことだけではなく、世話クラブやカウンセラー、ロータリアンの方々と一緒に交流もできて、日本文化やいろいろなことについて知ることでもできると思いました。

貧しい国から留学した、貧しい家庭の私にとってはロータリーの神様が見てくれました。

ドキドキしながらロータリー奨学金の受験や面接に行き、面接を受けた時にいらっしゃったロータリアンの方々の顔を見て大変驚きました。

ロータリークラブにはこのようなご親切な方々がいらっしゃると思って、ロータリー奨学金に採用されたらこのような素晴らしい方々に恵まれると考えました。日本人には経済的な豊かさだけではなく、心の豊かさがあるのだと感じました。

私が信じている仏様と神様が見てくれてロータリー奨学金試験に合格することができてとても嬉しかったです。それから、地区委員や私の世話クラブのカウンセラーを紹介してくださいました。私の日本での留學生活ではこのような素晴らしい奨学金をいただいてとても幸せです。私は出席しているお世話クラブや地区委員の皆様、私のカウンセラーが私にとっては神様の存在です。毎回例会に参加しております。日本の文化やロータリーのマナーなどたくさんのことを勉強できています。

私のカウンセラーの方も私の本当のお父様と同じようにいつでも私の面倒を見てくださいます。ロータリー奨学金をくださって私の留學生活はどんどん幸せになっております。今まで経済的に大変困っていたので大学の学費など払うことができなくてとても大変でした。ロータリー奨学金をいただいてから何も困ったことがなくとても幸せに研究を続けております。米山奨学金をくださったことに対して、ロータリアンの皆様には心より感謝申し上げます。

これからも、私のカウンセラー、地域委員、クラブの皆様のおかげでいろいろなロータリークラブとネットワークをしながら研究を続けたいと思います。

いつか、国に帰っても米山ロータリー奨学金のことを一生忘れません。博士課程を卒業してもロータリークラブの方々の関係を維持しながら日本とスリランカのかけ橋になりたいと思います。ロータリークラブの皆様にご心より感謝申し上げます。

皆様のご多幸と仏様の御加護がありますようにお祈り致します。これからも宜しくお願い申し上げます。



4-16) 鮎子東RC米山奨学生卓話

奨学生 劉維琴

皆様、こんにちは。

私は劉維琴と申します。日頃皆様方に大変お世話になっております。この機会をお借りして深く感謝を申し上げます。

この7ヶ月余り、皆様と共に様々な活動に参加させて頂きました。私にとって新しい文化と触れる機会ができて、とても貴重な体験になったと思います。私のことをよくご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、改めて私のことについて話しをしたいと思います。

私の出身地は中国湖北省の武漢市です。湖北は「洞庭湖の北側」という意味です。省内には三国志の遺跡が多く、「赤壁」の遺跡は日本の方々によく知られていると思います。また、長江三峡と神農架原始森林などの景観を含めて、見所が大変多いです。武漢は省都として人口800万人ですが、昔から交通の要所として便利な都市です。現在は日本の企業も沢山進出してとても活気があります。

私は 2007 年に日本に参りました。現在は千葉科学大学の大学院・危機管理学研究科で、糖尿病における糖タンパク質と血小板に関する研究をしております。将来はこの研究成果を通して日本の社会に貢献したいと思っております。

私が日本に来て、最も強く感じた事は社会における平等と公平、または法律やルールが厳しいことと、弱者に対する思い遣りが徹しているということです。

日本人から「なぜ遠い中国からわざわざ日本に留学しに来たのですか？」という質問をよく聞かれました。私が日本に来た理由というのは、日本の科学技術が高いということを知っていたからです。さらに、数年前、中国と日本で合作したドキュメンタリー番組を見ました。それは、中国の留学生であった張麗鈴さんが作製した「私達の留学生活～日本での日々～」というものでした。このドキュメンタリー番組が中国において放映されました。この内容は日中両国で大きな好評と感動を与えました。番組中の主人公たちが日本で一生懸命に頑張っている姿が私の胸を強く打ちました。特に、「年齢など関係なく、本人さえ頑張れば、日本では様々なチャンスが得られる」ということでした。これは私がその番組から受けた最も強いインパクトでした。私はその時、一衣帯水の隣国である日本に初めて興味を持ちました。これにより、私は「いつか日本に留学したい」という夢が芽生えました。そして日本語の勉強を始めて、日本語能力試験2級に合格しました。

日本において勉強したいと思っていたことは、私は長い間、看護師として病院に勤めておりました。この時、中国社会において、複雑で様々な医療危機を見ました。しかしこれに対して自分に能力が欠如していたため、何も出来なかったことに苛立ちを覚えました。そして、千葉科学大学の「危機管理意識を有する臨床検査技師を育成する」という教育方針を知って、「臨床検査」と「危機管理」という2つのキーワードに目を引かれました。また、中国の病院において、臨床検査技師は医師に近い存在であるため、キャリアアップのことを考えると、「危機管理」という斬新の概念は将来母国の医療に役に立つのではないかと思い、留学を決めました。

日本に来て今の大学に入学した当初は、異国の生活に対する不安感を強く感じました。考え方のギャップが大きく、学業に付いて行けるかどうかとても心配でした。また、日本の習慣もよくわからないので話をすることもできず、従って知り合いもいなくて寂しい思いをしました。特に、雨の日の通学中に自転車が転倒して足に大怪我をしました。しかし、修学は大事なことから、片足で自転車をこいで通学した経験も有ります。その



とき精神的に苦しくて、学校を辞めて中国に帰ろうとも思いましたが、勉強に対する強い熱意のもとに自分を支え続けました。そして、時間が経つに連れて同級生や周囲の人達と親しくなっていました。その結果、今のようによく朗らで、アクティブな習慣を身につけることができました。今回の留学を通して、学校で勉強するだけではなく、日本の文化、日本の社会、そして日本の制度などあらゆることを知りたかったので、私はキッチンスタッフ、海産販売、ホテルサービス、不動産事務、家庭教師などのアルバイトをし、NPO 主催の様々な地域活動やボランティアなどにも参加しました。

充実した日々を送っている間に、中国人の主人と結婚しました。今は可愛くて元気な娘がいます。思い起こすに、赤ちゃんを産んで 1 ヶ月余りの頃、日本では史上最悪な大震災が起きました。日本の被災者は悪夢のようにお思いになったことでしょう。しかし、当時日本にいる私の一家にも身をもって地震の恐ろしさを実感しました。小さな揺れにも大きな恐怖を感じました。その時、赤ちゃんを抱いて外の駐車場に飛び出したことは何度もあります。毎日放射能の情報をテレビで収集し、安堵感を得ていました。赤ちゃんはこのことを知りません。赤ちゃんは無邪気な笑顔で私と主人を見つめて困難を乗り越える勇気を与えてくれました。

生まれたばかりの赤ちゃんの成育に必要なものが沢山あります。一方で、水道や電気、通信などのライフラインも一時的に中断されました。さらに、交通手段も無く、途方に暮れている時、日本の友人達が次々とやって来て、食品や、水、粉ミルク、おむつなど沢山の生活に必要なものを届けてくれました。これによって、私達は大きく勇気付けられました。中国のことわざで「困難を経ってから真の情けが生まれる」という言葉があります。私は人生において初めてその意味を体験しました。これは、私の最も困難な時期に日本の友人たちが国境を超えて友愛と支援の手を伸ばしてくれたことです。そして、「友情」という真理を私に教えてくれました。この時私の一家を助けてくれたのは、中国の親友であり日本の親友で有りました。また、学校の先生方、アルバイト先の社長、家庭教師先の人達など沢山のの方々です。強大な地震と合わせて、放射性物質が銚子市に飛来したことを知った香取市在住のお年寄りの夫婦二人は子供の生活用水が放射性物質によって汚染されていることを理解して、自分の家の被害を顧みず、車で往復 2 時間の距離を定期的に地下 30 メートルの安全な井戸水を汲んで届けてくれました。さらに、アルバイト先の社長は地震後さらに厳しくなった主人の就職を支援するとともに、東京にある自分の家も無料で貸して頂いております。言葉だけでは言い尽くせませんが、私達一家が今まで無事に来られたことは多くの方々の支援によるものであり、本当に心の底から感謝しています。

私は一人で日本に来ましたが、多くの友達の友情、学業、家庭を通して、日本の生活習慣を学びつつあります。この事は日本に来て本当に良かったと思います。

来日して既に 5 年が経過しました。今年の 4 月に、ロータリー米山記念奨学会の奨学生として推薦されて、ロータリークラブの皆様とご縁を頂くことになりました。カウンセラーの澤田さんをはじめ、クラブの皆様が優しく私と接して下さったお陰で、不安定な心がやっと落ち着くようになりました。特にカウンセラーの澤田さんは私の人生の先生であり、過ちを正して頂き、世界一安全な国である日本はその厳しい法律と制度に基づいているということを教えてくださいました。さらに、私のために誕生日会を設けて頂き、美味しい家庭料理を楽しみながら日本の文化や風習なども詳しく話をしてくれました。

奨学生になって半年が経ちますが、奨学金は多額であり、生活上の経済的負担が軽減され、研究に専念する事ができました。社会的地位と深い理念を持ったロータリーの皆様と接していると、小さな世界しか分からな



かった自分の視野が大きく広がり、少しずつ変わって来ていると感じています。毎月一回発行される「ロータリーの友」という雑誌を読ませて頂いております。特に感じたことはポリオの撲滅、識字率の向上、貧困の削減など、世の中で困難な状況を打開するため、ロータリアンの皆様が懸命に努力されている姿はとても素晴らしいことであると始めて知りました。社会の一員として社会のために何に貢献してきたか、また生きているのは何のためかと自問自答した時、私は心の虚しさを感じました。ロータリーはその扉を開けて、全く新しい世界を見せて下さいました。その結果、自分の無知に対して自覚ができ、ロータリーの精神は世のための奉仕に対する考え方を教えてくれました。

「愛されて初めて愛することができる」。この内容はロータリーの会員と雑談しているときに、学んだ言葉です。私を日本で優しく接して下さった分を何らかの形で恩返しをしたいと思っています。優しく接して下さった方々のように娘にも優しくなって欲しく、娘の名前を「予馨(ユイシン)」と名付けました。これは「人に香りのいい気持ちは差し上げる」という意味です。いつまでも、どこに行っても、何の仕事をやってもこの使命を忘れられないように、また、人に善をなしている中で真の愉悦の源を見つけて欲しいという願いも込めております。

日本は今では私の心の中で寛ぎやすく第二の故郷のようなところとなりました。自分と日本の関係は私の命の中で切っても切られない間柄になりました。中国人にせよ日本人にせよ、地球上に生きている人間同士の観点から見ると、何れにしても、ロータリーが標榜する4つのテストが我々に告げているように、真実で、公平に、好意と友情を深められ、皆のためになるのであれば、すべての場合に平和が見込められるはずだと思っております。

実際に、私のある日本の友人は30年前から中国語を独学して、日中の友好に努力を払って来ました。そして、政治上の混乱が収まらない時期、今年の9月に中国へ旅立ちました。目的は中国の友人と友好を図るためです。混乱の最中であるにもかかわらず、敢えて訪中したことは、彼と中国友人との間に強い信頼関係があったためと思われまます。

蛇足になりますが、彼の話によると、彼の多くの友人と千葉科学大学を卒業した留学生も含め、最善をしてくれたそうです。彼は複数の都市を訪問しましたが、皆は必要以上に安全を考えてくれたそうです。

これこそ、本当の日中友好の関係ではないでしょうか。私は両国を愛しています。これを前進させるためには、「架け橋」が必要ではないでしょうか。やはり、私の日本の友人のように長期に渡って、民間の友好関係を維持することが最も大切だと思います。

私は未熟ですが、皆様は温かい心で私を指導し、見守ってくださっております。私はロータリーの一員となることによって、単なる栄光に浴することだけではなく、ロータリーの奉仕の心を学びながら、将来世の中に貢献のできる能力を身につけて行きたいと思っています。僅かな力でも日中両国の相互理解を増進するために精一杯努力し、一人でも多くの方がお互いの国に興味を持っていただき、理解して頂くことを願っています。

私のような中国の若者が日本に留学に来て、見聞を広げるならば、日本に対する理解はさらに深まるはずだと思います。我々留学生を受け入れて頂くことは、学校の先生方をお願いすることであり、また皆様方にご支援とご理解を切実にお願いすることです。一方、日本の方々も機会があれば、ぜひ中国にいらっしやって、中国の多くの人々と交流を図り平和と友好の心を感じて頂ければ幸いです。

まとまらない話ですが、これを持ちまして、話を終わりにしたいと思います。



4-17) 市川RC米山奨学生卓話

奨学生 張秀玲

市川ロータリークラブの皆様、こんにちは。只今ご紹介にあずかりました米山奨学生の張秀玲でございます。台湾の出身です。いま、浦安市にある明海大学で勉強しております。おととしの4月から米山奨学生になり、2年間ずっとお隣の市川東ロータリークラブでお世話になっております。ロータリーアンの皆様方のご支援により、奨学金を大事な学問追究の糧として活かしており、おかげで勉学に専念ことができ、今年無事論文提出し、3月をもって終了することができました。この場を借りて、皆様に厚く御礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

今日は、この市川例会場での卓話の機会をいただけたことに、とてもうれしく思います。お世話になった感謝の気持ちを兼ねて、色々お話をさせていただきます。

それでは、まず私の自己紹介からお話しいたします。

私は台湾南部の屏東（ピンドン）という小さな地方都市の出身です。屏東は漁業や農産物が豊富な所で、台湾南部の一番大きな都市—高雄の少し南の所にあります。日本の感覚で例えていると鹿児島です。屏東は台湾の二番目大きい平野があり、昔日本人の開拓のおかげで、いまは重要な農産物の生産地になりました。稲作のほか、サトウキビやバナナ、西瓜、パイナップル、レモン、蓮霧（レンブ）など様々な熱帯果物の栽培も盛んです。

屏東は70、80年前の日本時代の建設はたくさん残っていたため、日本のことをとても親しみに感じられる所です。一つの例を挙げれば、実家の近くに、あたり一面大きなサトウキビ畑が東京ドームの何10個分の広さで全部「台湾製糖」の土地でした。子供の時、いつも収穫の時期になると、子供たちはサトウキビを載せたのろのろ運転の汽車の後ろについて、落ちたサトウキビを拾って、硬い皮を歯で噛み取り、中の甘い汁を飲んで楽しんでいました。実は、このような懐かしい思い出の背後には、私が日本留学に来てから始めて知ったのですが、元々屏東の荒れた土地を畑に変えたのは日本人技師（鳥居信平：とりい・のぶへい）による賜物だという歴史があります。100年前に何も植えられない荒地だった土地を開拓し、水を確保した地下ダムや農業用水路を作ったおかげで、農業生産が従来4～8倍を高めることができました。そのため、住民の生活は大きく改善されました。だんだん屏東が「農業大県」と呼ばれるようになりました。

私は兄1人、姉2人と妹が1人の五人兄弟の四番目で生まれ育ちました。父は小さな果物の運送会社を営み、その傍ら、果物の栽培をする所謂兼業農家の仕事もしていました。私が六つのおき、ちょうど父の事業が順調に行こうとしているときに、母は事故に遭い、急に亡くなったため、父の人生計画には大きく狂い、気が強い父は決して他人からの援助を求めないこともあり、何事もうまくいかなくなる日々がしばらく続きました。男手一つで五人の子供を育てるのは並大抵のことではないため、食べていくのにずっと苦労していました。しかし、決して私たちを手放すことはしなかったことに今でも感謝しています。

そんな中、「勉強なんかやる場合か！まず稼ぐことを考えろ」と口癖のように言う父を見て、父の負担を減らそうと思った上の姉は中学を中退し、父の仕事のお手伝いことになりました。まだ小さい私と妹が放課後、留守番を兼ねて、料理・洗濯・お風呂沸しなど家事全般、



それに運送業務の会計や電話係などをしていました。学校の休みの日になると、いつも農園仕事の手伝いに行かされました。肥料をやったり、果物の収穫をしたりして、一日 8 時間以上の重労働をしていました。夏休みなどの長期休暇になると、毎日農作業が待っているのです。むしろ学校に行けるのはずっと楽しかったです。そのため、ちょっと現実に離れたと思う時、本をたくさん読み、本に描かれた違った夢の世界に溶け込みました。いつの間にか本を読むことが大好きになり、図書館や友人から借りた日本の漫画や絵本、童話などもたくさん読んで、日本のことを親しみに感じるようになり、色々憧れていました。このごろの思い出は後になって、日本語を勉強する時の大きな支えとなりました。

次は、私の日本語の勉強と留学のきっかけについて、お話しいたします。

無事高校を終えた私は、授業料無料の教育大学を望んだが、残念ながら入試成績が足りなくて挫折してしまいました。センター試験の成績によって、台北にある私立大学の日本語学科に振り分けられました。その時、ちょうど学資ローンの貸付制度ができたおかげで、親の援助がなくても何とか無事大学に入ることができました。

大学の勉強は面白かったのですが、日本語がまったく初心者な私には、最初の時授業についていくのにずっと大変でした。カタカナやひらがな等の表記がなかなか覚えられないし、それに「あなた／あなだ」「わたし／わだし」「だでど／られろ」などの区別ができなくて、困っていました。また都会出身の同級生とのレベル差も思い知らされ、一時勉強する気力が失ってしまい、中退までも考えました。

そんな中、ある先生に声かけられ、私の悩みを打ち明けたら、一つ一つ親切にアドバイスをしてくださいました。さらに、学校の日本語センターでの短期アルバイトの仕事も与えてくださいました。身近に先生に指導して下さることができて、勉強のコツをだんだんつかむようになりました。またアルバイト収入で経済的負担が軽減され、心の落ち着きが出ると、自然に日本語の勉強も軌道に乗るようになりました。その先生のおかげで、日本語が大好きになり、その後、人一倍に日本や日本語のことを猛勉強し、いつかあの先生のような立派な先生になりたいと志しました。

大学と大学院では日本言語文化の専攻で、多方面にわたり日本文学や日本の歴史・文化などの学問もたくさん習いました。自分は教師になりたいと志したので、日本語教育文法を専門として論文を執筆しました。在学中に、日本語を応用できる仕事も色々探していました。塾の日本語教師や個人指導、日本語通訳・翻訳の仕事など色々やってきました。やりがいがあるものの、挫折も多かったのです。

一つ挙げると、台湾の大学を卒業間近の時、国際ブックフェアの日本語通訳の求人に応募していたら、面接官は日本語があまり分からず、面接者にただ歌の歌詞を朗読させ、面接官自身がローマ字表記のあるメモを目で追ってチェックするだけです。結局私は通訳者のポストがもらえず、給料が少ないほうのアシスタントのポストでしか採用されませんでした。最初は、通訳に選ばれなかったのは自分の語力不足のせいだと思いました。結局、仕事は 2 人 1 組のコンビで、通訳者とアシスタントですが、二人の仕事内容がはっきり区別していないことが分かりました。コンビを組んでいた通訳者は国立 T 大の歴史学科の出身で、日本語が私より遥かに劣っていました。「なんで通訳員に選ばれたのか」を面白半分聞いてみたら、「面接の時に日本に何度か旅行に行ったことがある。そして、来年日本に留学する予定



だ」と答えた」とのことだけで通訳員に採用されたそうです。その時、はっきり分かったのは、いくら頑張っても日本語が上手であっても、日本に行けないと、人脈なしの私は日本語が活用できる仕事を探すのはなかなか無理ではないかと悟り、留学の決意が強めた。

初めて日本留学の夢を果たしたのは 1999 年でした。日本交流協会の奨学金を受けて名古屋大学の大学院に入り、修士号を取りました。その時、自分の目で日本の社会を実感できたことにとってもよかったと思います。留学経験のおかげで、帰国後無事教職を得ることができ、大きな自信も取り戻しました。

再び留学を考えたのは 3 年前のことでした。台湾では大学の教職を確保するには博士学位がどうしても必要になってきたからです。正直に言って、金銭的にも体力的にも大きな負担ですが、勉強するなら、もう一度日本に戻り、学術重鎮である日本の本場でしっかり専門知識を学び、と同時に日本社会のこともしっかり観察し、日本の底力を学ぼうとの一心で日本留学を賭けました。

2010 年に無事日本に戻り、明海大学の大学院で日本語教育大家の先生について、台湾人学習者の語学学習のための教育文法を研究してきました。ロータリアンの皆様方のおかげで、奨学生になってから勉学に専念することができ、3 月をもって修了できます。2 月下旬に一足先に台湾に戻り、再び教壇に立ちます。留學生活で習ったことを大学生と高校生に紹介して、日本の社会を通して台湾のことをもっと大事にするようなことを色々教え、自分の職業を通して専門知識を生かしながら社会に奉仕し、世界平和のため微力ながら色々貢献したいと考えております。

日本に来て異国生活に対する不安感をあまり感じられませんでした。ただ、最初の頃は、分からない習慣などがいっぱいありました。中に一つ印象深かったのは、日本で初めて冬を迎えた時のことでした。

暖房器具の給油で、いつも町中に灯油販売の車をよく見かけました。当時「とうゆ」という言葉の意味が分からなくて、灯油販売の車が来る時、下宿先の二階の部屋からいつも「雪はこんこん、あられはこんこん…」の歌の後に、「とうゆ～とうゆ～」というアナウンスの音が聞こえてきました。そのとき何の販売の車かまったく分かりませんでした。聞こえた音声から勝手に想像し、「とうゆ」だから、台湾語の発音には「お醤油」のことを「豆油」と呼んでいますので、日本の「とうゆ」というのは伝統的のある「豆で造って油」の「豆油」だろう、それは老舗の「お醤油」の直接販売だろうと思い、勘違いしました。見るとその車が来ると、いつも周りの住民が大きな「とうゆ」を入れる容器を持ってきて、「とうゆ」を買うのです。子供時代の行商人の姿を思い出され、その時「あ、あその醤油はきっと有名でおいしいに違いない。でないと、こんなに人がいっぱい列を作って大きな容器を持って買ってくることはないだろう。いつか、私も買おう」と思ったことがありました。後になって、「灯油」という漢字を見ると、やっとそれは暖房器具用の「灯油」のことだと分かりました。

この思い出話はいま思うと、笑い話になるのですが、こういう言葉はやはりこの土地で生活していないと、いくら日本語学習経験が長い外国人でも、なかなか習うことはできないことだろうと思います。日常生活にしか体験できない「文化」があり、その国の社会文化の特徴が密かに潜んでいるからです。

この留學生活のおかげで、いろいろ異国での生活体験ができて、家族や友人との雑談に、台湾との比較もいろいろできました。「灯台もと暗し」と言うように、比較してみないと自分の周りのものをあたりまえのようになり、感心しなくなったりすることはよくあります。やはり比べてみて、初めていま持つ



ているもの、住んでいる土地の大切さ、ありがたさを改めて感心させられることがいっぱいあります。

おとし、日本では史上最悪な大震災が起きたとき、私は下宿先の浦安にいました。そんなに長く大きく揺れたのは初めてで、びっくりしました。まさか浦安も液状化でひどい状態になったのは思いもよらなかったのです。学校のキャンパスでは大きな陥没があり、あちらこちらに土砂の噴出、高洲の下宿先にもひどいひび割れでした。テレビがない私は、幸いインターネットが使えるので、家族や友人にもすぐ安否報告がすぐでき、情報収集もすぐできたことには、非常に安心しました。NHK などの民放放送もしばらくしてから、無料インターネット放送が始まったため、私のようなテレビがない人には貴重な情報源です。液状化被害で町中はひどかったが、幸い人的な被害がなくてよかったです。この地震から学ぶことが多く、台湾にも一日も早く自然災害に対応できる力が備えられることをお祈りします。

たとえば、台風・地震のような自然災害の時だけでなく、日々の生活に根ざした言語情報弱者をつくらぬ言語環境づくりが求められます。国籍・母語による言語情報の受信力・発信力の違いを視野に入れての災害・震災情報の即時性や地域性、そして公共性の確保はこれからの日本の社会の基盤づくりの重要な課題の一つであると考えられています。日本社会における情報の受信・発信弱者の声からの教訓は、これからの非常事態の時にける情報提供、さらに防災のための情報提供を考える上で重要なことです。手話通訳、日本語字幕付、多言語放送等をつけて、誰でもわかる簡単な「やさしい日本語」での放送、日本語があまりできない外国人の観光客に向けての情報提供などの課題が少しずつ注目するようになったのですが、台湾はまだまだこのような配慮が行き届いていないのが事実で、今後もっと積極的に日本の経験を台湾の社会に発信したいと考えております。

今まで無事に来られたことは多くの方々の支援によるものであり、本当に心の底から感謝しています。奨学金のおかげで、日本留学の夢がかなえられ、経済的負担が軽減され、研究に専念する事もできました。そして、留学生生活で最も収穫が多いのはロータリアンの皆様と知り合い、交流ができたことです。例会に参加し、食事をしながらおしゃべりし、日台両国の異なる見方や文化の特徴を色々交流ができました。様々な職業での話も聞くことができ、とても貴重な勉強になり、自分の考え方や視野を広げることもできました。いままで当たり前のように思っていたことや、あまり関心なかった母国台湾の歴史や文化などのことも皆様のおかげで、改めて知らされ、見つめなおすことができました。

ここにいる三年間は色々な方々に色々なことを教えてくださり、幸せです。これから何らかの形で恩返しをしたいと思っています。「常に感謝、常に奉仕」という気持ちで社会のために貢献していきます。精一杯仕事を頑張り、留学生活で教わったことをより多くの台湾人に紹介し、台日両国の相互理解を促進するために励んで、より多くの方がお互いの国に興味を持っていただけるよう微力ながらも頑張りたいと思います。

皆様が台湾にいらっしゃることがあれば、私ができることなら、時間が許す限り何でも喜んで手伝いますので、通訳翻訳・案内、受付、掃除など何でもできますので、遠慮なく私にやらせてください。皆様のおかげで、今日の私があるのですから。これから奉仕の機会をいただければ、より多くのロータリアンとの交流ができれば、私もどんどん成長になり、いつか皆様のように立派な人間になり、社会に貢献できる人間になれると信じています。ご清聴、ありがとうございました。



4-18) 千葉東RC米山奨学生卓話

奨学生 イピュサン

自己紹介

皆様こんにちは、

改めて自己紹介させていただきます。私はイピュサンと申します。ミャンマーから参りました。現在柏市にある麗澤大学経済研究課で博士2年生として在籍しております。今年の4月から米山記念奨学会の奨学生として推薦されて、ロータリークラブの皆様、そして松戸ロータリークラブで大変お世話になっております。改めて今後とも皆様宜しくお願ひ申し上げます。本日、千葉東RCで卓話の機会を頂きまして誠にありがとうございました。

母国について

まず母国について少し紹介したいと思います。

ミャンマーは中国、東南アジアと南アジアとつながっている。北に中国(雲南省)、西にバングラデシュ、北西にインド、東にタイ、ラオスの各国との国境を接しています。1988年にミャンマーの民主化運動のクーデータにより、国軍は権力を握りました。その後、軍政府はミャンマーの経済体制を全面的に大転換し、これまでのミャンマーの社会主義計画を廃棄し、対外開放、市場経済という経済体制へ移行しました。旧首都はヤンゴンですが、2006年10月によりミャンマー中部にある場所ネピドー(Naypyidaw)に移行しました。使用言語はミャンマー語です。宗教は仏教です。日本より役1.8倍の広さです。

ミャンマーと言えばアウンサンスーチ、ビルマの竖琴や独裁社会というイメージしかなかったですが、最近メディアなどの取り上げにより投資対象として注目が集めるようになりました。

ちなみに私の出身地はミャンマー南にあるベイー(Myeik)という港町です。日本では言うところ沖縄みたいなところ。両親現在でもその町で仕事をしており、私たち兄弟には教育のため中学生のころからヤンゴンにおばさんのところに預けました。

留学の動機

日本への留学するきっかけは大学生ごろある女性の日本語を使用して働いている姿に魅力されたことと、現在在学中学校のハンドブックをみて日本の環境良さ、緑の多さに惹かれたことがきっかけでした。日本にきてから言語はもちろん、食事、気候、文化などの違いに戸惑いながら、それを受け止めように自分自身と戦う日々でした。時が立ち今は日本は私の生まれ育ちところになっております。子供扱い、わがままな女の子から、責任を持つことができる大人女性として私を育ちました。つまり、私はミャンマーで生まれ日本で育てられたんです。

私は2006年に日本に来て今年で来日6年目になりました。麗澤大学に付属する別科日本語研修課程で日本語を1年間勉強し、そこから経済学研究生、修士、そして現在博士課程まで辿り着きました。また、3年前に同大学で出会った中国(大連出身)旦那と結婚し、現在は2児の母親です。2歳半の長女と生まれたばかり4ヶ月の長男と4人家族です。

この6年間、日本で初めての一人暮らし、大学院に進学、そして結婚、出産・・・留学生または女性として、いろいろな人生体験を致しました。もちろん、日本での辛い思いがたくさんありましたが、家族と周りの方々のお陰で



今日の私があります。特に子供の出産によって、日本の良さを改めて再認識することができました。外国人の私に差別なく日本政府からの手当などを頂いて、日本国の平等さと公平さに本当にびっくりしました。皆様の大切な税金ですから、感謝と申し訳ない気持ちでいっぱいです。その気持ちを心がけながら子供たちを大事に育てていきたいと思っております。

ロータリーとの出会い

また、私とロータリークラブとの出会いは南柏ロータリークラブが主導する柏市光が丘小学校の子供たちと麗澤大学留学生との交流会です。そのときから南柏ロータリークラブの妻島様からも大変お世話になっております。また奨学生になって、生活上の経済的負担が軽減され、研究に専念することができました。また奨学生になってからもカウンセラーの松田様ご夫妻と太田様からも私の精神面、私生活まで様々な面で面倒みていただいております。本当に助かっております。例会を出席するたびにロータリーアンの卓話を通じていろいろ勉強になっており、毎回刺激を頂いております。職業を通して社会貢献へと目指してロータリークラブの方針はに感謝、その方針を学び私も、将来世の中に貢献できる能力を身につけたいと決心しました。ロータリークラブとロータリーアンの皆様との出会いは私の人生の宝ものとして今後も大事にしていきたいと思っております。

日本での留学生活を得て、人生にとって大事なことを日々の生活中から学んでいます。その中から私が一番関心したのは日本人の和の心です。もちろん日本には素晴らしい文化や世界に誇る技術などたくさんあります。人のよさも世界で誇れる一つのソフトパワーではないかと私は思っております。謙虚な性格、細かさやまじめさ、マナーの尊重、周りへの気配りや配慮などは世界どこにもない日本人の良さだと私は思っております。日本で生活したからこそわかる日本と日本人の良さを日本国は今後世界にもっとアピールしなければならないと私は思っております。その心は日本のものづくりに関わり、それらを世界に発信することで、日本経済の再建のために大事になってくるのではないかと私は個人的に考えております。日本は近年経済も低迷し、東日本大震災も経験し、日本人一人ひとりも人と人の繋がりや絆の大切さを改めて実感しています。世界にもその大切さを伝える必要があります。

研究紹介

また私の研究について少し紹介したいと思います。

貿易の自由化と国外資本を受け入れるという経済改革を実施しました。また、民間企業の参入も認めることで、これまで隣接国々と密接的に行った国境貿易も認められようになりました。

1989年にタイとの国境協定を結ばれたことにより、中国、バングラデシュ、インド各国間で国境貿易が開かれました。その後も政府は国境間の少数民族反乱や他の反乱軍との停戦に成功し、それはミャンマーが隣接諸国との経済関係を強めることのきっかけとなりました。今ミャンマー経済は隣接国々との関係なしに国内経済は成り立たないと言えます。

以上のことを踏まえて私の現在私の研究について、ちょっとご紹介したいと思います。まずは、アジア開発銀行 (ADB :Asian Development Bank) の主導により発足された、GMS プログラムについて言及したいと思います。



(GMS プログラム＝メコン流域の経済開発と発展を促進する経済協力プログラム)

GMS プログラムは主に域内経済回廊のインフラ整備、そして国際貿易を円滑化させるために欠かせない人材育成と民間セクター競争強化、さらに域内の持続可能な開発を確保する環境保護等を支援するものです。また、そのプログラムはメコン川流域の国々で域内協力の拡大と深化に寄与し、それが相互依存を強化させて均等的な経済発展が促されることが期待されています。

GMS プログラムはミャンマーが隣接国々との経済協力、地域協力への踏み出すための契機となったとも考えられます。1997年にミャンマーはASEAN(東南アジア諸国連合)に加盟し、隣接国々との貿易を強化しました。国境貿易の拡大のもう一つの要因として、現政府は中国(5カ所)、タイ(4カ所)、インド(2カ所)、バングラデシュ(2カ所)との国境貿易協定を結び、両国間の国境取引がスムーズに行うために国境貿易事務所の設置など実施しました。しかし、国境貿易の拡大は国境貿易に関する正確な統計データの把握が困難であることは現実政府が直面している課題でもあります。

私の研究は国境貿易が拡大することによって、国境間の密輸入と輸出によつての経済活動はミャンマーの経済効果に影響を及ぼしているのではないかを明らかにすることです。それを把握するために国境貿易市場、労働市場と金融市場の三つの視点から考察し、それらの経済活動を比較してミャンマー経済についての影響力を統計データによって分析し、明確にすることです。私の研究目的はその結果を踏まえてミャンマー経済成長のための国境管理体制と開放経済政策について出張することです。

現在、ミャンマーは軍人政権から民主化を進み、現実的な開放経済を実現しています。豊かな資源や人件費の安さなどはアジアで残された有力な市場として、また投資対象として注目されています。今年ミャンマーへの入国する日本人の数は中国を超えて第2位にランクインされています。現在、ミャンマーでの日本企業は多く存在しており、熟練した労働力不足や地元との文化摩擦などを日本企業は直面しています。たびたびに賃金向上のために地元労働者らがボイコットを起こしました。私自身も留学して、文化の違いなどに時々なやまされました。納得するまでも結構時間がかかりました。それらの経験に踏まえて、ミャンマー人として、真の日本人の心とその精神を現地の人々に気づかせることがとても大事ではないかと思っております。将来ミャンマー人にも良き日本人の心と強い精神を学ぶことができ、自国の経済発展に貢献できると私は確信しております。今後自分も日本とミャンマー両国の友好と発展にその精神を忘れずに貢献したいと思っております。

感謝の気持ちは言葉で表現することはとても難しいが、この場を借りて、この卓話の機会を提供して下さった時田様にも感謝したいとおもいます。今まで私を支えてくれた皆様、これからも支えてくれる皆様、そして日本国民の皆様にも感謝の意を表したいと思っております。皆様本当にありがとうございます。ご静聴ありがとうございました。



4-19) 東金ビューRC米山奨学生卓話

奨学生 尹閑羅

東金ビューRCクラブの皆様、こんにちは。本日、卓話の機会を提供させて頂きまして誠にありがとうございます。先月新年合同例会ではお世話になりました。私と会うのが初めての方や私についてご存じでない方が多いと思いますので、私について紹介をさせていただきたいと思います。去年4月から東金ロータリークラブでお世話になっている城西国際大学の修士課程1年のユン ハンナと申します。出身は韓国で、仁川国際空港で有名な仁川でございます。仁川はソウルから1時間もかからない近いところにあるます。もともと私はソウル生まれですが、小学校2年ごろに仁川に引っ越し、中学校、高校、大学2年まで仁川に住んでいました。専門大学に入って日本語勉強をしていたところ、実際に日本に行って日本人と交流したい日本の文化を体験したいと思い、大学2年が終わったらすぐ日本へ留学したいと考えました。ところが、経済的の問題ですぐ日本に留学することができませんでした。行けないと思えば思うほど行きたい願望が強くなりました。それで私はまず就職をし、1年間働いて留学費を貯めることを決心しました。その後、会社に入社して働きながら留学先を調べ、留学試験や日本語能力試験を準備してきました。仕事が終わったら図書館に行って夜11時まで試験勉強をする繰り返しの日々でした。その1年間は本当に大変で辛い毎日でしたが、今振り返ってみるとその1年は自分にとって一緒に忘れられない貴重な経験になりました。1年間にかけて日本語能力試験に合格し、半年分の学費が用意でき、日本に来ることができました。私が日本に来たのは2009年です。城西国際大学に2年に編入し3年、4年、修士課程1年、来月3月でちょうど4年になります。この4年間、私には大きい変化がありました。日本に来てすぐラーメン屋さんでバイトを始めました。最初は学費のために始めたのですが、それが味噌ラーメン塩ラーメンなど日本ラーメンを作ることができるようになり、ちょうど1年になった時、その店が中華料理屋さんになってさらに中華料理も作れるようになりました。そして接客語などの言葉を知るようになり、一緒に働く仲間との関係、日本の食文化など学校では身につけられない勉強ができる貴重な経験になりました。もちろんいいことばかりあったわけではありません。言葉の壁や文化の違いから大変なことがあって泣いたりすることもあったのですが、そういうことがあったこそ私が成長できたと思います。バイト代で生活はできましたが学費はなかなか解決できませんでした。悩んでいたところ奨学金を調べました。ところがまだ日本に来たばかりでしたので成績がなく、奨学金を申し込む資格さえなかったのです。ところが私は一応出してみよう。できなくてもいいからとりあえず出してみようという考えで日本学生支援機構 JASSO 奨学金を申請しました。その後、ちょうど半年が経って奨学金の担当者から電話が掛かってきました。奨学生一人が9月卒業するため、半年分の奨学金が残ってあったのです。誰に挙げればいいのか調べたところ私が出した申し込書を見つけ、今までの出席状況や半年分の成績を見たら挙げてもいいと判断し連絡をしたということでした。私は思いました。諦めない人は絶対どこかでチャンスが得られると。その後から私はバイト時間を減らす代わりに勉学に集中することにしました。そして運がよく卒業まで3年間奨学金をもらって学費を払うことができ無事に卒業することができました。もう一つの奇跡が起こったのは卒業する半年前でした。私は大学4年の時、卒業した後大学院に進学して勉強を続けたいと思いましたが、今度はどうやって学費を用意すればいいのかがとても心配でした。その時、学校から1通の電話がありました。米山ロータリークラブから城西国際大学にスピーチの依頼をしたのです。私が韓国人の留学生代表として行って欲しいという依頼でした。私がスピーチしに行った時、会長でいらっしゃったのが今の私のカウンセラー小林先生でした。先生はとても親切でスピーチが終わった後、私にお米とお花をくださいました。ロータリークラブ



の皆さんはとても暖かい人でした。そのきっかけで私はロータリーを知りました。その1年後、私は米山奨学生になりました。私にとってロータリーアンの皆さんは恩人です。もし私がロータリーに出会えなかったら今日本にいなかったかもしれません。この機会にロータリーアンの方に感謝のご挨拶も申し上げます。本当にありがとうございます。私が日本に残ろうとする理由があります。私は自分が本当に欲しい何かを見つけるまで絶対韓国に帰りたくありません。韓国に大学時代で出会った一人の先生がいます。その先生は私にあなたにもいい人生があると、あなたも幸せになれると、幸せになるためには自分が本当にしたいことを見つけるまで一所懸命努力することだと教えてくださいました。その時私はお金がないからできない私はコネがないからできない私には何の才能もないからできないと何かのできない理由をいつも自分自身で作っていたのです。先生は私にお金がないからコネがないからできないなら世の中でできることは何もないとお金があればお金を稼げ。コネがあればコネを作れとあなたが言っているのは言いわけに過ぎないと言いました。私はその言葉を聞いてショックを受けました。その後から私はこれから絶対言いわけしない！これから私は何があっても絶対諦めない。私ができること私が好きなことを見つけ続けよう。続けられる仕事より続けたい仕事をする決意しました。その時の私は日本に行って日本人と交流をしながら日本語をより深く勉強し日本文化や社会の知識を身につけたいと思っていました。それで大学の3年間私は日本人と友達と交流し日本語を教えてもらい大学でまじめに勉強しました。ところが大きい悩みができたのは大学4年の卒業が近づいてきたころでした。私は何の仕事がしたいのか韓国に帰って日本語の先生をしようか私は何のために勉強してきたのか将来に何をしたらどんな人になりたいのかに悩みました。その答えを見つけたのが2011年秋ごろでした。2年間していた中華料理屋さんでのバイトを辞めて他のバイトを探しているところ、知り合いから「韓国語を教えるバイトしてみたい？」と誘われました。そして日本の人に韓国語を教えるはじめました。人との交流が好きな私！先生の説明分かりやすいと生徒さんから聞くと本当に嬉しい、やりがいのある仕事「これだ！私は今まで勉強した外国語教育方法を活かせる仕事」と思って真剣に教えることにしました。ところが、その時私は韓国人だから韓国語は簡単に教えられると思っていたのですが、それは大間違いでした。私が母語をよく知っていないことに気づき、その時から外国語としての韓国語を勉強し始めました。勉強することから日本語と韓国語の違いに気が付き、それがとても面白いと感じ、日本語と韓国語を比較する勉強に興味を持つようになりました。それで私はプロになりたい言語教育分野で専門家になりたいと思い大学院に進学することを決めました。現在、私は大学院で日本語と韓国語そして日本人と韓国人のコミュニケーションについて研究をしております。私が日本に来てから2年間中華料理屋さんでバイトをした時の話です。ある日バイト先の店長から電話がかかってきました。店長は「ユンさん。今週金曜日田中さんの代りに来てもらえないかな。田中さんが風邪ひいて来られないと電話があったの。代りに来てもらえる」と私に依頼をしました。ところが私はその日用事があったので「すみません。その日は用事があるので行けません。すみません。」とはっきり断りました。断った後から店長と一緒に働いていた仲間の態度が変わりました。皆に嫌われているのかなと思ってとても悩んでいました。私が断ったからなのかなと思っていましたが何か他に理由があるのではないかと思い、親しい日本人の友達に状況を説明し何が行けなかったのか聞いてみました。日本人の友達は断る時ははっきり断らないで、「すみません。その日はちょっと、、、事情があって、、」と困っているということを相手に気付いてもらう方がいいよ。はっきり断っちゃうとちょっと良くないかもと言ってくれました。



私のはっきり断ったのは韓国の社会では何かを頼まれた時、相手に余計な期待をさせたくないため、はっきり断るのです。曖昧な言葉で言うと、逆にあの子やる気ないのかなと思われるのです。はっきり断ると、「じゃこの子はできないから他の子に頼もうと思うのです。今まで私は日本語の文法を中心に言葉を勉強されたため、実際日本人とコミュニケーションをする時、その場面に適切な言葉遣いは身につけていなかったのです。誰も断るどう断ればいいのかそして、何かを頼む時、誘う時そんなどんな表現を使えばその場に相応しいのかを知らなかったのです。それで私はコミュニケーションは「だれがだれにどの状況に」が最も重要だということに気付かして今その研究を進んでいるところです。

私は今本当に幸せです。自分が勉強を続けたいと思って大学院に入り、自分がしたい勉強をしています。そして私の専攻を活かして ECC 外国語学院で非常勤講師で働いています。そして東金商工会議所で韓国語先生で個人レッスンをしている生徒さんが5人もいます。そして来月国3月1日から31日までちょうど1ヶ月間日本国際交流基金の助成を受け、城西国際大学の学生代表として韓国のブサンにある東西大学に日本語先生として派遣させていただくことになりました。今回初めて韓国で日本語を勉強する生徒に日本語を教えることになりました。私も日本語がまだまだです。先生として行くのがとても恥ずかしいのですが、4年にかけて積んだ力を発揮できる機会がやっと得られましたので本当に嬉しいです。何よりも今まで夢見てきた大学の教壇に立てるのがとても楽しみです。この機会を自らの夢に近づくための第一歩にしたいと考えております。4年前の私とは全然違う私になっています。4年前の私は自分が何のために生きているのかの自覚もなかったです。ところが今の私は自分の夢に近い生活を毎日過ごしています。これはロータリーアンの皆さんのおかげだと思います。もしロータリーアンの皆さんがいなかったら私は勉学に集中することができなかったと思います。学費を稼ぐために仕事ばかりしていたかも知れません。皆さん。私の夢を叶えるのに助けてくださって本当にありがとうございます。皆さんの奉仕精神を一緒に忘れず私も皆さんのように社会に奉仕できる人貢献できる人材になるためにこれからも頑張っていきたいと思っております。後1年ですが、よろしくお願い致します。ご清聴、ありがとうございました。



4-20) 我孫子RC米山奨学生卓話

奨学生 楊鎮深

我孫子ロータリークラブのみなさん、こんにちは。

本日、みなさんの前で卓話する貴重な時間いただきまして本当に光栄と思っております。

だたどしい日本語でわかりづらいところもあると思いますが、なにとぞよろしくお願ひしませう。

◇自己紹介

私の名前はヤンジンシンと申します。韓国の大田という田舎から参りました。大田というところは韓国をよくご存知の方もあまり聞いたことはあるけれど、どこにあるか知らないと反応をお見せするでしょうけど、韓国のソウルとプサンの真ん中に位置している小さい都市です。実家はそこからまた1時間ほど奥のほうに行かなくちゃいけないんですが、いかにも田舎であろうとご見当がつかましようか。そうです、田んぼだらけの田舎で犬があちこちで吠える、そして人の笑え声が絶えない町です。そこで、私は5人兄弟の末っ子で生まれまして、昨年12月30日、やっと結婚に成功しました(笑)。まだ、2ヶ月あまりの新婚生活を送っていますが、あまりにも幸せそうにしているとこの場の空気が冷たくなるのではないかと思ひ、新婚の話はあきらめます(笑)。

◇留学動機

次は、私が来日したきっかけをみなさんにお話したいんですが、私は韓国の大学で観光経営を専攻して外国語能力、特に英語能力が必須とされていて英語の勉強が離れなかつたでした。英語のストレスで心身ともに疲れていましたが、学校で日本語授業を聴講する機会があつて授業に入つたら年寄りの日本人先生が授業をなさっていました。その先生はとても親切で分かりやすく日本語を教えてくださいましたんですが、日本語という言語を勉強していると面白くて、楽しくて、たまらなかつたです。言語にも自分と適性が合う言語があるということを知りましたが、私は、日本語そのものに惹かれ、親の反対にもかかわらず日本に留学することになりました。

◇留学生活

2004年待ちに待った留学生活が始まりました。最初は日本語学校から通ひ、日本語を勉強しました。ときには、日本語の勉強に裏切られたと感じたときもありましたが、その大変さは日々バイトで生活費や学費を稼がないとこの留学生活が続けないような大変さに、日本語の勉強の大変さなんて比するものではありませんでした。絶対、親には手を借りないと思つたので、一日2つのバイトを遣りこなしながら大学に入学、そこから、また上を目指して大学院に進みました。学部から修士1年生まで文部省からの奨学金をいただきまして、家賃は心配しなくてもいいほど大変助かりました。しかし、学費やその他の生活費のためにはバイトは欠かせないものでした。それから、修士2年生になって、米山奨学生に選ばれまして、自分の勉学に専念することができました。そして、さまざまな地域にも行き、その土地の人々の温かさにも触れることもできました。これは、今までの生活が留学という意味が自分の中で段々と薄れて、目標に対する意気込みが落ちていたころ、米山奨学金のおかげで今の自分を振り返ってみることのできたのです。さらに、奨学金がみなさまの寄付金であることが、言葉では言い表せないほど胸が熱く感じるばかりでした。

留学して本当によかつたと思ひました。米山に出会って、米山奨学生になって、自分の人生で最高の勉強になり



ました。そして、かけがえの無い思い出にもなりました。

みなさんのお蔭様で私の人生観も変わりました。「人の‘ためになる’人間になろう」!

そして、今の勉強を頑張って、日本と韓国がよりよい友たちになれるよう役に立てることができるように頑張ります。

日本語が好きで日本へ来ました。しかし、今は日本が好きですべてが好きになりました。

ご清聴ありがとうございました。



4-21) 鎌ヶ谷RC米山奨学生卓話

奨学生 胡中華

皆様、こんにちは、私は胡中華と申します。中華人民共和国の中華です。国の名前と同じなので、いつも「珍しいお名前ですね」と言われています。そうではなくて、私は兄弟の真ん中の子で、華やかなの意味で母は私の名前を中華にしました。日本に来て3年目です。今は明海大学応用言語学研究科博士前期2年生です。浦安ベイロータリークラブでお世話になっております。私の故郷は遼寧省遼陽市です。とても小さな街なので、日本人の方はほとんど知らないと思います。場所は北京より上で、瀋陽をご存知の方がいると思いますが、その町の隣です。冬はとても寒くて、雪がよく降ります。私は一人子で、三人家族だったのですが、高校2年生の時、父がなくなり、母は今中国でおばさんと一緒に暮らしています。

私は中国の大学で日本語上級翻訳について勉強していました。今大学院で第2言語学習得や日本語教育法、社会言語学を勉強しています。2011年3月11日の東日本大震災のきっかけで、災害時の「やさしい日本語」を研究課題にしました。なぜなら、震災が発生したとき、多くの外国人は日本語の震災情報が理解できなく、パニックになったり、帰国したりしてしまいました。緊急時の情報をどの程度効率よく伝達できるかが、生と死を分ける決定的な要因だと考えているからです。研究している内容は日本語初級者にとって難しい災害情報の言葉を新聞やニュースから抽出し、それらの言葉を日本語能力試験3級レベルの文法と単語に言い換えます。例えば、「炊き出し」は「温かい食べ物を作って 配る」に言い換えるようなことを研究しています。

私は子供の頃から、日本のアニメがすきで、特にドラえもんや一休さんが大好きです。その時は日本の桜、富士山、着物、庭付きの建物はとても印象深かったです。日本の技術は世界に誇ることも知り、小学生の時愛用していた電子ピアノはヤマハさんのものでした。したがって、大学に入って日本語を勉強することに決めました。私の大学には日本を留学した経験がある先生がたくさんいて、いつも先生たちは私たちに日本の留学経験を語ります。その時は、日本人は優しく礼儀正しいです。また、経済もとても発展していて、環境もよいなどのことを知り、ますます日本に行きたくなりました。大学卒業後、生活費と学費は全部自分で稼がなければならないことを覚悟し、日本に留学する決心を固まりました。がんばれなんとかなると思い、日本に来れば、必ず自分が成長できると考えました。

日本に来て、日本人の優しさを肌で感じました。一番忘れられないことは、日本に来たばかりのとき、道である女性の方に本屋に行く道を尋ねたときのことです。その女性はとっても親切で、口で説明すると私がいかにわからないかかもしれないと思って、わざわざ私を本屋に連れて行きました。とても感動して、感謝しています。また、ある日、私は友達と一緒にデパートのベンチに座っているとき、隣のおばあさんは私達と喋って、そして、友人からもらったばかりの胡瓜を私たちにくれました。とってもおいしい胡瓜でした。そのおばあさんにとっても感謝しています。それ以外も、日本のいいところがたくさんあります。日本の環境がよいで、町がきれいで、冬でも華やかな花を咲いています。電車はとても便利で、どこのトイレもキレイで、年寄りや体の不自由の人のために工夫した施設もたくさんあって、とても暮らしやすいと考えます。また、日本人は真面目で、アルバイト先や説明会にあった社会人はみんなバリバリ働いて、感心しました。日本に留学して、日本のいいことを拝見させて、それを学んで、本当によかったと思います。

ロータリー米山記念奨学金を申請し、まさか自分が合格できると思わなかったです。合格したことを分かったとき、空を飛びたいほど嬉しかったです。ロータリー米山と出会って、私の生活が変わりました。いいえ、私の運



命も変わったと言えます。奨学金をいただく前は、生計を立てるために、たくさんアルバイトをしていました。一番大変な時は、一日三つのアルバイトがあって、早朝が終わって、また昼のアルバイトがあって、そして、夜 10 時までやっていました。去年はロータリー米山奨学金をいただくことができ、アルバイトを減らして、勉強や研究に専念することができました。そして、私のカウンセラーとロータリアンとの絆は私の一緒に宝だと思います。私は毎月一回浦安ベイロータリークラブの例会を出席し、皆様の奉仕の精神を身に染みます。皆様はとても優しく、特に私のカウンセラーはいつも私のことを考えてくれます。去年夏の花火のときは、私のカウンセラーは船で私と私の友達を載せてくれて、一緒に東京湾で花火を観賞しました。奥様も私のためにわざわざおいしいお弁当を持ってきてくれて、実は船をダメなのに、私達と一緒に乗って、降りたときは吐きました。私のためにわざわざ、本当に本当にありがとうございますと感謝しています。父がいなくなり私の運命は悪いなあと思いました。しかし、こんなたくさん親切な人と出会って、こんなに優しくされて、愛されて、私は幸せだと思います。今までは学校の先生だけは人を育つと考えました。しかし、ロータリアンと出会って、その考え方が変わりました。ロータリアンは私たちのやさしい心を育ちます。本の知識を教えるではなくて、立派な人になれることを教えてくれます。ロータリー米山記念奨学金はお金をいただけるだけではなく、たくさん学ぶことができます。例えば、このようにみんなの前で話すチャンスがたくさんあって、これを通して自分の日本語能力が高めたと感じております。また、ロータリアンと接して、自分の視野も広がってきました。奨学生と友達になって、寂しくなくなりました。一年間のロータリーの生活は貴重な経験です。卒業しても、私は学友会に参加します。私は大変な時に助けてくれたロータリーに恩返し、自分の力で誰かに役に立てばと考えます。中国人のロータリーの奨学生が多いけれど、中国でのロータリー米山学友会をまだ設立していないことは残念なことです。私は近い将来中国の遼寧省にも米山学友会を設立することを期待しています。



4-22) 小見川RC米山奨学生卓話

奨学生 チャンニャットアン

私は千葉大学のチャンニャットアンと申します。ベトナムのホーチミン市から来ました。ホーチミン市はベトナムの一番大きい都市で、ベトナムの経済中心の町です。父はベトナム大学の日本語学科出身なので、長年日本の企業と関わる仕事をしています。そのため、私はお父さんやお父さんの日本人の友達に子供のころから日本のことをよく聞かれました。そのとき、日本の相撲や侍などがすごく興味を持っていました。それに、子供のころ、日本の漫画ドラえもんやドラゴンボールなどがすごく好きで、毎週新しい漫画が出るのを楽しみにしていました。私が日本の漫画好きであることを知り、お父さんの友達からドラえもん漫画が2冊もらいました。すごくうれしかったです。まだ日本語がわかりませんでしたが、絵だけで楽しんでいました。それは私と日本語の初めての出会いでした。そのとき、もし日本語がわかれば、ベトナム出版社を待たなくても、日本の漫画を好きに読めると思いました。

高校を卒業した後、ベトナムのホーチミン工科大学に入学しましたが、日本に留学したくて、留学し方を調べました。偶然、ドンズー日本語学校の日本留学プログラムを見つけた。その内容は日本でアルバイトしながら日本学校を通ったあと、日本の大学を勉強することが出来るというプログラムでした。子供ころからずっと勉強しか知らなかった私は最初ちょっと迷いありましたが、留学したい気持ちのほうが強かったため、決心しました。ベトナムの大学を中退し、日本にきました。私の最初のアルバイトは新聞配達でした。今振り返ると、本当に悲しいことや辛いことと共に楽しいことや嬉しいことなど様々な思い出があり、自分にとってこの時期は人生で一番の壁だと思っています。ベトナムにいるのとき、覚悟しましたが、思った以上、仕事が辛かったです。毎日 300 部の新聞を配達しないといけません。日本の新聞配達は、ちゃんと時間帯に新聞を届けないといけないし、朝早くから起きないといけないし、新聞が重いし、とても大変でした。特に雨や雪の日新聞がビニルに入っているため、新聞が滑りやすくなり、配達用自転車が倒れやすくなりました。そのとき全てを諦めて、ベトナムにすぐ帰りたぐらいと思いました。でもその経験を乗り越えたからこそ、今は簡単にあきらめない精神を鍛えたと思います。メンタル面だけでなく体力面も結構鍛えられたと思います。

日本に来て、最初感動したのは日本の技術です。スイカがすごい便利で、タッチするだけで切符の代わりになります。私が感動しました。やはり日本がすごいと思っていました。具術が好きの私は秋葉原に来て、びっくりしました。パソコンやカメラや電気部品などさらっと並んでいました。「なんだろここは」目が丸くなってしまいますぐらい、驚きました。技術だけでなく、日本の文化も古くから守られています。いろいろなことで、心から響きました。でも、今でもまだわかっていませんが、どうやってこんなに面白い漫画を描けるのか、どうすればすごい発想力・想像力がもてるのか。これからも探っていきたいと思えます。

現在私は千葉大学院融合科学研究科ナノサイエンス専攻に所属しています。私が主に有機半導体薄膜の電子状態について研究しています。皆さんは有機 EL の言葉はご存知でしょうか。それは有機発光ダイオードのことであり、最近応用された有機 EL のテレビも出ていました。その有機 EL ディスプレーの構造は陰電極・電子注入層・電子輸送層・発光層・正孔輸送層・正孔注入層・陽電極などいろいろな層かなります。それぞれ層の間に何が起こるのか有機デバイス性能向上するために研究の目的です。私の研究テーマは「有機半導体薄膜における電子状態とその分子軌道の可視化」です。いわゆる、基板に有機分子を蒸着したとき、その有機分子の電子状態はどうなるのか、調べます。その電子状態のグラフからその結晶の物性をいろいろ議論する



ことができます。

アルバイトの経験があったからこそ、お金を稼ぐために、どれぐらい苦勞するのか、よくわかっています。米山ロータリー奨学生になって、本当に心から感謝しています。今はお金のことはあまり心配しなくてもいいし、もっと勉強に専念できます。私の研究生活の特徴は一度測定を始めると、途中でやめることは出来ません。連続しないといい結果が出ませんから。ですが、正直米山ロータリー奨学金に受かったことは自分のラッキーだと思います。勉強の面はややできるタイプと思いますが、交流の面では他の学生より劣ると思います。声も小さいし、会話をするときいつも緊張して自分の考えることをうまく伝えられないことが多いです。そんな中、毎月例会に参加するとき、スピーチをしますが、いつも声が小さくてみんなが聞こえませんでした。でも叱れることはありません。いつも励ましてくれます。こういう場合はこうすとか、こう話すとか、私が家族の子供のように心配してくれて心から感動しました。これから就職活動の始まりだし、自分を PR しないといけないし、いくら優秀の人材でも他人にうまく見せないとだめだと思いますから、もっと自分の会話能力を修復しないとイケません。これからロータリー奨学生の誇りを持って社会に出たいと思います。

米山ロータリーのおかげで、こうして日本で勉強に専念することが出来ます。心からありがとうございます。これからも、たくさん交流を広げて、いい思い出を残しますように、頑張ります。まだ皆様によろしく願いいたします。



4-23) 茂原RC米山奨学生卓話

奨学生 李恩京

茂原ロータリークラブの皆様、こんにちは。2012年4月から本年3月までの一年間八街ロータリークラブでお世話になっております李恩京と申します。

私は現在、千葉市美浜区にある神田外語大学外国語学部国際コミュニケーション学科で学んでおり、まもなく卒業する4年生です。

出身は韓国で、朝鮮半島の南に位置する釜山です。ところで皆さんは、釜山をご存知ですか？簡単に私の住んでいた釜山の紹介をしたいと思います。釜山は韓国の首都であるソウルの次に人口が多く約340万人が住んでおります。ちなみにソウル近郊の人口は1000万人を越えており、韓国の全人口が5000万人ですので、この二都市だけで、約28%を占めていることとなります。ソウルと釜山間の移動では昔は特急で約5時間かかっておりましたが、フランスのTGVの技術を導入し、高速鉄道を作った結果、現在は約2時間20分で結ばれています。また韓国国内の移動では、バス網が発達しており、都市と都市を網の目のように結んでいるので移動する際には、とても重宝します。釜山は港町で貿易分野では世界5位にランキングされています。食べ物では魚の刺身などが有名です。

日本から釜山までは福岡が近く、高速船に乗れば3時間弱で着くことができ、九州地方を観光する韓国人も多いです。また千葉県からは成田空港から大韓航空などの大手航空会社に加え、韓国のLCCであるエア釜山等も就航しており、2時間弱で着くことができます。先日エア釜山のキャンペーン価格をみたのですが、往復飛行機代金で2万円を切っているチケットを見ましたので、日本国内旅行より気軽に行けると思いました。また韓国と日本には時差がありません。機会がありましたら、ぜひ韓国の釜山へ足をお運び下さったらとてもうれしいです。

私は2007年4月に来日し、最初は東京竹ノ塚にある日本語学院で2年間日本語を学びました。日本への留学を決めた理由ですが、高校時代から日本に興味を持ち始め、韓国の教育では高校生から第二外国語を選択する必要があるため、日本語を選択し勉強しました。高校卒業後、韓国の大学では日本文学学科に入学しました。しかし、本当の日本を知るためには、やはり日本で長い間生活をするのがいいであろうと考え、韓国の大学を中退し来日しております。その後、2009年4月に神田外語大学国際コミュニケーション学科に入学しました。現在は、大学近くの幕張で生活しております。

自分が神田外語大学の国際コミュニケーション学科に入学を決めて背景ですが、日本の大学に入ってもやはり日本語以外も勉強したいと考え、英語を体系的に学ぶことが可能であり、更にレベルに合う授業があると聞いたからです。また海外との提携大学が小規模大学ながら豊富で、とても多くの外国人がこの神田外語大学に一年間などの短期留学をしていること、さらに私のように私費で留学をしている外国人青年も多くいるが、日本人の学生が大多数を占めていること等が決めてとなりました。

大学に入学してからあっという間に4年間の時間がすぎ、まもなく卒業となりますが、神田外語大学で勉強することができていまではとても良かったと思っております。この学校で学んだことを生かし、卒業後は韓国と日本。また韓国、日本と他国を結べるようにしていきたいと今は思っているところです。

さて、ここからは今までの日本での大学生活を簡単に紹介させていただきたいと思っております。



大学での生活はとても楽しく、学業はもちろんのこと、様々なボランティアを行ってきました。大学の休み期間やその後の休日を利用しての、成田空港案内ボランティア。これは成田空港を利用する日本人や外国人に対してのサービスで、私の場合韓国語、日本語や英語を利用して、空港内の案内をしました。困っている外国人の方々には大変好評だったのですが、困っていそうな日本人の方に近寄ると、私から逃げてしまったことがあったので、ちょっとショックなこともありました。しかし、色々な経験をすることができてとても楽しかったです。また千葉商業高等学校で韓国語を教えることもしました。これは大学からの紹介で行ったのですが、4 回ほど商業高校を訪れ、韓国語の初歩的なことを教えました。日本の高校生を触れ合う機会でしたのでとても楽しみにいったのですが、最初は緊張していた学生さんも、最後にはとても打ち解けることができ楽しい時間となりました。また大学近くの小学校に訪問し、異文化理解授業のお手伝いも行いましたが、そこでは日本の小学生の金銭感覚にびっくりした記憶があります。最初は私がその時につけていた時計の値段当てクイズから始まりましたがその後、自分たちがいまもっているサイフの中身の値段競争となっており、そのときに話題になった全員、サイフの中に入っている金額が私のサイフの中より多かったです。しかし、みんな無邪気な子供たちで楽しみながら交流をすることができました。

また母語ではない日本語になれるために自分の趣味に関係したアパレル業界で接客のアルバイトを行いました。洋服のコーディネーターには自信をもっており、仕事中に着ている服は、よくお客様に「あなたと同じ洋服がほしいです」といわれていました。日々のアルバイトが生の日本語を勉強する良い機会となっており毎日を楽しみ過ごすことができておりました。

大学での授業では、主に言語学を中心に授業を受けてきました。留学生ですから日本語の授業はありましたが、特に難しくなく、英語や中国語の勉強をしてきました。また異文化理解として東南アジアの宗教について集中的に授業を受けてきました。韓国も宗教は仏教かキリスト教が多いので、宗教の授業は刺激的で良いものを学べたと思っています。また韓国についても勉強をしました。韓国の勉強を日本ですることが不思議だと思方もいらっしやると思います。ですが、自国をより客観的に把握することができ、さらに今までとは違った視野を持つことが出来るようになりました。特に両国間の歴史観についてはお互いの立場に立って考えることができるようになりました。また、歴史の教科書内容は両国においてかなり異なっており、自分が中学校及び高校時代に学んだ内容は頭の隅におき、思い込みや偏見を持たずにそのまま素直に聞く努力をしました。そして自分なりに両国間の歴史の考え方や立場を理解することが出来たと思っています。

しかし、2012 年に入り領土問題を始め日韓の国際関係が急激に悪くなりました。自分自身はこの問題についてはあえて避けたいと思っている分野です。またこれは私だけでなく日本に在住している多くの韓国人留学生が同じような考えをもっている問題だと思っています。

自分にとって今や韓国だけでなく、日本も私の故郷となっており、私と離すことの出来ない存在であります。私は両国を同じように愛しており、今は中立的な立場になりたいと思っています。

ただ、一人の人間として国の発展及び国家間の関係が少しでも早く円満そして平和になることを私は信じ、また私がその一部になればと思っています。

2012 年は日本と韓国の国家関係の変化が起きてしまいましたが、私には良い意味での変化がありました。それは米山ロータリー奨学生になれたことです。大学 3 年生までは勉強とアルバイトの両立を行っておりましたが、



精神的にも弱くなることもあり家族がいる自国に帰国をしたいと思ったことが数度ありました。ですが、その時にはいつも自分のことを応援してくれる日本人や学友の留学生がいました。しかし 2012 年は私の世話クラブとなって下さった八街ロータリークラブのみなさん、そして多くのロータリアンの方々と出会うことができ、色々なことを学ぶことが出来ました。

大切な奨学金を頂いたお陰で、大学の勉強もさることながら、語学関係の資格を取るための勉強する時間を設けることができました。日本語能力試験、BJT ビジネス日本語テストや中国語の資格の勉強に集中することが可能となりました。

また米山ロータリー奨学生となったこの一年間は、いままでの日本での生活の中で一番たくさんの人と出会うことができ、様々な人生の生き方があることを日々深く感じる事ができました。何よりもロータリアンの方々とコミュニケーションをとることで、とても有益な交流が多かったと考えております。

5 月のオリエンテーションから今まで様々な行事がありましたがその中でも印象に残った行事が、2012 年 10 月 20、21 日に行われた地区大会にて第 2790 地区米山記念奨学会委員長である平野さんからの依頼で林柱寅 RI 会長代理ご婦人の通訳努めさせて頂いたことです。今になって考えて見ると、この二日間は本当に大変でしたが、自分にとってよい経験になり、自分にたいしての自身をつけてくれたものでした。

また、人前で話すことが大変苦手だった私ですが、毎月八街クラブの例会で一ヶ月の自分の活動報告を行った結果、少しずつ人前で話すことに対する苦手意識がなくなってきました。そして報告用に一ヶ月を振り返ってきたことで、毎月の反省をすることができ、さらにこれを基に新たな計画を組むことが出来るようになりました。

さらに他の米山ロータリー奨学学友生とのコミュニケーションを深めることで、より自身のコミュニケーション能力の向上することができ、また学業及びその他の活動を幅広く行っている米山ロータリー奨学生学友生の皆さんの様子を見て自分も頑張る気持ちになりさらに、自分を見つめ直すきっかけにもなりました。

このようにロータリアンの皆様と交流をすることで、私自身がこの一年間で大きく成長していると思っており、心の底から深く感謝しております。

一年間の米山ロータリー奨学生となり、今月で卒業となりますが、感謝の気持ちはとても一言では表すことが出来ません。

これからは、日本と韓国の人的交流の架け橋となれるように少ない力ですが努力を行っていきたいと思っております。

最後になりますが、本日このような貴重な場を設けて下さりまして、誠にありがとうございました。ロータリーと共に成長したこの一年間、とても大切な時間になりました。

これからも宜しくお願いいたします。

ご清聴ありがとうございました。



4-24) 千葉若潮RC米山奨学生卓話

奨学生 康有美

今日は、私が受けたロータリー米山記念奨学生選考試験とその流れについて簡単に説明させていただきます。それでは、よろしくお願いいたします。

まずは概略からですが、選考は大きくわけて 3 つの過程が必要となります。

1. 学内での推薦
2. 地区選考委員会に提出する書類の準備
3. ロータリー地区選考委員会の選考試験

まず、学内選考に応募するためには応募資格を満たしている必要があります。実際にはもっとありますが、ポイントとなることは大体この 3 つです。万が一、ビザの関係で留学の在留資格がまだもらえてなかったり、出国のときにうっかり再入国許可書を取ってなくて資格が取り消された状態になっていれば、応募できなくなります。そして年齢の制限もあります。学部生なら別かもしれませんが、大学院の学生であれば事情によっては引っかけります。

1. 国籍
ー日本国籍保有者ではない
2. 在留資格
ー「留学」、「研修」、「文化活動」、または「難民」
3. 年齢

ー40 歳未満の者

次に学内選考に関してです。ロータリーの委員会の指定校であれば、学内で一定数の学生を推薦者として出すことができます。千葉大では毎年、20 人程度を推薦できるだそうです。主に GPA などの成績、学年などを考慮して選考しているそうです。こうして学内推薦者として選ばれますと、次に提出書類の準備を始めます。たとえ学内で選抜されたとしても、最終的に選考されるのは、その半分若らしいです。なのでこれからが本番となります。その提出書類ですが、種類が 8 個と多いです。

- ① 地区奨励ロータリー米山記念奨学生申込書
- ② ロータリー米山記念奨学金被推薦者承諾書
- ③ 在留資格を証明する書類：
「住民票」または「登録原票記載事項証明書」
- ④ パスポートの写し
- ⑤ 在学証明書
- ⑥ 日本における前年度の成績表、あるいは最近の成績表(コピー可)
- ⑦ 指導教員の推薦状
- ⑧ 研究計画書(当会所定用紙使用)
- ⑨ 小論文(当会所定用紙使用)
- ⑩ 面接確認用シート

研究計画書と小論文ですが、学部の学生はまだ自分の研究のテーマを持っていませんので、指定のテーマで



書くこととなります。

それぞれ、

⑧ 研究計画書

「現在の学習内容と卒業後の進路」

⑨ 小論文

「なぜ、留学先に日本を選んだのか。日本留学を終えた後のあなたの将来計画は」でありました。

大体 10 月の頭くらいまで、一ヶ月の間でこれらの書類を揃えて東京都のロータリー米山記念奨学会へ郵送します。

そしていよいよ選考試験です。

書類を郵送して約 2ヶ月後、毎年 12 月初旬～翌年 1 月末に選考試験が行われます。私のときは、京葉銀行文化プラザが試験場でした。

まずは試験場への到着と同時に、小論文のテーマを渡されます。600 字で確か 30 分程度でしたので、かなり面接の時間ぎりぎりまで終わらせました。テーマは来日してからの日本の印象です。

そして個人面接が行われます。大体 5対1で、10～15 分程度行われます。

その質問の例ですが、このように一般的な生活に関わる質問が多かったです。雰囲気は穏やかで、話しやすい感じでした。場の雰囲気がとてもよかったお陰で、私も割と楽しく話させていただきました。

*自己紹介

*自分の長所・短所

*最近日本に起こったことの中で、気になったこと

*(母国とくらべ)文化の違いを感じたとき

*旅行に行った場所の中で、記憶に残ったところ

*卒業したら、どうする？

*将来どの国で働きたい？

*趣味は、何ですか？(つまり、それを今でもやっていると?)

そしてこれらの過程が全て終了すれば、合格発表待ちとなります。面接からさらに一ヶ月後、まず留学生科からメールがきて、書類を受け取るように案内されます。そしてその書類の指示に従って、米山奨学会のサイトで登録すれば、奨学生としてスタートすることとなります。

以上が私の発表となります。プレゼンを準備しながら私自身も当時のことを思い出すことができ、いい経験となりました。ご静聴、ありがとうございます。



4-25) 銚子RC米山奨学生卓話

奨学生 金ユリ

<日本と私>

去年は私にとって、とても有意義な一年でした。ロータリー米山記念奨学生に選ばれ、銚子以外のところで、様々な人々に出会い、世界への視野が広がりました。奨学生の面接を準備しながら、日本に来てから今までの自分のことについて振り返ってみる機会になり、知らなかった自分のことにも気づくことができました。

しかし、東京での実務実習があったので、ロータリー米山記念奨学生としての活動はあまりできなかったのもとても残念でした。ロータリーの方々とは会えなかった間に経験したことと、その中で私が考えたことについて、これから少しお話ししたいと思います。

病棟実習を行ったときの話です。私は初めて入院患者さんの服薬指導を行う予定でした。その患者さんは今まで一度も入院されたことない 40 歳の男性の方でした。5 年前から糖尿病の症状が見られましたが、仕事が忙しく、長い時間放置されていたので、かなり糖尿病が進んでいる状態でした。私が患者さんに伺う前にはすでに医師や看護師の方から診療や様々な検査をされていて、かなり疲れているようには見えましたが、服薬する前には必ず確認すべき事項があるため、患者さんに質問をしなければなりません。

そこで、患者さんは「医師や看護師にすでに聞かれたことをなんで実習生に繰り返してまた聞かれなければならないのか」と怒り始めました。それでも、薬を用意する前には確認すべきことがあるので、質問を続けましたが、患者さんに「あなたの質問の意味がわからない」と言われました。自分なりに分かりやすく説明したのに相手に伝わらなかったのかと思ってかなり落ち込みました。指導薬剤師からは「患者さんが初めて入院された方であり、ただ、タイミングが悪かっただけで、服薬指導はできているから心配する必要はない」と慰めてもらいました。それでも私はやはり外国人だから、話が上手く通じなかったのか、説明の仕方が悪かったのかととても気になりました。

後日、他の患者さんを受け持つ予定でしたが、私は昨日の患者さんを担当したいと言いました。このままでは、逃げてしまうような気がして他の患者さんを担当する自信がなかったためです。そして、その患者さんに理解してもらうために今回は分かりやすいグラフや絵を見せながら、今後の服薬計画を説明しました。昨日よりは機嫌が良かったのか、きちんと話を聞いてくれました。それから担当する度に、患者さんに実習生としては答えられないような難しい質問をその患者さんからされて、かなり困りましたが、その次の回、指導のときに患者さんに説明するようにしながら、指導を続けました。

そして、患者さんの退院日になり、退院時の指導を行うため、患者さんのもとに伺いました。「患者さんの難しい質問に答えるために、ものすごく勉強をしていたので、糖尿病に関して深く理解することができました」と患者さんに感謝の気持ちを伝えました。



そしたら、患者さんは実習生としてもっと頑張って立派な薬剤師になるように応援すると言ってくれました。そういわれた瞬間、私はとても感動しました。病院薬剤師がやりがいを感じる時は自分が担当していた患者さんが元気で退院することになり、感謝の言葉を言われたときではないかと感じました。最初の指導のとき、もし諦めていたら、このような気持ちは味わうことができなかつたと考えました。そして、私は最後の症例報告会でこの患者さんに関する発表を行い、無事に実習を終えました。

私はこの実務実習を通して、とても成長をしたと思います。自分の患者さんを指導することで責任感を持って、分からないことがあっても、まず、自分なりに考えてみることを学びました。今までの私は分からないことがあつたら、深く考えず、周りに助けてもらうようにしてきました。しかし、日本に留学してからは、両親や友達から離れて、新しい環境での生活を始めるようになり、どんなことでも一人でしなければなりません。入学する前には、ひらがなから学び始め、6 カ月しか勉強してなかつたので、最初は学業や留学生活でかなり苦労しました。私が初めて薬学科に入学した韓国人でしたので、まだ、先輩もいませんでした。でも、後から入って来る後輩や大学の韓国留学生に対するイメージを考えると、絶対諦めてはいけないと思いました。

ですから、後輩には自分が知っている限りでは、できるだけ沢山のことを伝えたり、助けたいと思っています。後から入って来る後輩たちには辛い思いをさせたくないからです。

そのような思いで、5 年を過ぎてきました。日本に来て、私が学んだことは、責任感、最後まで諦めず頑張ることです。あと残りの一年間、ロータリー米山記念奨学生として、千葉科学大学の薬学科に入学した初めての韓国人として、見事に卒業したいと思います。